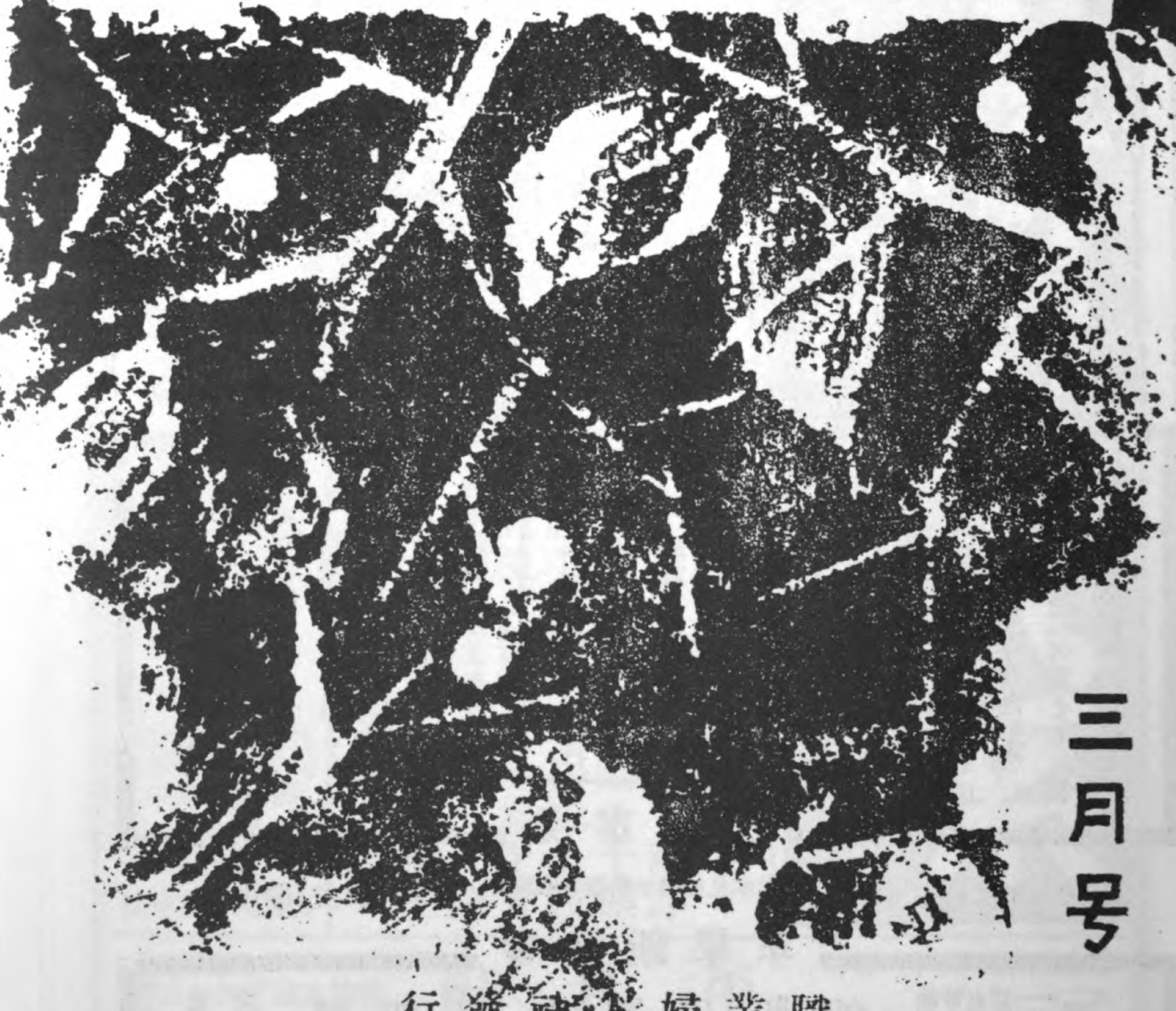
婦人運動

第7卷　第3號



三月号

職業婦人社發行

大正十五年十一月二十二日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）　昭和四年二月二十八日印刷納本、同四年三月一日發行　第七卷　第三號

家事科研究の最高權威書！　甲斐久女史の五大名著

家事研究大系

第二巻　被服裝飾篇

甲斐久子女史著

菊大判五二八頁クロース最上製
口繪三色版數葉、挿畫多數

定價四圓八拾錢

凡そ今日ほど服飾の多樣複雜な時代はあるまい。其の形式に於て和洋支の各樣あるは勿論その材料、其の形態、色調等に至つては誠に千態萬樣、何人も一々之れが調製、整理、保存等に就て統整する知識と技術とを有するものはあるまい。本書は實に甲斐先生が西陣の本場を背景として永年學理的實際的に心血を注いで研究されし成果にして、全人類のあらゆる服飾に關し組織的體系を以て記述されしもの、家政上の寶庫たるは勿論受驗用、教授用として絶好無比の良書である。

家事研究大系（第一巻 食養篇）
菊判七〇〇頁
定價四圓八〇錢
送料廿七錢

現代作法精義
菊判四〇〇頁
定價三圓八〇錢
送料廿七錢

系統的家政講話
菊判八三〇頁
定價七圓
送料卅七錢

現代作法書
菊判二〇〇頁
定價九拾錢
送料十八錢

東京市麴町區下六番町
振替東京二九六三九番

平凡社

電話九段三四七五番
一六六四番
三六四七番

婦人運動

三月號　第七巻第三號

目次

□巻頭言……（五）

世界戰爭の危機に際會して……廣瀬庫太郎…（六）

婦人界時評……奥むめお…（一四）

□雪國から綿だより……田中比左良…（五〇）

□東海道を名古屋まで……村山文子…（六四）

その頃のこと……（一八）

金と私……生田花世……廿四圓の稿料……堀江かどえ

その頃のこと……林芙美子……上京當時をしのぶ……今井邦子

ペン一本の生活……神近市子……十年前……英美子

文筆生活のデビュー……望月百合子……三枚の切符……中河幹子

これから本氣に……若山喜志子……その時代は自由だつた……高群逸枝

こんな時にはこんな姿……葵イツ子……大體は性向から……鷹野つぎ

無意識の芽生……榎本八十子……空想から下りて來た文學…八木秋子

□婦人界近事……………………（五六）

□婦人職業案內……………………（六〇）

皆が喰へる時代の建設……………岡本利吉…（五二）

市政の改善と婦人……………前田多門…（五六）

噂の女（映畫）……………………（六二）

□幻燈（詩）……………伊福部敬子…（四八）

□無產者意識の下（歌）……………田邊一子…（四九）

松井須磨子（長篇詩）……………高群逸枝…（六六）

王子さまの謎（童話）……………田島富美子…（七一）

鞭打たるゝ者……………エドワード・スカウラア 松本敦夫譯…（七六）

婦人運動 附錄 **版發刊**（八頁）



春

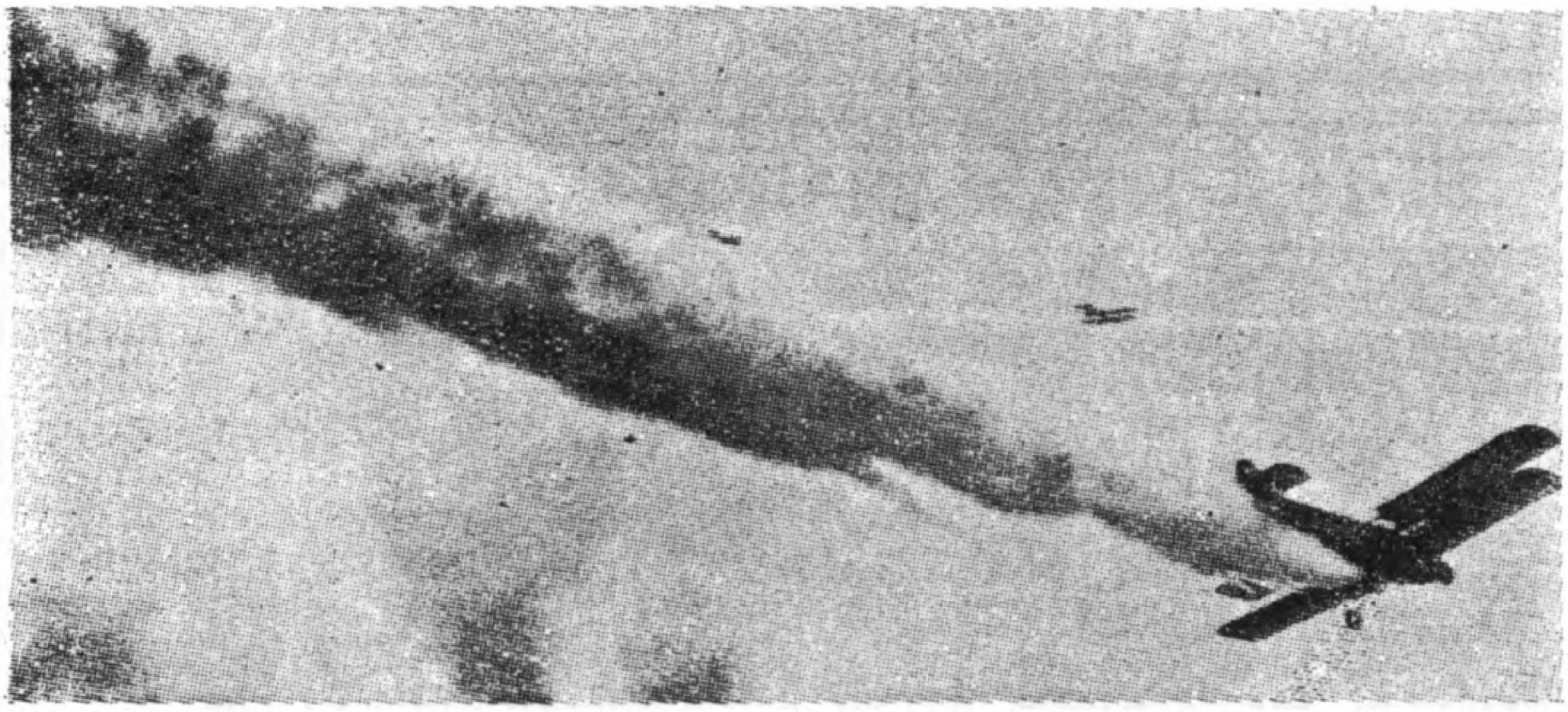
春が來た。それ空巣覘ひの要心をしろ。家出が増えたぞ。自殺の時期だ。

期節が變る毎に相も變らず同じやうな物騒な注意をくりかへして、どうしやうと云ふのだ。生活の安定、思想の善導、一體だれがそれをやらうと云ふのだ。

嘘と懸引の外に何の能もない政治家か、金儲け一點張の資本家か、その鼻の下を覗ふ宗教家、教育家か？　これでは、何が來やうが安心のならう筈がない。

一體、自分達の事を自分達でやらうとしないのがいけないのだ。

眞に此世の生活者、民衆自身が手をつなぎ合つて自分達の手でその日常生活を通じて、村を町を市を、世の中をよく改めて行つてこそ、春は春らしく夏は夏らしくなるにちがひない。



（新しい武器飛行機が煙幕を出す處）

世界戰爭の危險に直面して

廣瀬庫太郎

どんな歷史上の悲慘事でも、近代の戰爭が生む慘虐には比較にならない。ネロの暴政もポンペイの陷沒も、旅順やヹルダンの流血と比較したならば、それは決して同日の談ではない。近代の戰爭は單なる殺戮とか、破壞とか云ふ文字を以て形容さるべきものでなく、少くともその戰はれてゐる範圍內での總ての生命の絕滅を齎すものである。精巧な機關銃や強力なる霰彈は、數分間にして數キロ平方の全生物を絕滅し、毒瓦斯や空中からの爆擊は凡そ、その到るところの一切を粉碎せずにはおかぬのである。

戰爭はまたそれに相應した、狂的昂奮を呼び起させる。錯誤した愛國心は總ての男にその生命を亂擲することを、母と姉妹とにその子と兄弟との死を希はしむることを、そして榮光は常に、負傷と死とを中心として旋回するやうな意識が現出される。何のために戰ふか何のための殺戮かは誰人にも問題にされない冷靜な判斷は何人からも奪はれる。しかもなほ實相を正しく感じ眞實の行動を選ばうとするものには、發狂と自殺と投獄より外に如何なる道も殘されてゐないのである。

また戰爭のたゞ中に於ける無產者と、婦人程、傷しき軛をかけされてゐるものはない。夫を褫ひ子を奪はれ餓死と殺戮とに怯えながら、しかも野獸の毒牙にその身體を傷けられ

る婦人。黒パンにもありつけないでしかも戰場へ送るために無際限な勞働を課せられ、やがてまた戰費を償ふために、極端な保護關税と辛辣な間接税を轉嫁される無産者。この兩者の安全なる生存は如何なる場合にも、戰爭と兩立することは出來ないのである。

われわれはどうしても戰爭を絶滅しなければならない。無産者はその自由と生存のために婦人はその子と兄弟のために戰爭なき世界を少しも早く實現しなければならない。しかるに世界の狀勢は全くこれと正反對に進んでゐるのである。

今日資本家の政府はさかんに軍備を擴張する。クーリッヂはアメリカが戰爭をするためにはもつと多く軍艦が必要なことを力說し、英佛の政府も負けずに造艦を急いでゐる。口に平和が叫ばれ不戰條約などか締結されるのも、實はあとで戰爭が起るとき、その侵略者の汚名を遁れたいためばかりである。世界戰爭の當時、英佛米の政府は、獨逸による侵略のための戰爭だ、カイゼルの世界政策のために起された戰爭だと稱して民衆を戰爭に繋ぎとめてゐたが、我々はそれと同樣な目的を、不戰條約や軍縮會議の中に露はれてゐるのを見遁せない。若しこの點から推測するならば、既に各國の政治家には急迫した場合が豫定せられまた事實計畫されつゝあり表面平和を叫びながらも根深い執拗な戰爭準備が進められてゐることを否定することが出來ないのである。

私は次に、今日の國際關係を「戰爭へ」「帝國主義戰爭へ」と導く經濟的、社會的推進力に就て一瞥しよう。

世界戰爭の創痍の恢復は帝國主義各國をして再び市場爭奪に熱中させた。しかしてその最も重要な對象となり好餌となつたのは隣邦支那である。尨大な國土と四億の人口とは偉大なる消費力の權化としてまた原料品の寶庫として低廉な勞働力の源泉として、如何に各國の資本家をして垂涎せしめたであらう。各國の大資本家は貿易の不振と利潤率の低下とによつて不可避的な衰退に當面した自已の運命を支那侵略によつて緩和し、一時的な資本主義安定を求めやうとしてゐたのである。

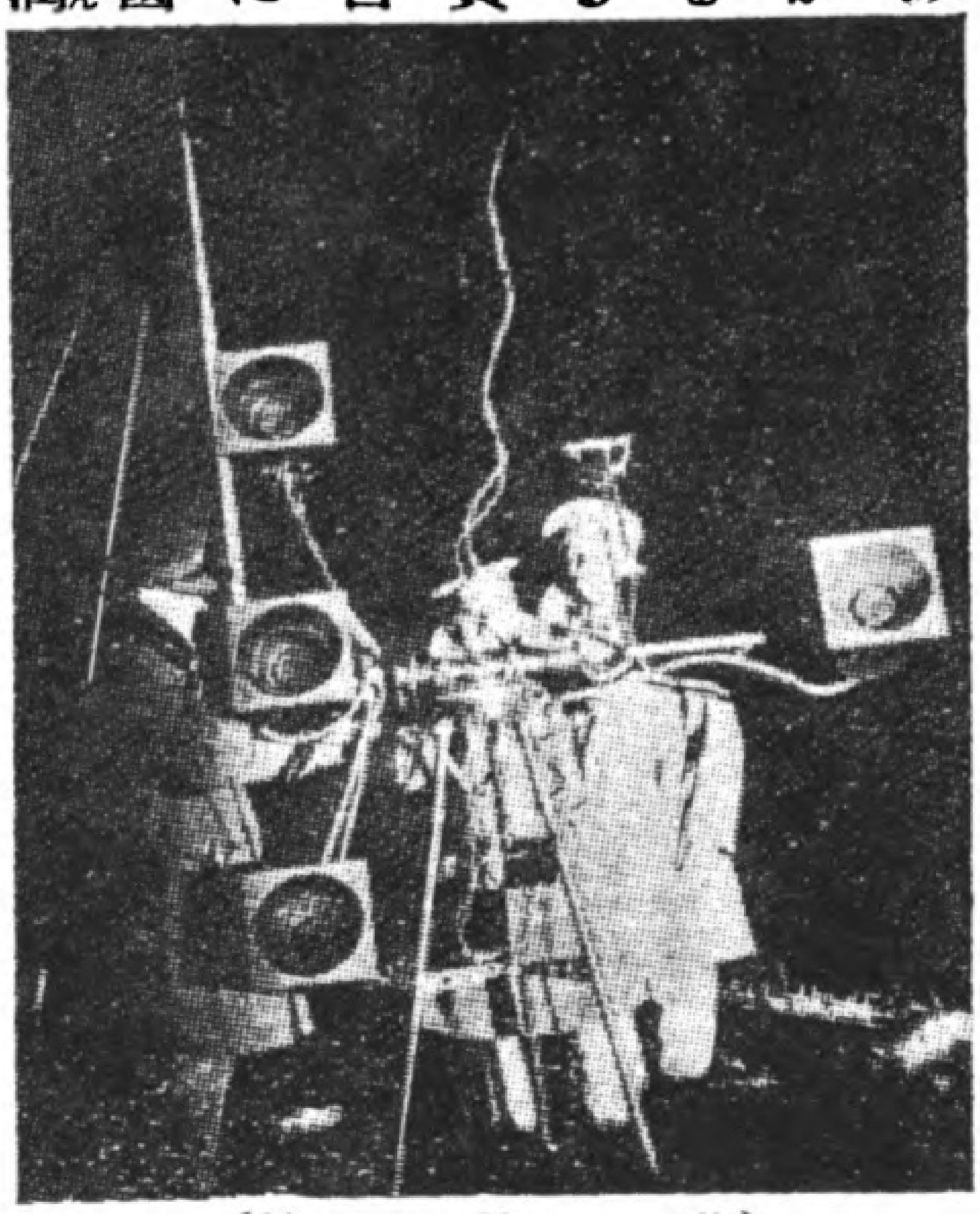
しかるにこれらの資本の侵略に對抗して支那の統一は成り民族解放の叫びが高まつて來たのであるが、それに對してとつたイギリスの極端な反動政策、更に北方の軍閥と結びついた日本ブルジョアジーの干渉政策、更に支那民族資本家にと

り入つてアメリカの弗の支配を確立しようとした奸策、これらは支那侵略に關する各國の意圖を最も露骨に端的に表現するものである、アフリカ、インドネシア等に於ける領土分割が一わたり完了した今日一尺の土地と雖も武力的抗爭なしには自由にならないことは極めて明白であるのに、倘敢然として領土的、經濟的侵略を進めつゝあることは、これらの帝國主義諸國が何時でも必要があれば戰爭に訴えるぞと表明してゐるやうなものである

支那の民衆は實に負ひきれない負擔を余儀なくされてゐる。彼等は自國の資本下に、また外國の資本下に直接の搾取を受けることの外、外國商品を買ふことによつて法外な利潤の作出者となり外國政府や資本家のために高率な借欵利子を支拂つたり、軍閥や壓制者の軍費を、關税や不換紙幣で辨償させられる。しかもその搾取者は大抵の場合外國資本家である。支那に於ける勞資の鬪爭は、究局するところ、外國資本家對支那民衆の鬪爭であり階級鬪爭はその最も端的な表現を打倒帝國主義運動に於て見出されるのである。

しかしてこの打倒英、米、日、佛帝國主義の運動と各國の侵略的行動とは、今後如何に對應し交錯して行くことであらうか。われわれはその結末を甚だ悲觀するものである。現在の諸條件より推測するならば××を第二の獨逸とする第二次帝國主義戰爭は、今や漸く不可避的になつて來るやうに思はれるのである。

今日は所謂金融資本の時代である。一國の金融覇權を握つた財閥はその國の政治的經濟的支配を確保するとともに弱小國に向つて擅な搾取を營んでゐる。鐵道や租税を擔保とする高率な借欵契約、それが履行されないときは軍隊を動かして債務の履行を强制するか、保償占領を行ふかと云つたやり方、或は弱小國に對する企業投資――鐵道の架設、工場の設立、鑛石の探掘等々を行ひストライキにもボイコットにも常に軍事的壓迫で押とほすと云つたやり方、それが今何處でも隱然と行はれてゐるのである。



（聽　音　機）

しかもこの金融諸王は、さながら惡魔が地底より呪文を以て呼集めるが如く夥しい產業豫備軍を出現させ、戰爭の肉體的負擔者を作り出す、しかして彼等の金庫に投資口を失つた資本が累積されるに從つて戰爭鼓吹の氣運が捲き起されて來るのである。

戰爭開始に當つて政治家的關心が先づ何處に向つて動くかを見るときわれわれはロスチャイルド、モルガン、スチンネス、三菱、等々が常に話頭に上りしかも戰爭を欲するだらうか、或は欲しないだらうかと云ふことか極めて重要な決定力になり來つたことを忘れることが出來ない。如何なる政府もこれらの同意なしに戰爭は出來ないが、如何なる政府も彼等の意志を拒んで平和を持續することは困難である。

端的に表現すれば、戰時敵愾心の發露も、憎惡心の狂亂もはまた外交上の駈け引きまで悉くこれら金融寡頭の操るまゝに動くかに見え、また動いてゐるのである。殊には輿論の製造家であり民衆感情のメーターである新聞紙も既にこれらの巨頭の魔手に獨占されてゐるのである。

また一方には數百萬の人が從事してしかも軍器、戰時品を製造する外に何等の役目を持たない大げさな工業が存在する其處では數年後の戰爭をあて込んで製品を常に蓄積し尨大なる利潤を豫想してゐる。鐵原料、銅鐵、ニツケル、マンガン銅、鉛等の價格の吊上げは總て軍器工業と關聯して行はれてゐる。從つて戰爭に利益を得る企業家の總體的な結合は行はれ、利潤のための戰爭の追求は否應なしに行はれる。これ等の企業家は屢々戰爭の時機を確信した、その度毎に產業の危機が發生し夥しい失業者が投出された。主戰論か擡頭して侵略主義か巾をきかしたのである。

しからばかやうな內容とかやうな根據とを以て進められつゝある戰爭に對し、われ等は如何にして之か絕滅の戰ひを戰はんとするか。資本主義國家と資本主義國家との協定によつて平和は來るものでない。それが國際聯盟のやうな組織を有たうと或は不戰條約の形態を備えやうと、實力ある戰爭阻止の方法にはなり得ないのである。それ等の效果は單なる觀念的なものであつて、戰爭に對する輕薄なる反對の意識を喚び起すに過ぎないものである。國際聯盟の常任者も不戰條約の提唱者も恐らくそれ以上の期待は持たないだらう。また持ち得べきものでもない。われわれはかやうな觀念的效果を實力

的效果にまで高めなければならない。否寧ろこれらの空文的平和主義の欺瞞を來り越えて實質的な平和を確立することがわれわれの任務である。然らば實質的平和は如何にして求むべきであらうか。それは云ふまでもなく戰爭の本質的原因を廢除することなくしては不可能である。

列强の帝國主義的政策、侵略的行動、弱小國壓迫、等々が儼然として存在してゐるところには永續すべき平和は存しない。從つて我々の運動は先づこれらの現象に對する抗爭として展開されなければならない。これ等の內容を含まない平和運動はたとひ如何なる措辭を以て覆はれてゐやうとも遂にまた一片の空論である。世には多くの平和團體があり平和主義者があつたしかもその運動に見るべき何物もなかつたのは以上の點に關する認識と行動とを缺いてゐたために外ならぬ。

しかしながら玆にまた考へねばならぬ問題がある。世界戰爭以前に於て獨逸を中心とする第二インターナショナルは反帝國主義を基調として戰爭反對に從つてゐた。われわれはその偉大なる實行力に信頼した、一度戰雲急を告げたならば彼等は立どころに之を破碎して新らしき天日を齎すだらうことを豫想されたのである。しかるに事實は意外であつた。

開戰直後、社會民主黨代議士團は聲明して曰ふ、「われわれは敵國侵入の恐怖に脅かされてゐる、われわれは今日戰爭に對する贊否でなく國土の防衞に必要なる軍費の問題を決議せねばならない。……我が國土の文化と獨立の安泰を期せねばならない、我々は「危急の時に臨んで祖國を見捨てない。」と云つた平素の言を實行する。」祖國の危急のために、敵國侵入の恐怖のために五十年の運動の成果を捨てインターナショナルの理想を蹂躙し、統治者の戰爭のためには軍費を支拂はないことを申合せ國籍を越えて被壓迫階級の結合を圖つて來た獨逸社會黨はかくしてカイゼルの軍門に降つたのである。五十年間欺かれて來た民衆の憤激は暫くこれを問はない。世界の同志の失望もまた暫く別に考へるとして彼等が何故にこの變節を余儀なくされたかは大いに究明を要するところである

惟ふにその原因は多々あるであらうしかしながらその重要な誤謬は彼等がその社會主義的見解を國民的傳統の下におき帝國主義戰爭の本質に暗く、當時の戰ひとして戰爭問題を取上げ得なかつたところにある。しかもその値ひとして五十年の運動を骨拔きにし階級的對抗關係を國際的な對抗關係に解

消してしまつた。よし戰爭の終結がたとひ如何に彼等に有利に展開されたとしてもその全運動は遂に誤謬の一系列によつて貫かれてゐることは拒み得ない事實である。

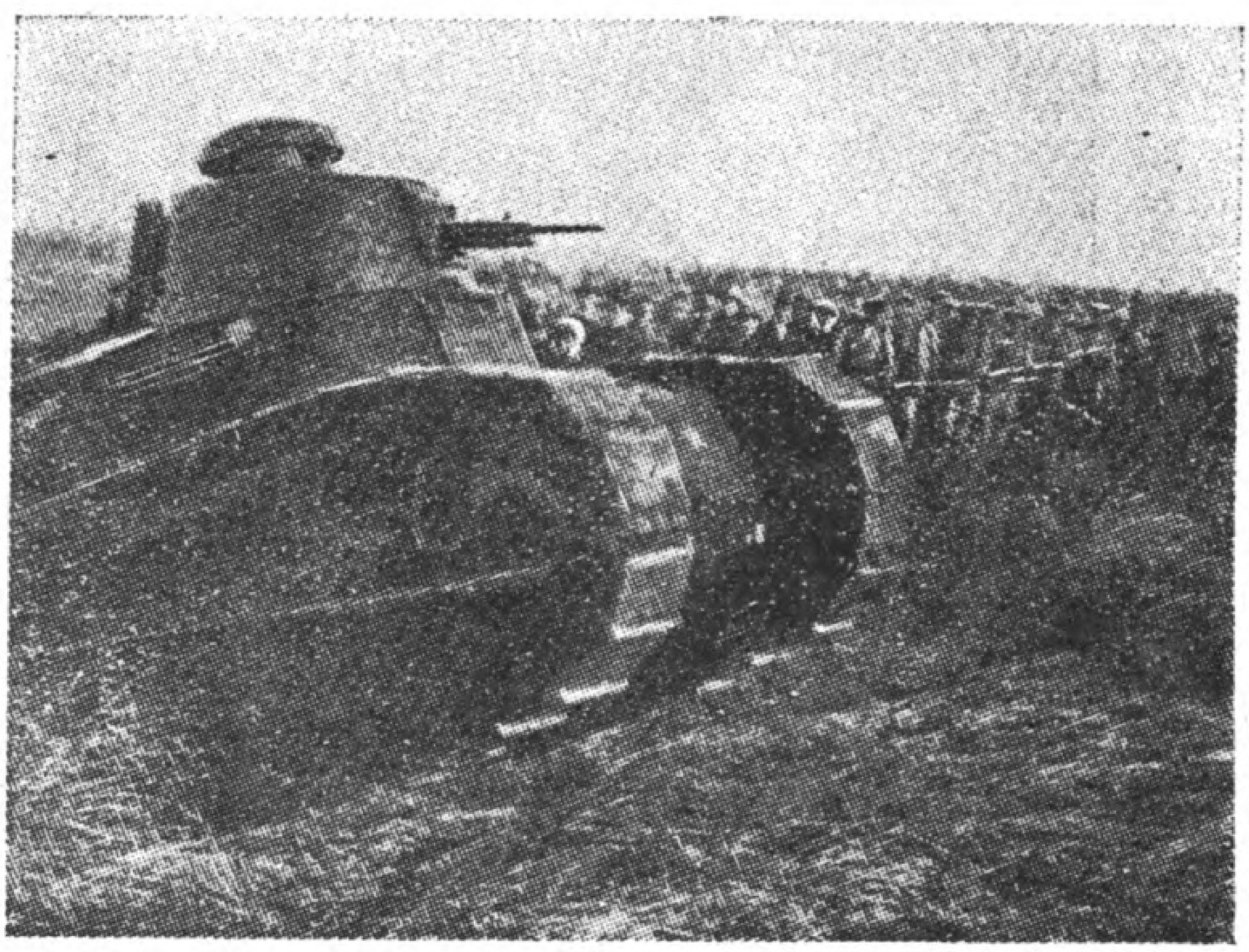
我等はこの苦き經驗を、我々の經驗として生かさねばならぬことに思ひ至つた。また無意味な概念的な平和運動に眞實の具體性と實力とを持たせねばならぬことを痛感した。そして日本が今やともすれば能動的要素となつて戰爭の渦を巻き起す虞れを十分に感得した。われわれはさうしてその當然の歸結を全國非戰同盟の結成に導いたのである。

左にその總會に於して宣言及綱領等を再錄する。

全國非戰同盟宣言

世界戰爭を轉機として帝國主義各國の侵略的行動は東洋に向つて展開された。支那を繞る英米諸國の經濟的並に領土的野心とその對立とは民族運動、反帝國主義運動と對應して、或は磨擦し抗爭し今日の國際關係をして甚しき危機に導きつゝある。

見よ！　現代を特徴づける諸多の現象を、際限なき軍備擴張と、必死的なる市場爭奪、植民地壓伏と政治の反動化、等々、これこそ實に戰爭を不可避的にし、その範圍と規模とを廣大ならしむる根據である。しかも一方に於て或は軍縮會議を以て或は不戰條約を以てその好戰的意圖を陰蔽し、民衆の目を覆うて戰備を急ぎ一度國際勢力の不均衡に逢へば直ちに兵火に訴えられんとするの危險、然り第二次世界戰爭の危機は近く我々の前に來らんとしつゝある。



（タンクが襲ふ處）

我々は戰爭の慘禍に就て多くを論議しない、無數の人命を殺戮し、歷史の業績を破碎し、尨大なる富を蕩盡するの戰爭

は同時に人類の理性を喪はしめ、道德的判斷を不可能にし、全民衆を驅つて狂的昂奮に陷らしめる、野蠻に對する降伏、蒙昧に對する讃美、蓋しこれより甚だしきはない。

しかも戰爭は無產階級にとつてその軍事的結末——勝利に終ると敗北に終るとに拘はらず、常に最大なる負擔を加重する、それは階級的結束を國際對立の關係に分解し、搾取と支配の關係を永續化せんとし、從つて戰爭の原因とこれが刺戟を再現する。

我々は玆に全國非戰同盟を結成した。其の任務とするところは全國に於ける非戰勢力を叫合しその結束の力によつて戰爭の原因と戰爭準備の行動を排撃し、これが根抵たる軍國主義的、政治、經濟、教育の一切を廢除し、更に進んでは、國際的結合を鞏固にして國際聯帶の事實を顯現し不戰世界の實現のためにあらゆる建設的努力を續けむことを期す。玆に初めて協力と聯帶とによる世界秩序は確立し、新らしき光は全世界の上に投ぜられるであらう。右宣言す。



（高射砲發射のせつな）

綱領

一、われ等は戰爭及び戰爭準備の行動に反對す

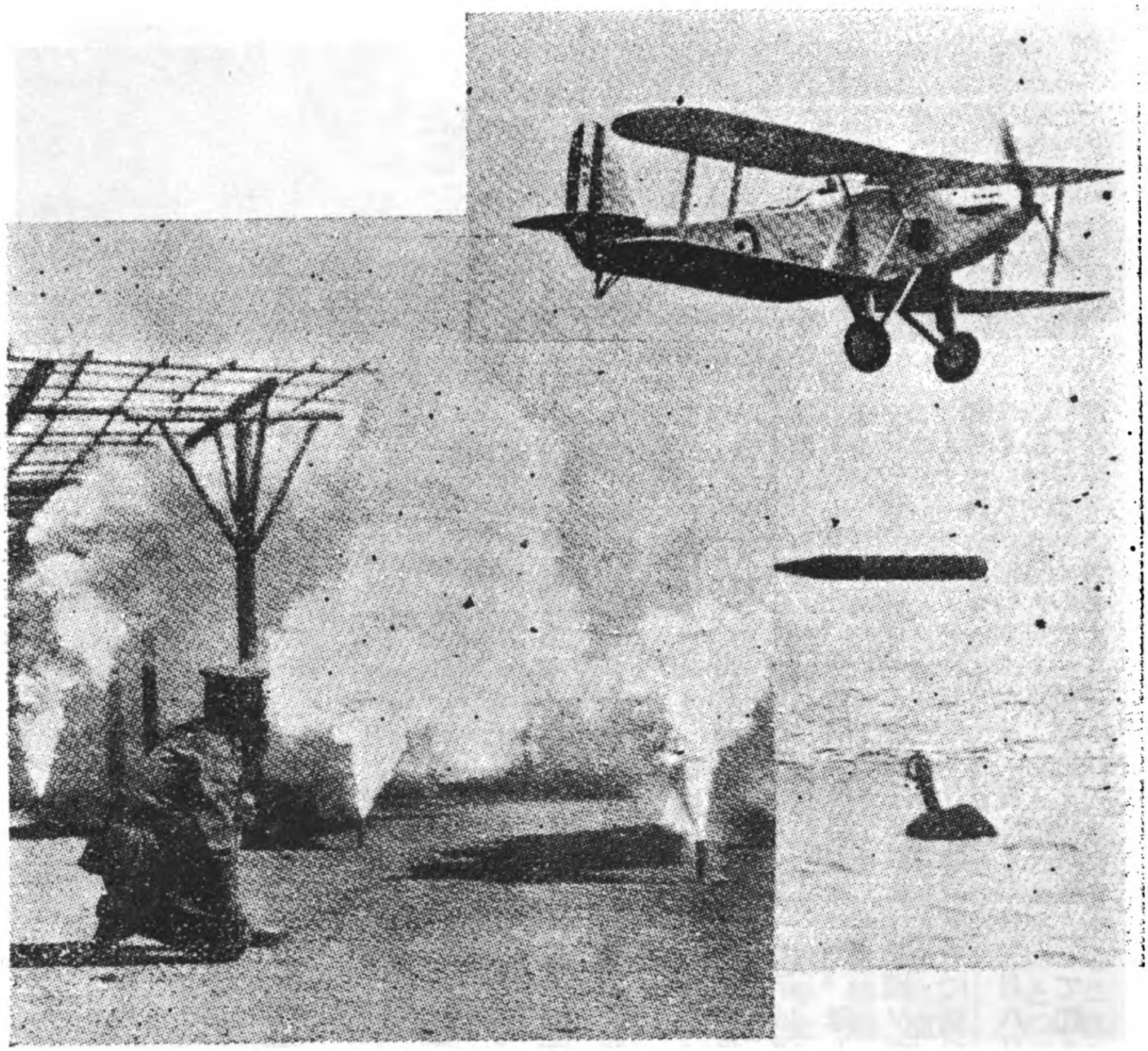
一、われ等は侵略主義に基く政治的經濟的教育的運動に反對す

一、われ等は略奪を鼓吹し弱小民族及び虛弱國體に對する軍國的言論と壓迫とに反對す

主張

一、非戰論の宣傳　二、不戰條約の徹底　三、國際裁判所の支持　四、國際聯盟規約第一條前文の徹底　五、非戰運動の教育　六、非戰運動團體の聯絡　七、非戰運動の國際的結成　八、軍備縮少の徹底　九、軍需品貿易に對する反對　十、軍國主義教育に對する反對

われわれの非戰運動は左の三項を以て當面の任務としてゐ



る。

一、國内の非戰分子を糾合し非戰論の宣傳を通じて戰爭に關する傳統的イデオロギーを打破しその悲慘と階級的性質とを暴露すること。

二、軍國主義的政治經濟教育に對する反對の大衆運動を通じて戰爭の機會と之が素因とを排除すること。

三、國際的結合、殊に東洋に於ける弱小民族の結合を鞏固にして帝國主義諸國の乘ずる機會をなからしめること。等である。

支那を挾んで英米日佛の領土的な經濟的な野心は益々露骨に表れて來た。日本の將來、殊に無產階級と婦人の前途を展望すれば甚だ陰慘たるものがある『母よその子のために、姉よその弟のために、無產者よ自由のために非戰同盟の旗の下に呼號せよ。』これこそ第二次世界戰爭を前にして全日本の同志に送る叫びである。われ〳〵は平和の日に於て非戰論を民衆の間に侵透さむことを希ふ。やがて激變が來ても烟硝が臭ふても、最後まで平和を叫ぶものを以て日本を覆はしめよ、我等はその信念を以て進んで行く。（一九二九、一、五）



婦人公民權案上程日に議會へつめよせた婦人群

婦人界

三月八日は無産婦人デー

奥　むめお

三月八日の婦人デーを祝ひませう。

人類の母として、次代の生命を委ねられてゐる私たち婦人は、母としての責務の大きさを社會人一般に覺らせるためにも、出來るだけ大々的に三月八日の國際婦人デーを祝ひたいと思ひます。

一九一八年の此の日、ロシアの無産婦人は戰爭反對われらにパンを與へよ、と一大示威運動を起しました。勞働者の國勞農ロシア、母と子供の權利を徹底的に擁護する社會主義國ソヴエート、ロシアを今日のやうに建設するに至つたあの大革命の火ぶたは、實にこの日三月八日に於ける婦人の大示威運動を導火線として起されたと聞くのであります。

なほ、この日の記念すべきことは、一九一〇年コペンハーゲンに於ける國際社會主義大會のとき、有名なる婦人革命家クラ、・ツエトキン女史の提議に依つて、三月八日を期して全世界の無産婦人を敎化する示威運動の日にしやう、といふ議が決定されたのであります。爾來、婦人はこの日の半日を一切の仕事から解放されて集會に行つたり、講演會を催したり、示威運動を行つたりして、特に婦人と子供の問題について社會の注意を喚起させることに努めてゐます。

今日、わが日本ほど母と子供の生命を無視し虐使してゐる國がありませうか。國、市、町、村政の全體を通じて何ら母性尊重、兒童保護のための見るべき施設が行はれてゐないばかりか子供はその年少と力弱さのためにこき使はれ、女は、子供をもち、家庭的な勞務を負擔し、姙娠分娩哺育をしなければならぬために——如何



都會と農村を結びつける「家の光婦人會」

なる男子の働きよりも、婦人の擔當するこれらの母性的な働きにも增して人類の未來にとつて重要なはたらきがどこにありませうか――この母性的ないとなみの故に、公民權參政權を拒まれ、教育の門戶を開放されず、職業勞働に從事しては安い給料しか支拂はれず、足手まといな子供を持つて路頭に迷つても收容し保護して吳れる機關もない！　多產と過勞と營養不良で死んでゆく中年の婦人の死亡率の高さを御らんなさい。倂せて乳幼兒の死亡率の大きさを。

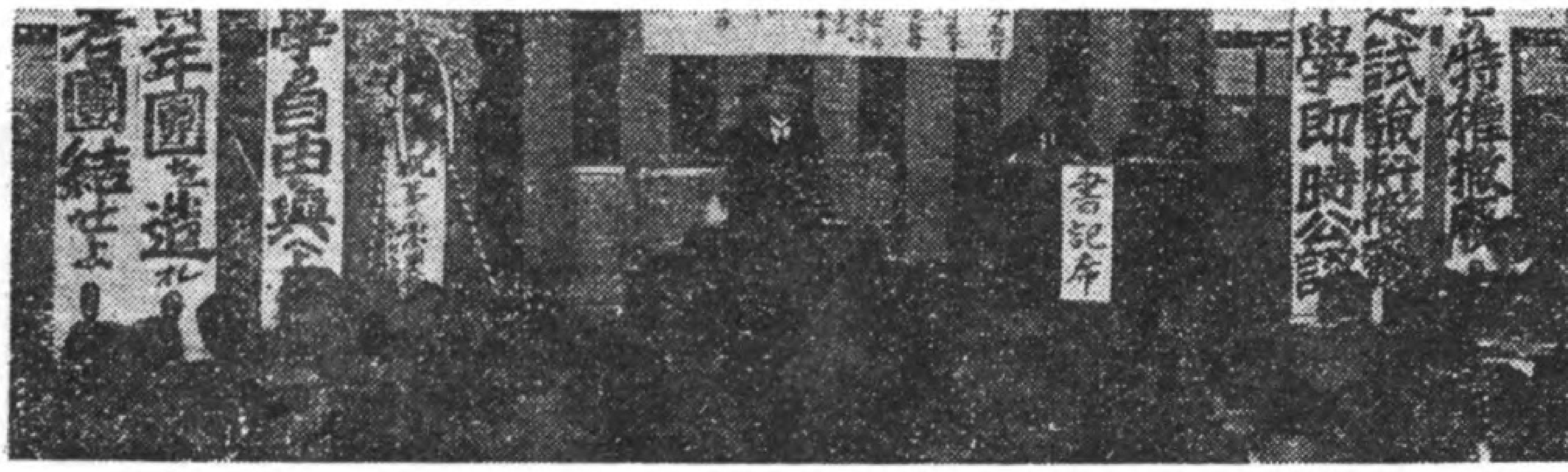
實に婦人は、その子供を通して次の時代の幸と不幸を擔つて責務の大きなるものであります婦人權利のために結束しやうでありませんか。

試驗地獄シーズン

いはゆる試驗地獄の季節は子を持つ母親のもつとも心を痛めるときでありませう。

今日のやうに或學校を卒業したといふ一枚の證書が高い地位にのぼる梯子段になつたり高給にありつく資格になつたりする制度のもとでは子を思ふ親の情として、出來るだけ上の學校へ、世間的にいゝ學校へ入れたいのは人情でありませうが、この無批判な親心が一層試驗地獄を深刻にしてゐる、とも云えませう。又、一方では貧富の差がひどくてこの親心を以てしてもなほ、小學校から中等學校に上る率は全體の子供の一割弱、中學から大學へ上る率は（小學校教育に使ふ子供一人あたりの國費は六圓であるに反して、大學生一人あたりに千圓を支出してゐる。この不當！）といはれてゐるのであります。

現在のやうな職業的な實際教育も與へず、人間を作りもせぬ中途半破な教育を改造して職を求める手段としての學校でない、ほんとうの人間教育、科學教育、技術教育藝術教育のための萬人に開放されたる學校を作り出す必要を痛感します現在の學校教育に對して、百パーセントの不信任案を母親としての婦人が出さないとい



教育の機會均等を叫ぶ日本獨學青年聯盟大會

ふことがありませうか。

職業婦人受難の時代

婦人の就職が非常に困難な時代となりました學校から、家庭から、溢れて、何か働く口が欲しいと職業を求めて求めあぐんでゐる婦人が現在でも可なり多いのに、やがて幾萬の新卒業生がその上にも堰を切つた水のやうに流れこまうとしてゐます。

女の方が使つて快く（勿論、それは若い者のことですが）而も安上りにつく、といふうまい方法を見つけた雇主たちは、その仕事が女に適應しやうがしまいが、女だけが持つ特異の性情にも何の顧慮なくこき使はうとしてゐます――現に多くの職業婦人は沒義道な雇主の下に云はれるまゝにこき使はれて、頼るべき何の庇をも持つてゐないのであります。殊に職業豫備軍を澤山に後に控へてゐる腰の弱さは、もつといゝ求職婦人が幾らでも外にゐるのだぞ、といはぬばかりの無言の威嚇をつねに露骨にみせつけられつゝそれで一言の云ひ返しも自由でない被雇人のみぢめさ。

今日の如く怒濤のやうに渦巻く求職婦人失職婦人の大群をみて考へられることは、今こそ職業婦人は臍を固めて自分たちの地位を擁護するためにどんな苦難なる闘ひをも決して辭してはならぬ、といふ覺悟の必要なことであります。

一ケ月の勤勞を捧げて一ケ月衣食する糧を得べきは極めて當然のことながら、その極めて當然の要求額をさへ表示しえないで、ほんの小遣錢稼ぎの給料にも甘じて雇はれてゐる卑屈さや媚を求められゝば媚を、貞操をさへ彼等の蹂躙に委せる様な立場の弱さは、畢竟職業婦人として共通の利害に立つ者同志が協力してその地位を確保し、共同の敵にあたろうとする準備を怠つてゐるからに外なりません。

強力なる職業婦人の團體を作りあげることの



赤帽を脅かす新職業として問題になつた婦人白帽

必要を今さらに痛切に思ふのであります。

婦人公民權のために

いよ〳〵今度の議會で婦人公民權案は壓殺されに運命にきまつたやうです。全體婦人の斯くも熱心な要求と支持に胴上げされつゝ、輿論の中心題目にまで躍り出たのにも拘らず、ともあれ、婦人界が一つの題目――婦人公民權――といふを中心にして今度のやうに一つ心に統一されたことは曾つてなかつた、と云つていゝでせう。

この合一された氣運をうまく活かし進めて全體婦人の政治的關心を一歩前進させるための努力は非常に重要なことである筈ですが、この運動の當事者たちは賴むべからざる既成政黨の賴むべからざる人氣取政治家たちとの取引にばかり一生懸命になつて、どうやう一般婦人側への呼びかけをおろそかにしてゐる憾みを思はずにゐられません。

このまゝ議會が終れば、斯くも公民權問題を中心にして湧き立つた智的婦人界一般が、次の議會まで忘れたやうにこの問題を隅つこへ片づけ去つてしまふでありませうか。

この際婦人としての私たちが考へたいことは政治的には未だ無力な婦人の問題がともかく議會に於て眞面目に論議され、そのためには政府と與黨議員との間にさへアツレキがあつた、これは何を語るであろうかといふことであります。これは、婦人側の要求が公民權の一點に集約されたと知るや、打算に巧みな政治家たちはこの時代的な勢ひに反對することの不利を見て、賴まれるまでもなく取上げたまでにすぎません。

それにしても今後はます〳〵婦人としての吾々の日常當面の要求をはつきりと常に摑んで、その要求を中心にして結束し、われ〳〵の要求の下にどん〳〵政治家を引ずり廻し、利用してわれ〳〵の生活のために役立せなければなりません。

その頃のこと

金と私

生田花世



金と私――。から考へて見ます。するとすぐ、金には縁の少ない自分だといふことが思ひ浮んで來ます。幼いときは、私の父母が、たとへ自分たちがどんなに金でくるしんでゐる時にも、そんな話をおほつぴらに子供の前では一言たりともいはないといふ風な人達でありましたから、十五才までは、何といつてよいでせうか、この世がこんなにも金のためにくるしいものだとは、夢にもしらないのんきさでありました。

金のないことのつらさをしみじみと味ひはじめたのは、十五才から×市の女學校へ入學してからで、父からの送金がおくれるために、自分一人いまだに授業料がおさめられぬ苦しさ、暗さ、やつと金のとゞいたときの嬉しさ、明るさ、今もその當時のことはしみじみと思ひ出されます。

とにもかくにも女學校を出て、小學校の教師として働けるやうになると、父が死にました。父が死んだのは私の二十二才の時でした。父の死後、私は母から、私の女學生當時の學資金のために、私の

家の倉が飛んだのだといふことをきかされて、千萬無量の感慨に沈みました。私のために、祖先から倉が一つ失くなつたといふことは、私を底のしれない憂鬱な發憤にかり立てました。金と私はこの時はじめて面接しあつた心持でした。

　月給十六圓也。これが、私の村の女教師としての俸給でありました。三年ののち、東京へ來て、王子の小學校の分教場につとめたときには二十三圓也(?)を支給されたのです。まあ、今の金にして見ると三十五六圓でせうか。食べてゆくには事かきませんが、着物などは、どうしても、これでは十分に行きとどかなかつたのです。八ケ月ほどでこゝをやめてからは、無給金の女書生を小一年して、それから三十圓也の婦人記者にはじめてなりさして、實に嬉しくおもつたものですが、それもたつた二ケ月で、その社がつぶれて了つたので浪人になりました。二ケ月ほど籠城してから、今度は新聞廣告である週刊新聞に入り二十五圓也をもらふことになりましたが、この社もやはり三ケ月の壽命しかありませんでした。

　この時分から私は「青踏」に申込んで寄稿させてもらへることになり、平塚雷鳥氏や、尾竹紅吉氏にもあひ、神近市子氏伊藤野枝氏ともあひ、文筆の方で、いくらか希望が生じましたものゝ、たえずおそはれる生活苦、職業難になやまされどほしました。「青踏」を毎月お代も拂込まないのに、平塚さんが、おくつてくれて書かせてくれたうれしさが胸深く泌みこみました。私にとつては、平塚さんは永い間の恩人です。あんな窮迫時代に味つた人の情はしみ〴〵忘れずふりかへられます。

　なほ私の恩人、河井醉茗氏のお世話で「女子文壇」の訪問記者につかつてもらへるやうになつたときはうれしかつた。「女子文壇記者、長曾我部菊子」といふ名刺で私は、その當時の文壇の大家、詩壇の大家、畫家、評論家、女流作家を訪問したものでしたが、その當時の經驗は何といつても私の今日をきづかせてくれました。金では買へないいろ〳〵の微妙な人生といふものや、社交といふものも知りました。忍耐も學びました。勇氣も養へました。とりわけ、侮辱に耐へる心の錬れたのは何よりでした。人一倍、侮辱についての感情と神經の纎細にはたらきがちな私が、侮辱されやすい訪問記者の修業をつんだのはありがたいことでなくてはなりませんでした。

　とはいへ、その當時は、苦しんだものでした。飯田橋を今もつて私が見たくないのは、そこではら〴〵と涙をこぼして



二十圓の原稿料

堀江かど江

濁水を見てゐた暗い夜のなやみがあるからです。この東京の方々の坂とか、町角とか橋とかゝ、建物とかに私の涙とためいきとが思ひ出となつてゐます。

寂しかつた私の微錄時代よ、おもひ出したくない、思ひ出したくないと思つてもなほかつ思ひ出される。『女子文壇』が『處女』になり、私は、そこを一年半でやめてからは、又もや私は浪人になりました。

それから半年ほど、あちこちの仕事をさせてゐたゞきましたが、それでは食べて行かれませんから、一時くもがくれしようと私は、下町の方へ、女中奉公の口をさがしに出かけたことでした。

まづ、そんな風なけいれきをもつてゐる私として、今、多少とも生活がらくになつてゐる點があるとしても、うかうか油斷の出來ない心になつてゐて、心をひきしめてゐるのは、當然でせう。

金と女。これは何といふ大問題でせう私はいつもさうおもひます。女も金をもつてをれば、必ず〱もつといゝことが出來る。もつと學ぶことも出來れば、もつと的確な自己を生かすことも出來る。金のないためにしたいことも出來ない。時には侮辱にあふこともないとはいへない。そこは人生の悲しさである。

金にどんらんになりたいとはおもはないが、金を得、金を生かしたいとはいつもおもふのです。金によつて、もつとつよいよい自己を張りたいのです。だから金がほしい。『金がほしい、金がほしい。』といふ幾千、幾萬の男女の聲に、私もまた共鳴しないではをられません。『金なんかいらない。』といふやうなまけをしみはもつてゐません。

金と私、くれ〲と書いて見れば、こんなものになりました。私は、こんな風なことを今、こゝで、はじめて書きましたよ。

私の微祿時代などと問はれますと、私がいま高祿をでも食んでゐるやうに思はれますが、どうしてどうして私はいまだ高祿時代などにめぐり合つたことがございません。

私には、私をいはゆる出世させてくれる背景の力も、先輩の引立もなにもありませんでしたから。ただ、自分の力一つをたよつてコツ／＼と努めてきましたので、文壇はいつも私などに横目をさへつかつてはくれませんでした。恐らく今だつてそれに違ひありません。第一私といふ人間は横着に出來上つてゐますので、從つて出嫌ひで交際下手ですから、よく／＼勇氣を出した上でなければ、原稿を賴みになど行つたことがありません。こんな風ですから、原稿商人にはよく／＼向かないので、いつも微祿時代でゐるわけです。

ですから微祿時代と問はれても、いつのことを書いたらいゝかわかりませんがそれでも、いく分か御社のお問ひに添ふやうなお答をするなら、私の最も貧乏時代であつた大正十三、四年の頃であつたでせう。

あの大震災で生活が頓挫してしまつたので、東京を引上げて田舍に歸つてしまつたので、機運の向いてきつつあつた私の文筆生活も同時に一頓挫してしまつた形でした。それからの私の生活は實に貧乏のどん底に落ちてしまひました。

國に歸つたものゝ、親達との意見の衝突から家にも居つくことが出來ないで、夫と二人で家を飛び出して常總海岸のある町に友人をたよつて、そこの小さな町に住むことになりました。それからの私達の生活はお話になりません。

不況になつた出版界に私達のやうな貧乏文士の原稿など賣れよう筈がありません。さうかといつて食はずにはゐられないので、それこそ、知つてゐる限りの親類や友人の世話になりました。婦人公論の島中雄作氏に夫と私との原稿を束にして持つて行つて、柄にもない前借を申込んで、たいへん氣まづくなつたのもこの時でした。「我觀」の、今思ひ出せない何とかいふ記者が、私の持ち込んだ原稿を取つてくれるやうなことをいつてくれたので、僅かの原稿料をどんなに宛にして待ち切れないで、やつと旅費を拵へて上京して訪ねて行つたら、それが止めてしまつて、その上に、私の原稿は失くなつてしまつてゐるのには寂しい憤りを抱かないではゐられませんでした。

此處で十ケ月ばかり暮すうちに、原稿料といつては夫が讀賣から二十圓貰つただけでしたから、私の生活の窮狀はこれ

で想像がつくことゝ思ひます。とにかく貧乏をしてゐたので、心が堪へず動搖して、どこかにいゝことがありさうに思へて此處にも落付いてゐられないので、又東京に歸つて來ました。たしか十三年の二月頃でした。

歸つてはきたものゝ、文壇の情實は一層はげしくなつてゐました。てうど文壇では文藝春秋を中心に新感覺派が一大センセーションを起してゐる時でした。プロレタリア文學は挽回の機運に向いてゐないので、從つて、原稿を賣るのは容易のことではありませんでした。夫は勞働者の群れに飛び込んで行きました。私は毎日職業紹介所に行つたり、新聞の廣告欄をあさつたり、瘠せほうけた野良犬のやうになつて歩き廻りました。やつと見つかつたのがある宗教家の著述の手傳ひでした。不覺にも今さらのやうに生活の安定を持たない文筆生活者の苦しい體驗を痛感しました。

ある宗教家に傭はれながら、私は尙ほ生活の不足を補ふため童話を書いたり、雜文を書いたりしなければなりませんでした。そのために、童話作家だとか、雜文家だとかいはれました。

こんなにして、ともかくも、私はその貧乏時代を過ぎてきました。

これでお答えになりますかしら？



その頃のこと

林芙美子

奥さんから、文壇進出當時の（微祿時代）事を何か書けとの事でしたが、思へは拾年一日の如く、相變らず雜文書きの私に、何の文壇的位置がありませう。佗しき事かぎりなく、私はいつまでも微祿時代です。

私が雜文を書き出してから拾年になりますが、一冊の本も出してゐません。その拾年の間何をして來たか――

私は何度も結婚に失敗したり、牛屋の女中、セルロイド玩具の色塗りの女工だの、カフエーの女給、集金係り、女探偵（これは近目で四日で止めました。）毛糸屋の女店員、派出婦、大道商人、（男のさるまたを賣りました。）おでん屋の手傳ひ婦、株屋の女店員、思ひ出して見れば、かくも、さま〳〵な職業に私は、その拾年をつひやし、やつと此二年程、又結婚生活に安定する事が出來ましたが、亭主が貧乏畫描きなので、今では雜文で、口をのりしてゐます。

　拾年間、轉々とした間、私はどんなに死にたく思つた時でも、自分の藝術に引かされて生きて來ました。

　今でも忘れない思ひ出と云つては、もう何年になるかしら……。

　その頃私は田端の奥に住んでゐた。和田久太郎のピストル事件のあつた時だから九月だ。

　知人だつたものだから、私も家宅搜索をやられたり、瀧ノ川署に引つぱられたりして、私は私の務め先きもおじやんになつてしまつて、文字通り、食ふや食はずの日が續いた。

　數冊の古本と二三合の米が殘つて、私は晝は職業をさがしに、夜は蚊屋の中に借りものゝ籐椅子を入れて、むさぼるやうに勉強した。

　蒲團も屑屋にはらつて、蚊帳の中の籐椅子の上に寢てゐる私は、まさに一ツの漫畫だつた。

　しまひには、その二三合の米を、炊いて握り飯にすると、くさらないやうに籠に吊して樂しみに食べた。

　その籠の中に、辻潤さんが桃色の五十錢札を入れておいてくれたのを、今だに忘れない。よく彼の人は、本をくれたり、はげましてくれたりした。辻潤は日本の唯一の藝術家である、自由人である、浮浪人である。

　私は何年か前から、一冊の詩集を出さうと、轉々と持ち歩いて働らきに出て居たが、それに辻さんから、長い序文をもらつてゐたが、今はもう、その序文も黄ばみかけて、二三冊の詩稿も、今は取り出して見る情熱すらない。

　まだ〳〵、この古い詩稿よりいゝものが書けるやうな氣がする。

　あゝ燃へ上がるやうないゝものを書きたい。

　私のお友達が「まあ芙美子さん！」と手を握つてくれるやうな詩を書きたい。

　此の寫眞は、一番最近の寫眞です。ところが、自動寫眞で安いせいか、馬鹿げて子供らしく取れてゐますが、目の下には數本の皺があります。私は此寫眞よりもすこし年を取つてゐます。



上京當時をしのびて

今井邦子

女流文學者のなかでも私は特に微祿時代をすごした一人と思ひます。と申ますのは私の家では私の女文士になる事など大反對で嚴格な父親はどうしても許してくれませんでしたから、仕方なしに私は家をぬけ出して無一文といふ程度で單身上京してしまつたのでした。今思へば私も亦何といふ世間しらずだつたでせう、持ちものと言つては詩集を五六冊大切さうに紫メリンスのふろしきに包んで、あとは着がへ一枚も持たず、櫛さへも持たずにたゞ空想を追つて茫然と上京したのです。でも私は少しも都會を恐れてはゐませんでした。それどころか山深い信濃を出ていくつものトンネルを越えて八王子からだん／＼と廣い武藏野の平野にかゝつた頃には思はず一人汽車の窓に寄つて嬉し涙を流しました。

いく山を越えて來りぬ美しき都の夜に
まづ涙わく

私はまづ河井先生（醉茗氏）のお玄關にとび入りそこで二ケ月程御厄介になりました。それから同じやうに文學を志て上京した生田花世さんと御一緒に一文もお金などないくせにどうするつもりであつたか下宿にうつりました。花世さんは時々月末のお拂をどうしやうと考へこんではごはんの箸も上げ得ぬ事がありましたが、一體私は今考へても不思議な程呑氣で平氣でごはんもすゝみ英語の勉强に通ふたりしました。田舍者の私は、そして世間しらずの我儘娘で不自由な思ひをそれまでした事がなくて成長しましたから私は世を恐れる氣持は少しもなく金を憂ふる氣持もありませんでしたが、今思へば美しい程の心境で大膽で明るいのでした。

その月の拂は先生がたの御厚意で原稿料の前借同樣にして無事に拂ふ事が出來

ましたがそれは十一圓なにがしの金高でした。

それから生田さんはやつと職がみつかつて王子の學校へ勤める事になりそちらへ行かれるし私は水野仙子さんと代々木初臺の二軒長屋の一軒に入つて自炊生活をする事になつて下宿を引拂ひました。

此生活が同樣貧乏で……それに私は地方官であつた父母の手元を離れて三才の時から山國の祖母の手元に育てられてゐた身でしたから、成長して親と一緒になりましても互の間がごく冷淡で親しみとてはありませんでしたから、私が親の許さぬ文學者を志して家を出てしまつた事は非常に立腹して昔でいふ勘當同樣になつてゐましたから着がへはおろかふとんもお金はもとより送つてもらふ事が出來ませんでした。それで下宿では貸ふとんを借りてゐましたが、仙子さんと一緒の時は仙子さんのふとんを包んであつた赤毛布を借りてそれを敷きふとんに代へそれも仙子さんのかいまきを一枚かりてそれで夜のものを間に合せて居りました。私が家を出たのは一月でしたが初臺に行つたのは四月中頃でそろ〳〵暖い頃でしたからよかつたやうなものゝ、此度は袷がなくて今まで着てゐた綿入の着物の綿をぬいて大いそぎで袷をつくつて着ましたけれど外に出るには洋傘がほしい時候になつて私は全く當惑しました。そしてその時はじめて氣がついてみると世間の人はよかれあしかれ洋傘をさしてゐるのですが、立派な人が立派な洋傘をさしてゐるのはあたりまへの事として、一見まづしさうな人でも洋傘を持たない人はまあないのを知つて私は全く感心して、どういふお金のはゐつた時洋傘が買へたのかと首をひねりました。さうじてみるとお召や銘仙の美しい着物をふだん着にして、さうかせぎもなささうな若い娘が歩いて行くのを見ても不思議で〳〵この人々はどうしてこんな着物が買へたろうとつく〴〵感心したものでした。

仙子さんの少しの貯へもすつかりすんでしまつた頃の或の日、私はあてのない借金に町へ出てゆきましたが、もとより今日程も知人を持たなかつたその頃の私は一錢のお金を借りる處もありません、無駄歩きをして勞れて歸つてくると、不思議や自分の家の軒をもれておいしさうな肉の煮えるにほひが漂ふてくるのですもうその三四日は、二人は出來るだけ用心して三度々々お香のものだけでごはんを食べてゐた時なのです。

「只今」

私は力なく格子戸をあけて入口の六疊に腰をおろしました。仙子さんは前かけ

で手を拭きながら臺處から出て來て、
「だめだつたでせう。」
と念を押してから
「さあね、どんな事があつても手をつけまいと思つたお金を、今日は少し持つて來たから、これでやれるだけやりませう……今日は豚を買つておいたから……。」

さう言ふ仙子さんを私は姉の如く思ひました。私が中央新聞の婦人記者の職を得たのはそれから半月程たつてからの事で、その日までの困りやうは今も身に沁みて居りますが私はそれだからとて少しも心が曇りませんでした。然しよく／＼物を案ずればそれも亦一つにはその時代の反映で、世が世なら……即ち現代のやうな時勢なれば私も必ずいろ／＼の刺戟を受けてもつと貧者といふ事を根本的に考へさせられ、之を自分一個の問題としてだけでなく、社會と連絡してその向上法や解決の希望を持ち、そうした研究をする一人となつたかもしれません。私はずゐぶん熱情家でしたから。



ペン一本の生活

神近市子

×

文壇の微祿時代について何かを書けといふ御注文ですが、あたくしなど萬年貧乏で今もつて辛うじて微錄にありついてゐる次第で、餘りお話できるやうなこともありません。

此頃何よりも痛切に感じることは、今日の世の中は「正直な勞働」によつて生計を立てやうと望むものにとつては、實に生きるに困難な時世だといふことである。

×

微祿時代といふからには、供題者の意味は文壇進出以前といふ意味があるのでせう。わたくしなど、文壇から認められもせず自分でも文壇なるものを認めてゐませんから、今日文壇人たる積りもありません。しかしそれを文筆をもつて生活

をたてた初期といふ意味に解し、その時代の貧乏について語れといふのであつたら、わたくしは却つてその時代は比較的に楽な生活をしてゐたやうに思ふのです

わたくしは、文筆業の初歩には新聞記者をつとめました。その關係から種々の人々の庇護もあり、外人などに懇意な人もあつて、飜譯通譯などの仕事もあつたので、その時代は比較的生活が楽でしたほんとに困つたのは結婚生活に入つてからで、特に三人の子供を抱へこの空前の不景氣をのり切つて行く現在が一番くるしいのである。

×

これは決してわたくしが殊更に異を立てゝいふのではありません。十年前までは日本の資本主義の形態は今日の行詰まりなんか豫想はしてゐませんでした。それだけに「微祿時代」にあつたわたくし共にも、何かかゝと落ちこぼれの仕事があつて、どうにか生活ができたものでした。それがこゝ數年で日本の經濟生活は甚しく行詰まり、同時に中以下の生活は一時に逼迫して來ました。そしてわたくし共の如く、ブルジョア階級によつては敵視され、文壇内の團體によつては庇護されない者は、從つて可なり苦しい立場にあることは事實です。

×

しかしかうした包圍の中にゐることも今年あたりを限度とするのではないかと思ひます。

今日の文壇なるものが、解體の運命にあるといふことは何人も認めてゐるところです。それがどんな風なものになつて行くかといふことについてこゝに詳論してゐることはできませんが、しかしそれはもつとズーッと社會性を帶びたものとなるでありませう。わたくし共もそれ迄長生きをすることができましたら、又何か面白い感想をお話しできるかも知れませんが、今はたゞ現在の苦しさといふものより外にお話はありません。そして現在のくるしさといふものは、非ローマンチックで、本人にとつても他の方にとつても話しても聞いても面白くないものですから、くわしくは止しますことにしませう。

昔は槍一本の生活と云つたさうです。わたくし共のは文字通りにペン一本の生活です。たゞしかしあの「槍はさびても……」の心意氣だけは、わたくし共も一本のペンに托して失つてはゐないつもりです。

十年前

英美子



文筆を持ち始めた動機といふことについて、何を書いたら可いかと、子を寝かしつけながら考へた。すると、いつしか私は、何故、文壇にも詩壇にも出られなかつたか、といふことを考へてゐた——この方ならば大分書く事もありさうだ。だが、其れでは貴社の御注文に外づれるので、どうして私が詩の道へ來てしまつたかに就いて少し書く。

　私は、極く舊弊な家に生れ育つた。祖父も父母も和歌をたしなんでゐた。門前の小僧で私も、八つ位からあやしげな三十一文字を列らべ覺えた。幼稚園にゆく頃、亡父が畫入り和本の百人一首を毎晩一首づゝ、昔の字つきで敎へて呉れた。亡父は、新らしい歌にかゝる前にいつも一と通り昨夜までの復習をさせた。

　何んとかやら、サキノカンパクダジョーダイジン——中々長い名を能く記憶したものだ。私は父の示す字つきの先を見て詠むのではない、畫をみて覺えたのだ。

　頭のつるりと丸い坊さんが、三笠山だとか、孔雀のやうなお姫さまが、花の色はだとか——

　私の生れた故郷は靜岡市だ。靜岡には家康が今川氏に人質にとられてゐた頃の石合戰で有名な安倍川がある。父はよく休日などにこの河原へ珍石を探がしに私達兄妹を伴れていつた。

　　安倍川の堤でとりしはちす花
　　　待つ母君の家づとにせん。（八才）

　この下の句の、家づといふのが自分ではとても素晴らしい覺えたてのことばだつた。この頃の石が現に、武藏野のこの家の庭に水盤を飾つてゐる。父も母も兄も妹も凡べての肉身を失つた私にとつて中々、石とは云へない思出だ。私にとつて石は冷めたいものではない。或る種の

人間の言葉などよりははるかに溫情である。——是は、飛んでもない脫線寄稿になりさうだ——

父や母と、膝をならべて勅題を淸書する晩は問題だつた。字をなどつて叱られたり、やつと字の方がうまくいつたと思ふと、手についた墨で奉書を汚してしまつたり。——選歌が發表されるまでは當選の榮にあづかるかも知れないといふ期待を持つてゐた。今にして思へば小ざかしく、いぢらしいおかつぱさんだつた！

この稚氣は、三つ兒の魂百まで、で、或はどこ迄も私について來たのかも知れない。思へば馬鹿々々しく、いぢらしいおばあさんでもある。

この幼少からの惰性は二十頃まで熾に私に短歌を作くらせた。舊作にこんなのがある。

金鈴に晶子燁子の自選歌集
吾をおとぎの冬のひとりね

其後、母が亡くなつて悲愁の極み、七五調の新體詩を作つた。これが詩の形の始めだつた。

その以前にも短かい詩は高女の同窓會雜誌等にのせてゐた。塚本はま子女史が恰度國語を擔任されてゐた時、春といふ題で作文を書き、一度、非常なおほめにあづかつたことがあつた。その他は、先生に叱られた記憶ばかりだ。

十年前、ふとした動機で、西條八十氏の門をくゞつたのが、この慢性、不治病の始まりである。短歌ではうたひ切れない氣持ちが私を詩作に伴れていつた——英美子といふのはペンネームで、最近、中林三枝といふ本名に歸復するつもりである。

私の文筆生活へのデビュ

望月百合子

私は女學校を出ると直ぐ、家で決めた結婚が待つてゐました。けれども、私は昔の女大學式の舊い家庭にはいつて、夫

や姑の奴隷になつてしまふのがどうしてもいやだつたのです。その頃丁度、青踏社の新らしい女の運動が起つてから七八年經つた頃でした。そして私は別にその新らしい女といふ人々の言つたりしたりすることを眞似た譯ではありませんが、それは一々尤もに考へられたのです。そしてこれ程至當な女の言ひ分をどうして世間では受容れようとしないで却つて嘲笑し、無視するのだらうか？　と思ひました。そして私も自分が正しいと思ふ處を行ひ、且つ言ひして、この至當な女の要求を實現することに努めたいと思ひました。それで私は既に決定してゐた結婚を捨てゝ家を出ました。

最初讀賣新聞の記者になりました。それは私が女學校を出て二ケ月目の大正八年六月のことでした。この時から私の文筆生活とも言ふべきものが始つたのですですがこの生活は當時十九才のはにかみ屋の少女だつた私には實に辛らいものでした。私は書きたいと思ひ言ひたいと思ふことは一行も書けませんでした。そして毎日々々ブルジョア婦人の訪問、やれ新郎新婦の寫眞取り、とかで私はこき使はれねばなりませんでした。失望と憔燥で私は燃え立ちました。ですからブルジョアの家の床飾り然とした奥樣を訪問した記事の中に、その婦人の意見として私自身の意見をすつかり書いたりして、せめて鬱憤を晴らして居りました。惡いことのやうですけれど、どうせ意見なんかの持合せがあるやうな婦人はなかつたのですから、それは却つていゝことのやうでした。その婦人達の虚榮心を滿足させるためにも、賑やかな紙面を欲する新聞の爲めにも。せめてかうした方法ででも自分の考へが書けるのが嬉しくて、私は隨分澤山の原稿を毎日書きました。さうして書いてゐるうちに私は益々書くことに馴れて、どんなものでも書けさうな元氣な氣持ちになりました。併し年が若かつたばかりでなく、忙しい生活で勉强する暇がなかつたのと、もう一つは新聞記者といふ立場から、まとまつたものを書くことが出來ませんでした。それがまた私には大變の憔燥の原因でした。それからまた、多くの人々に會つてゐるうちに私は大變なことを發見したのです。それは新聞記者と云ふ私の職業が虎の威を藉る狐と言つたやうなものだといふことです。若し私といふ十九才の少女が、どこかの名高い政治家、或は實業家、或は敎育家の處を個人として訪問したとしても恐らく會ふことさへ出來ないでせう。それが新聞記者なるが故に叮嚀に案内されその名高い人と對等に話が出來るのです

そしてお世辭さへも言はれるのです。勿論どんな人とでも對等に話が出來るのはいゝことです。併しそれが私といふ人間のためではなく、私の名刺の肩書の爲であることを思ふ時、私は私の本來持つてゐる價値をさへ失つて、全くのゼロになつたやうな感じがしたのです。そしてこのまゝでは私は何處まで行つても虎の皮を着てゐるゼロに過ぎないと思ひましたさう氣がつくと、私はもう一日もこの職業をつゞけるのが苦痛で堪らなくなりました。素足で大地にしつかりと立つて、そして私自身の力で叫びたい、私自身の價値で生きて行きたい！　と思ひました。

　けれどその頃まだ論文も書けず、小說も書けなかつた私は、その職業を止めることが出來ませんでした。若し止めれば反抗して飛び出して來た家に歸るより他生活の道がなかつたからです。而も萬一家に歸るやうなことになれば、娘としての私の生活は前より何百倍も惡い狀態に置れるのです。その事を思ふとたとへ石にかぢりついてでも再びあの壓制と忍從と因習と盲目的愛情の家に歸るわけには行かないのでした。

　私は何かまとまつたものを書きたいと頻りに焦りました。けれどもめまぐるしい記者生活では迚もそんな餘裕はありませんでした。それでいつそ思ふやうなものが書けないなら、せめてもつと正直な仕事をしたいと思ひました。そんなことを思ひ乍らその頃銀座一丁目の角にあつた社を出ると、すぐ社の横の普請場から「君と別れてエーンヤラ、松原行けばエーンヤラ」と云ふ地つきの唄が聞えて來ました。それがいかにも愉快さうなので一寸のぞいてみると白い手拭を姉さんかぶりにして、絣の腰卷の下から紺の脚絆をみせ、板裏草履で地面を拍子面白く叩き乍ら唄つて綱を引く樣子は、まるで盆踊りでもしてゐるやうに張りがあつて愉快でした。私は忽ち呆然として見惚れてしまひました。それは全く勞働とは思へない程、寧ろダンスとでも言ひたい程愉快らしい仕事でした。私はそれをしみじみ羨ましいと思ひました。いやで／＼たまらないのを强いて引ずつてゐる自分の仕事と、あの女達のいかにも樂しげな仕事ぶりとの餘りの隔たりにびつくりしました。そしてその女達の掛値のない正直な仕事を思ふと、自分の虎の皮が益々いとはしくなつて仕方がありませんでした私はすぐにでもそんな虎の皮を脱ぎ捨てゝあの女達の仲間にはいりたいなと思ひました。そしてその日は云ひつけられた仕事がたう／＼出來ず、ぼんやりその女

達の仕事に見惚れてしまつて、夕方社に歸つて、先年ロシアで殺された編輯長の大庭さんからやさしく戒められたのでした。

　ともかく、こんな狀態で一年十ケ月の新聞記者生活の後に、私は友人のお世話で婦人畫報の編輯に手傳はせて貰ふ傍ら早稲田の聽講生になつて再び勉強することになりました。そして間もなくフランスに勉強に行くことになつて、そこで滿三年暮らして歸つて來ました。それから渡佛前から、これこそ人類の最も正しい理想であると信じてゐたアナキズムの運動に投じていろ〳〵なもの丶飜譯等をして來ましたが、これから新らしく第一步を踏み直して、しつかりしたものを書かうと思つてゐます。けれどいつも貧乏に追はれて、餘裕がなくて困つてゐます。

　要するに私の文筆生活はこれから本當に始るのです。私の信ずる理想のために！　私の生命を賭した行動と共に。ペンと劍をいま私は双手に握つて立たうとしてゐます。

三枚の切符

中河幹子



　麹町で震災に逢ひ、無慾な私達は何一つ出さないで四谷の方へ避難してゐましたら、燒けないと思つてゐた家が、ほんとに燒けてしまつて、何一つ無くなつてしまひました。

眞一が三つ、死んだ女禮が一つでした千駄ケ谷の大きい例の榎の木の前の方に仕方なく一時の間借りをして、半日、女學校の國語の先生に通ひました。

　十六七の頃から作つてゐた歌は、震災を境にして多少眞劍になつたやうでした。

　割合に緊張した氣持で作歌にいそしみ餘暇に飜譯をつづけたりしました。

　イバニエスの傑作集を出したのは丁度

その頃でした。人にすゝめられ、それにお金が貰へたので。英學塾にゐた頃、代譯をしてゐたのが大變役に立つたやうでした。

勿論世間へ出ようなどとそんな事は考へるひまもありませんでした。家庭では主人の勉强を第一に、私は二人の子をかゝへて生活に一生懸命でした。

その頃よりは一寸前ですけれど、をかしい記錄の一節を、與一が小說に書いてゐるので少しばかり再錄してみます。

×

さうした或る初夏の午後であつた。彼は偶然妻の財布から三枚の電車切符を見つけ出した。實際その時は、その切符と他に五錢あつたのが彼等に何等かの享樂を齎らし得る唯一のものであつた。で彼は妻をつれて久しぶりに二人で電車に乘つて淨水池の方へ出かけてみる事にした。

彼等は勿論、何も買つたり食べたりする事は出來なかつた。唯だ色々なものを見るだけであつた。彼は妻に對して氣の毒な氣がした。然しさういふ氣持を示す權利さへ今の自分には無いやうに思はれた。

二人は淨水の硝子板のやうな流れに沿うて歩いてゐた。土堤下の家の横にある豚小屋では親豚と子豚とが、夫々別な小屋に入れられて互に鳴きあつてゐた。雲の影が時々二人やその上に落ちる。そして更らに青い稻田の上を走つて遠く森の方へ消えてゆく。

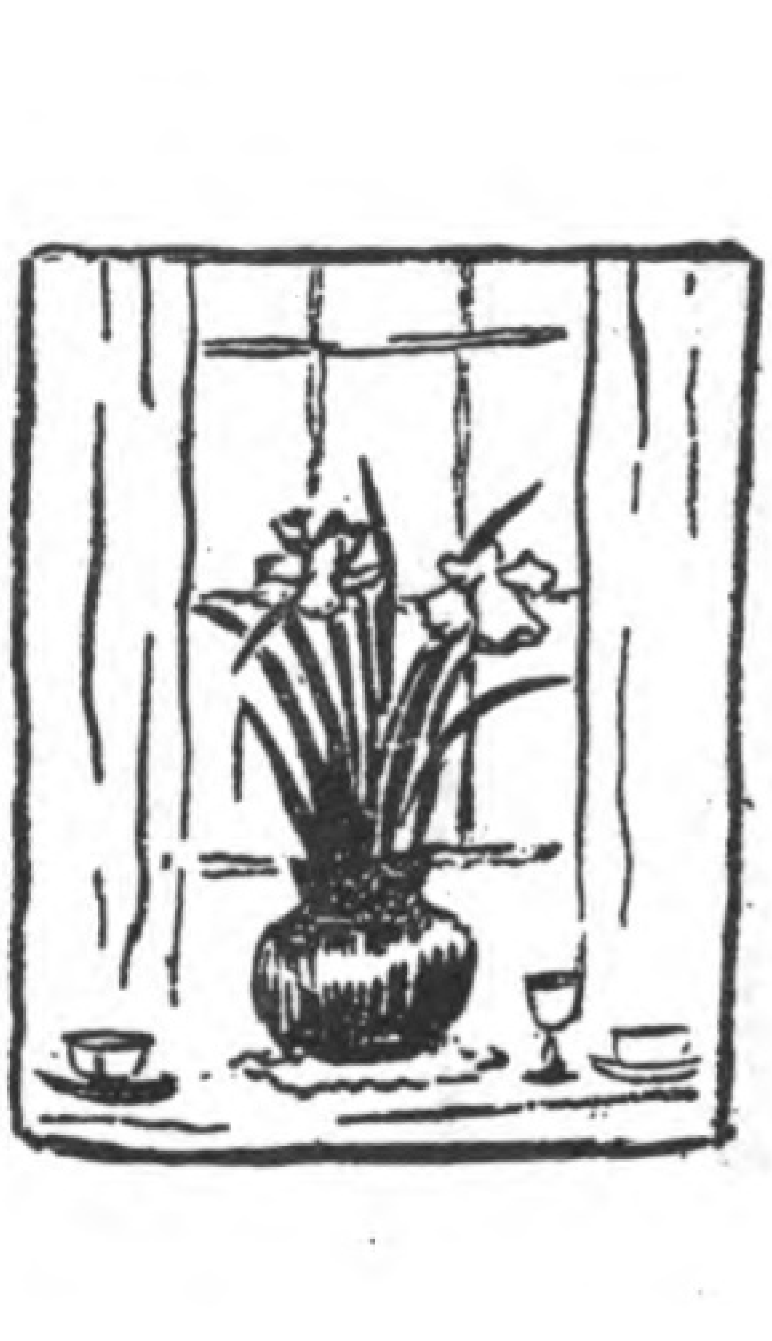
帽子もかぶらず、蝙蝠もさしてゐない男と女とである。それに土堤の上を通つて歸るらしい男が二三人、「よう」とわざと聲をかけたりして行つた。

新吉は暫くぼんやりと風のそよぐ眼前の風景を眺めてゐた。が此處に立つてゐる自分自身の姿があはれになつて來た。

「もう歸るかなあ。」

「はや歸るの。」

久し振りの外出を喜んでゐた妻も、新吉にさう云はれると彼の後に從つて、もと來た方へひき返した。氷が飲みたいと思つた。が一杯の氷水さへ飲むに足りる金がなかつた。と馬鹿に方々で氷の旗がひらめき出した。（つつましき祝宴より。）





これから本氣に

若山喜志子

私が短歌といふものに親しみを感じて詠みはじめたのは十三才の春の事で、まだ小學生の鼻垂れ娘の時であつた。十三と云へばそろそろ物心がつき始め、感傷的な少女時代に入る頃なので、私はよく友達の誰れ彼れに歌を書き送つては雲をつかむやうな、何とも云へない遠い彼方の世界に憧れを抱いて得意になつてゐたものであつた。然しまだほんの子供の事とて詠草として書き殘しておくなどの考へはなくその場その場で忘れて平氣でゐたものだ。

それでも今だに忘れない歌が唯一首ある。

水車小屋をへだてゝ見ゆる苗代の小田
にむれなく夕蛙かな

よほどの傑作であつたと見え、この歌ばかりは三十年になんなんとしてゐる今の年まで折々に思ひ出しては口ずさんで見て今日まで忘れないでゐる。

故郷の私の育つて來た家の廣い屋敷の隅に自家用の米を搗くために昔からの水車小屋があつて、いつもそこで米を搗いてゐた。その水車小屋のわきに布袋竹のやぶがあつて、そこからずつと展けた田圃が見わたされる、五月のある日夕方私はそこに佇んでゐて右の歌をよんだのである。

かう書いてみると、十四、十五、十六十七、とこの四年の間私はすぐ上の姉と二人で熱心に歌に親しんでゐた時代であるのに、その後志を立てゝ家を出る時無理な事をしたのでその頃書いたものは一切家に殘して置いて出てしまつて何一つ手もとに殘つてゐない。

姉は詠草に「言の葉ぐさ」と題をつけ大切に持つてゐた筈だが緣家先きが火事に逢ひみんな燒いてしまつた。

姉は竹柏會の「心の華」に、私は晶子

さんの「みだれ髪」や、服部躬治氏の「伽具土」に親しんでゐて何かと云ふと二人に意見の衝突があつた。其の時代は雲をつかむやうな無茶苦茶な私ではあつたが三十年を經た今日に及んで思ひ起してみるとその時分の私の歌に對する信念のどんなものであつたかは現今の事實で證明されてゐる。といふ事ができると思つてゐる。

私が眞裸の自分の生命に直面する生活に入りたいがために家を出る事を兩親や親類の者に願ひ出たとき、「苦勞がして見たいから」と云つて皆の者を呆れさせたが、私の文學修業に志を立てた第一歩がその「苦勞がして見たい」の一言に出發してゐる。そして今に及んでゐるのである。

縁あつて若山牧水の妻となつたのも私の運命といふ立場から見て決して無意義な事ではなかつたのである。牧水が早世などせず、六十までも七十までも生きのびてその藝道にますます勵んでゐるものとすれば、私は今こんな物を書かずにすまされた事であらう。私は一生涯牧水といふ人のかげに隱れて忍苦の生活を續け終はせ得る自信を持つてゐたから。

實に人一人の運命と云ふものゝ不可思議さを今更のやうに私は刮目してみる、そして因あつて果あり、の宇宙の敎へがうなづけるやうな氣がする。

私が文學修業に志を立てゝから二十餘年、いはゆる苦勞の道に分け入つてこの方の過去を顧る時、そこには悔いこそなけれ自分の生命を主としての精進の道がどれだけあつたか、といふ事に思ひ到ると實にはづかしい盲目の歩みであつたのである。それは自分の不明さの爲もあつたに相違はないが、また一面さうした機會を與へられない境遇であつたとも云ひ得る。

あなやこはゆくてもはても薄氷のわが世なりけり何踏むべしや

はてしなき空より空をはてしなく流るゝ星か我身かなしき

まづしくあらば刺して死なんと思ひしをこのまづしさに克ちてゆく身は

大河の堰のくづれを思はずやこのなげき早やすくふすべなし

盲目者にも啞者にも劣る朝夕のおのが起ち居におもひいたりぬ

泣けばとて何がなだめむと思ひふと立ちあがり襷とりけり

このなげきも昨日に見たるよろこびとひとしくあはれ消えてゆくべし

あはれ君われのゆく手にひとすぢのな

げぎとなりて光り終せな
この物憂さの一しづくとて生れたる吾
子なればなほいとしとぞ思ふ
あはれあはれこの憂鬱をさながらにつ
たへらるべし子は乳を吸ふ
いやはてのなげきのはてに吾子の顔小
さく見えて眠りゐるなり
皆人のあはれとなげくあはれさの我身
ひとつにしみて雨ふる

これ等の歌は私の家庭生活を始めた初期の作で、今見れば誠に幼稚なものではあるが、私の歌といふものに對して本氣に精進しはじめた第一歩の足跡と云ふことが出來る。

私はつひ先頃、夫に死別するまでまだ一度も歌壇に進出して華々しい生活をしやうなどとは思つた事がなかつた。先日もある會合の席上でさうした今までの氣持を一寸述べたところが、そんな筈はないとひどく否定された事があつたが、實際私はのんきな女で正直なところ一度もさうした事を意識してはゐなかつたのである。

ところが急轉直下、夫にぽつくり死なれて仕舞つて後の私はどうしてもそれまでのやうにかげにかくれてのんきな其日を送つてゐる事が出來なくなつてしまつた。で自然に素裸で直接世の中に打つて出なくてはその日の生活に困るといふ狀態に立ち到つて來たので俄かに歌壇人の仲間に飛び出さなくてはならなくなつた――こゝの消息は一寸說明に苦むが――私は決して不遜な言を吐くものではない事だけを認めて頂きたいと思ふ。

編輯の方に注文された、歌壇進出當時の事といふ思ひ出はまだ私には今までないので、さうした事はこれからの私に本氣に考へさせられる事である。（四、二、二）



おゝその時代は自由であつた

高群逸枝

□

わたくしの微祿時代のことを書けといふ御命令です。わたくしの微祿時代――編輯者のいはゆる出世前のわたくし、「おお」といふ詠嘆と共に申しませう。「おおその時代は自由であつた。」

□

わたくしは遠慮氣兼もなく、わたくしの生地を、思ふ存分に、バクロしてはゞからなかつた。

なるほどわたくしは其の時分、非常に物質的には困つてゐた、從つて生理的にも弱つてはゐた。何しろわたくしは汎ゆる仕事といふ仕事をし盡し、どん底の生活をいやといふほど味はつてきてゐた。

わたくしは個人としてのわたくしの生きて行く道――といつたやうなものに對しては、全く高をくゝつてゐた。わたくしは運命とか、他人がわたくしに加へる壓迫、輕蔑等々のものに、何の感じも抱いてはゐなかつた。

□

「醉ひしれて泣けば暮春の花が散るあまいゝのちを何とせうぞの」

といつたやうな其頃のわたくしの歌が示してゐるやうに、頗る淡泊なわたくしであり、一種の享樂兒であつた。

□

もちろんそれだけではなかつた。わたくしは貧乏な家に生れた娘として汎ゆる背負ひきれない懷疑、憤懣、反抗といつたやうなものを、しかもそれが初めから個人的なものでなく、非常に抽象的な善くいへば社會的なものとして育たせてゐた。

□

かうした一種の時代の子としてのわたくしが、初めて故郷の熊本を出て、これといふ目的もなしに、然し何の不安も恐怖もなしに、大東京の土を踏んだのは、大正九年の九月一日であつたやうにおぼえてゐる。

「何が大東京だ。」

わたくしの口をついて出た最初のつぶやきは、都會に對する田舍つ子の本能的な反感だつた。

わたくしは、いやに都會人めかして行き來してゐる着飾つた群の中を、一種異樣な風態で、昂然と眉を揚げて歩いて行つた。

□

だが、わたくしの行くべき處といふものゝないことは、さしよりわたくしを弱らせた。然し、行きづまるといふことは決してありはしない。わたくしは當時赤阪の乃木坂の下にあつた、婦風會の婦人ホームを目がけて飛び込んで行つた。

そして、有名な守屋東女史にお目にかゝつたが、その第一印象といふものは、甚だよくなかつた。彼女はどつかと座り頰杖をついてわたくしを見つめた。

ふん！　とわたくしは考へた。此の有名な婦人は、まことに困つた觀察をしつゝあるわい。

□

だがまあ仕方がない。わたくしはわたくし自らの世界に住む。彼は彼自らに生きるのだ。かくてわたくしは守屋女史にお願ひして、何か仕事口を見つけていたゞくことにした。

實際、それこそがわたくしの彼女に對する唯一の願ひであり、また社會に對する要求だつた。その他のことはどうでもいゝことだ。

□

彼女はわたくしの爲めに紙函製造所の女工の口を見つけてくれた。わたくしは非常に感謝して、早速その仕事にとりかゝるべく準備した。ところが偶然とでもいふのだらう、ふと彼女の好奇心に似た心の動きが、わたくしに次のやうな問ひを發せしめた。

「あなたは何か書いたものをもつてきてゐるのではないのですか。」

「はい、わたくしは放浪者の詩といふものを書いてをります。」

「放浪者の詩？　ふむ、では私に一寸見せて下さい。」

□

彼女がそれを讀むと、「放浪者は不朽にも永遠にも路傍の人である。」などゝ書いてある。「放浪者の生活を根底からひつくりかへすことのできるものは、獨り永生に關する科學の確實な發見のみだ。」などゝも書いてある。彼女は少し面白いと思つたか、新潮社へ紹介しようと云ひ出した。

□

これが出京第二回目の出來事で、私の處女詩集「放浪者の詩」は、守屋女史によつて新潮社へ紹介されたのであつた。もちろんそれは決してすぐには出版はされなかつた。その後婦人ホームに出入りしてゐる世田ケ谷の農家のおぢさんの處に寄宿して、そこで「日月の上に」を書き、それが生田長江氏によつて紹介された後、「放浪者の詩」も相次いで出版された。

□

あれから守屋女史にも、かけ違つてお目にかゝらずにゐる。一どお目にかゝつておわびやお禮を、泌々と申し上げたいと考へてはをりつゝも、つい昔に似合はぬ出不精なわたくしになつてしまつてゐ

こんな時にはこんな姿で

葵イツ子

る。

□

こゝ七八年といふものゝ、即ち編輯者のいはゆる出世後といふもの、わたくしはまるで「門外不出」の生活を續けてゐる。それは一つには、何となく自由でないからである。ごく小さな名前であるにしても、兎にも角にも一ど世上へバクロされ、釘付けにされた名前の伴う汎ゆる不純なものが、非常にわたくしを不愉快にする。

□

わたくしは最早や完全に昔の、いはゆる微錄時代のわたくしではなくなつてゐる。わたくしは再び、より大きな、そして盛んな自由の時代を、これからもつ筈であるが、その自由は、さきの自由とは全く趣きを異にするものである筈だ。

この意味において、わたくしの本當の「微祿時代」は過去のそれではなく、現在が即ちそれだと私は考へてゐるのである。



創作をやり出した當時のことを言へとのこと、其處には内面的な事情ばかりがあつたから、それを言はせて頂く。

自分で讀み返してさへ不滿であるのに發表することは悪いと思ふが、直接に被害者から叱言を受けないから、まあ良い加減に過して來た。

曾て私は、心地が朗らかで、非常に熱情的であつた頃には、何かしら書いてみたい衝動を覺へてゐた。然しその頃には家から外へ出たことが無いので、蝸牛といふ綽名を附けられてゐる位であつて、書かうとしても材料が無かつた。事件を見ないし背景も知らぬ。

其後材料があるやうになつてみると、隨分悲しいが、苦しみが多くて精神が疲れてちつとも感情が躍らなくなつてゐるそれで「書くとしても今は無理だ、もう

少し先のことにしやう。」と思つた。すると家庭内で盛んに急立てられるのでどうにも仕様が無くなつて、兎も角書くことにした。

然し、若し、感情の硬化が治るやうになつたとしても、或ひは自分には、自分の滿足するやうなものは永久に出來得ないのかも知れぬ。或ひは創作以外の何事であつても、自分が自分へ加へる批判はさうであるかも知れぬ。斯う考へると、「では、手輕なところから行つても可からう」といふ風になる。

それから、自分の作品に對して、屢々「こんなことを表現する必要があるのであらうか?」と反省して了ふ。そして「繪や言葉や文字は、これ以上の事を現す爲に必要なものであつて、こんなことは、その必要外では無いか。」とも考へて行く

これと同じ意味の結果がある。これは子供の時に、私の心の中で頻りに問題にして考へ込んで居たことで、郷里に近い二見ケ浦へ遊びに行つた度毎に、困つてゐたことである。二見ケ浦　、十二三年前までは、防波堤なども築かれて居なかつたから、極めて自然のまゝの、美しい波打際を見ることが出來た。東京附近の海では、夜更けのお風呂屋の湯の樣に濁り切つてゐるが、二見ケ浦の水は碧々として全く澄み切つてゐたから、子供の心に、海といふもの、果て無く續く水の美は、感激に値してゐたのである。それに波打際が氣に入つてゐた。綺麗な砂地へ靜かに水が登つて來ては、白い飛沫を見せてまた歸つてゆくのを眺めると、自分が眺めるばかりでは惜しかつた。お友達にも話したかつたし、もつと澤山な人に「美しいんですよ、御覽なさいませ、まあこんなに」と呼びかけたい意味の氣持ちが湧き立つた。それでいつも渚を凝視したが、この美しさを言ひ表はす言葉が思ひ附けなくて、實に煩悶してゐた。

今日になつてみると、あんな單純な美觀位を問題にしてゐたのは詰らぬと思ふがあれほどに言ひ表したい熱望の叶はなかつたことは痛ましい。然しこれに照せば、今自分の書くものも、自分には埋沒させるには惜しいと思ふ内容でも、いつかは幻滅を知らねばならぬのかも知れぬさうであつても止むを得ない、必らず常に自分で嚴密な批判は加へなければならぬと思ふ。

何にしても、年中本を讀むことも無しに居て書いて行かうとするのは、輸入無しの輸出をやるもので、酷い冒險である

然し「こんな時にはこんな姿で、あんな時にはあんな姿になれば可からう。」と遂々さう結論を下して了つた。

だから私は、自然に、自分から遠いことばかりを書く。中心人物を女性にして書くことが少ないし、朝鮮の人の民族問題のことや、支那人の心配などしてゐる勿論、今の時代は遊戯文學に耽るべきでは無い。啓蒙運動に役立つたり、社會運動の熱を、より高く燃へ上らせるやうな働きをしなければならぬ。それには一人でも多く筆を取つた方がよい。私もさうありたいが、その役目の爲には、力が足りなくつて淋しい。

殊に自分の感情を速やかに蘇生させたい、これがこの仕事の第一の道具であると知り乍ら、どうにもならずに弱たまゝでゐる。

大體は性向から

鷹野つぎ

只今から思ふと赤面しますが、娘のころ私は可なり氣むづかし屋だつたのでせろ、その實間が脱けてゐたに違ひないのですが、大抵のことには直ぐ同意しかねたものです。判りきつたことでも、まだもつとよいことがありそうに思へて、おいそれとは頷けなかつたものです。しかしこんなのは小心な臆病者にありがちな癖ですが、外見上は片意地ないやなものだつたでせうと思ひます。

こんなわるい癖が、私に物を書く興味を教へました。云はゞ自分の實際上に足りない處を書いて補つてみやうとする無意識の要求が始つてゐたかと思ひます。それは現今とはちがつて、明治末期あたりでは因習の力は濃厚だつたのです、心の中で思つたり希んだりすることは、今日とはちがつて實際上には容れられないものがたくさんありました。現在では思つたり望んだりする事が、そのまゝ現實の上にハキ〳〵と實現されて行く有樣ですのに、そのころには壓倒する力の方が遙かに強かつたのです。

一面では眞に書くことの愉悦は現在と

はちがつてゐたかと思ふ。云はゞすべてが未開拓な任意な方向の上に書かれて行つたもので、自然主義時代――あの現實曝露の悲哀などと云はれた文藝の旺んであつた頃でさへ若い年ごろの私などには期せずしてずつと後期の人道主義とか、理想主義などの方が近かつたかと思ひます。

大正初期初めて一葉女史のものを讀みまして、私は矢張り女史が女性共通の秘奥な心境の王國に君臨してゐるのを感じて、瞠目したものでした。女史のものは矢張りリアリストと云ふには遠く、ある憧憬に似たものが多かつたんでしたねと申すよりも女性の女性らしい主張を、その藝術家的天稟で、ずゐぶん力強く文筆に托してゐたと云へると思ひますね。

一葉女史の執筆當時から見ると、私どもの世間の狀態は變つてゐました。たとへば女史の日記に散見してゐた、あの反官尊的な想概でその當時の狀態を語つてゐましたやうに、日露の役以後は甚だしく軍人崇拜熱がありました。

そのころ軍人の夫人と云へば、飛ぶ鳥も落すほど威勢がよかつたものです。冗談でなく娘たちは、將來の夫にはまづ軍人を描いてみると云つた順序だつたのです。

流行といふものは面白いもので、一種の時代思潮なんですが、それが少しもおかしくなかつたのです。恰も誰れも憑かれたやうに自然とさう思ひ込んでしまつてゐるのです。次いで戰後の好況等から實業家の擡頭してきたのもそのころです友だちのなかで貿易商に嫁いだと云へばまづ羨望されたものでした。

一葉女史の時代には武家が漸く一面インテリゲンチヤの下地をなして、官吏では何々官、何等官などと云つて幅を利かしてゐたものでしたが、私どものころでは軍人崇拜に加ふるに、國威發揚の結果金融機關に携はる實業家、所謂商人時代が現出してゐたかと思ひます。

此の間文筆家と云へばごく〳〵限られた殊勝な階級に屬してゐた事は申すまでもありません。

だが私どもとしては此の階級に注目した事は實に驚異そのものでした。むしろ教育界などでは全然敬遠してゐたものでしたが、その種の壓迫があればあるほど此の群團には何か本質的な自由性が基礎になつてゐるやうに思つたものでした。内心私などは少なからず一般世間の狀態から將來の方向に迷つたものです。

と云ふのは娘たちは時の有力者に嫁ぐのを唯一の頼みにして居り、それが不可能な者でも家庭婦人として收つてしまふ

以外には、他を希むだけ無謀として卻けられたものでした。ところで事實は私どもの眼に、その因習的な家庭生活なるものが、決してほがらかなものには映らなかつたのです、(さう云へばあの蘆花氏の『不如歸』が當時の女學生間に盛んに讀まれてゐました。)どうかしてもつと自由な伸々とした生活が欲しい、さう思ひながらも、今日のやうに職業につくとか、自分の志す何かの團體に加はるとか云ふ事は、よほどの困難を冒さなければ許されないことでした。

つまり今日とは恰であべこべで、なるべく贅澤をして、らくに暮せる者が天寵があり、貧乏してあくせくしてゐる者が廻り合せがわるい者とされてゐたのでした。此の點では當時の運命論者でさへ、現實上立つ瀬はなかつたわけです。

私などは前申したやうに、何も判らないくせに懷疑家であつた處へもつてきてずゐぶんさうして世相には漠然とした不安や不合理やを感じてゐました。

そんなことで一つには性向から、日常表現されないもどかしいものを、書いてみると云ふ風になりました、尤もまだ自意識も薄弱で、たあいないものでしたがそれでも書くといふことは、より正直に觀たり考へたりせられる事だとは思つてゐたのです。

そのころの娘たちですと、何人も或ひはさうであつただと思ひますが、個人意識を殆んど貴重な獨自性かのやうに過信してゐたものでした。今日の女性から見ると一歩前期の過程のものですが、しかし斯うした私どものスタートにとつて、文筆の補佐の可成り有力だつた事は認めてもらへると思ひます。

だいたい於て時代こそ變れ、今日でも文藝に向ふ動因が、多少とも現實感の不充足に根ざしてゐる點は大差ないと思ひます。つまり今日では比較的全景的に女性の生活相が照出されてゐますが、それだとて現在の女性がより多幸であるかと云ふことは、一口には云へない。恰度理想は結局永久に理想だと云ふのと同一で欲求がみたされた時には既に他の新らたな欲求が生じてゐる。文藝に對する女性の興味も未熟な私どもの時代よりは更らにたえず新らたなるものがありて然るべきだと思ひます。





無意識の芽生より

榎本八十子

文筆生活に入つた動機と云つても、別に瞭りした過程も持つてゐない。

文筆かぶれから遂に家を追んだされた○○家の娘といふ世間樣の評判を背負つて、兎も角結婚はしたものゝ、良人は教員、姑は小作百姓で、土に親しむなんて空々しい心掛けではゐられない烈しい勞働の生々しさが待ち構へてゐた。「百姓の出來ない嫁じや困る。」と姑に愚圖られたのをやつと切り拔けて、村の娘つ子の針仕事教授といふ仕事を見つけて、豆腐の代を稼ぐことになつたが、家の中に坐つてゐることはちつとも世間體がよくない。

姑は折さへあれば野良へ引つ張り出さうとする。恁うした時、泌々自分を凝視したのです。自分の行くべき道といふものを眞劍に考へ初め、誰一人祝福して與れない新らしい生活に向つて、求めるものは矢つ張り文學許りだつた。苦るしいと思ふその日その日が、繰り返されてゆけば行く程、自分の生命の尊さ、魂のいとしさを感じて、その心の歩みや、燃へ立つ熱を、何かの形で表現せずにゐられない氣持が、自分を矢鱈に讀書に親しませ、ペンを慕はせた。

「紙べえ無駄にして、一文にもならねえ。」と云ふ姑の目を盜んでは、その頃はまだランプの光が、じゆう〳〵と遠慮なく油を吸ひ上げる音に冷や冷やしながらぽつ〳〵と創作することの苦さ、樂しさを心の深くにたくし込むやうになつた。そうして幾つかの長篇や短篇が生み出されたが、それをどうしやうといふ心持もなかつた。書き上つたのを、その儘、燒いて了つたのもどの位だか。それらを保存して置いて、十年經つた後に讀み返へして御覽なさい――とある人に云はれた島崎藤村氏の言葉を思ふと、惜しい氣も

なく書いては燒き、書いては燒きした。
結婚した年の夏、文藝講習會が初めて早稻田に開かれたので、良人と二人で姑を說き伏せ、私は二週間許り通つた。藤村氏、本間氏、中村星湖　、島村民藏氏など、有名な人達を初めて見ることは、講演以上に興味があつた。
講習生の中の、有島氏崇拜、倉田氏崇拜等々の女人の誰彼から、小川久代さんと私は友人になつた。(この人は後で新劇協會の女優になつた。)
結婚記念に、小さな詩集を出し度いと思ふと久代さんに話すと、すぐその日にアルスへ行つて呉れたが、金が大分要るので止して、久代さんが持つてゐた「新詩人」といふ雜誌の發行所で本を出版するとあつたので、二人で行つて見ることにした。そこが池袋の井上康文氏のところだつたので、それからちよい〱行くやうになり、ささやかな詩集を出して貰ふやうになつた。井上氏のところでいろいろの詩人小說家を知り、鷹野つぎ氏を紹介されたもその時だつた。鷹野氏の紹介で「婦人運動」へ短篇を一つ初めて。
自分の生活にも自信がつき、勇氣が出たので、野尻抱影　、江原小彌太氏などのところへ、すぐ傍であつた關係もあるが、自己紹介でのこ〱出かけてゆき、江原氏の紹介で少女界へ少女小說を一つ發表した。そうしてゐるうちに私は子供の母となつた。そこで私は又、母として完全に生きることの努力と、自分の藝術を何處までも生かしてゆき度いことの二つの惱やみに、疲れた日を過さねばならなかつた。どちらも負け度くない爭ひの果てに、母としての藝術的生活に生きることの外に何もないと思つた。
長い間の卑屈な小作人生活から姑を解放させることも私の心を無暗に疲れさせたが、一つには、良人の深い理解が、私を自由に思ふところへ行かせて呉れたことにもある。
こうして文筆を取るとは云へ、私には碌なものは書けるわけではないが、然し書くことには大なる興味を持つてゐる。書く爲には讀まねばならぬし、又、書く爲には、自身の生活そのものを強く正しくしてゆかねばならぬし、生活が強く正しく進む時、私は何かしら書かずにはゐられない。この氣持は、私の生涯を通じて、連續してゆくことだらうと思ふ。



空想から下りきて文學

八木秋子

創作の一つや二つ發表しただけで文壇人などゝいはれる譯はないであらう、尤も隨筆評論雜文書きから雜誌新聞記者までを含めての廣義な意味でなら、或は私もそのひとりといはれるのかも知れないけれども……

文筆を生活の資とするやうになつた私の動機は全く偶然といふべきもので、從つて自然發生的であつたといへる。何しろ文筆で生きて行きたいなどゝは夢にも考へたことがなかつたから。たゞ無暗に活字が好きで、センチメンタルな文學少女的存在であつたことが、いつの間にかこんな所へ私を運んでしまつたものと見える。

私は今でも自分が文壇人であらうかなどゝ考へたこともないし、また文壇に認められたいなど正直なところ考へて見たこともない。雜誌を欲しいまゝに買ふことも出來ない境遇にずつと通して來て、書物は大方借りて讀んだ、そして文學を此上もなく尊い有難いものに思ふこゝろは、自分が貧しい天分でしかもほんの僅かしか讀んでゐないのに書かうと思ふ氣持すら、文學を冒瀆するおそろしい了簡だと思つてきた。そして、素直に思ふことを書き小說や詩をつくる若い友達の樂な氣持を羨ましく思つた。

私は苦しい境遇の中に壓しつぶされながらいつも考へてゐた。――生活を奧深く見つめやう、何よりも生きることだ、若し自分に創作の天分があるものとすれば、四十歲を越した頃の人生を廣く眺める視野の出來る年になつて書いたとしても、人類の正しい意志への憧憬と情熱のつきない限り或は出來ないものとも限らない、と。そうした氣持から私は、戀愛やその他のまだ生々しい自分の經驗を虛榮から臆面もなく題材として發表し名を賣らうとする作家の人達に、一種の反感と侮蔑の感情をもちつゞけて來たのだつた。だから、記者として自分の記事が新聞に發表された時だつて、少しの感激も衝動も受けはしなかつた。

然し今の私は文壇といふもの、文學に對する考へも全く變つてしまつた。文壇といふ特殊な存在は日に影を薄めて、滅びつゝある。また當然そんな存在も名稱も滅びて行くべきだと思ふ。思ふところか、それは實際に起りつゝある現象なのである。作家が出版者といふ資本家の大

量生産的企業に苦もなく壓迫されて、これまでの優越的地位から引き下され、一般プロレタリアートの中へ生活的に融合して來ざるを得なくなつた爲めや、作家の生活や作品に表れる意識を鋭く讀者が批判することによつて、現在の民衆の生活とは何の關りもない既成作家の存在を必要としなくなり興味を失ひつゝあること、さうした生活事實の根據によつて生れた新興階級の中からの作家が、社會現實の批判と未來への呼びかけによつてプロレタリア文學を生々と展開したことなども大きな力となつて既成文壇は當然崩壞し行くべき運命にある。尤もながい間の情緒的文學が民衆の觀念に植ゑつけた影響はかなり根深いものだから、急速にどうといふ結果は表れないので一部の作家は今尚ほ一般の民衆の間に多くの憧憬と支持とを得てはゐるが、時期の問題であるといふことは、近頃の文藝批評家が作品の批評の標準を社會的價値に置き更へることになつたといふ、その著しい變化を見たゞけでも頷けることであらう。

理想の社會を熱望するものにとつて、文學は現在どれだけの役割と價値を有つか、この事は根本の問題でなければならない。近頃純粹プロレタリアートの中からかなり優れた作家が出て民衆の爲めの作品を示すやうになつた傾向は當然のことゝ思ふけれども、民衆が一番直接に端的に生活意識へ働きかけられるものは、むしろ創作よりは優しい評論や感想などではあるまいか、若し作家が眞に解放への熱情に燃へる人であつたなら、多くの努力と習練と、獨居的勞作の生活から出て實際運動へ向はずにはゐられないであらう。讀者群は多少とも智識階級人であり、眞に壓迫されつゝある大衆は文字よりは言葉、讀むよりは見、或は聽く方が直接にひゞく。目的意識の文學は現在で見るところでは、大衆の生活感情を眞に理解してゐない作家達のインテリゲンチア的作品の不自然さを別としても、效果的には大したものとも思はれない。ことに、プロレタリア作家達が各々團體をつくり政治行動をとつて働きかけつゝ既成文壇の崩壞を叫んでゐるけれどもそれは要するに將來社會へ自分達の文壇を建てる事を意圖し、將來社會の文藝創作の活動に範疇をつくり特權者として支配することを前提としてゐるものである限り、私は現在のマルクス主義的文藝團體の存在を良しと思ふことは出來ない。理想社會に生れる文藝はあらゆる農民が青天井の畑から、工場の機械の響音の中からその自由な創造的衝動のまゝに生活の喜びを描いたもの、そしてあらゆる人はみな藝術家で勞働しつゝ思ひのまゝに天分を伸すことが出來、發表の歡びを感じるものであるべきだと信じてゐる。

中年になつたら書けるかもしれない——さういふ私の空想は、至上の高さから文學を凡ての人の內在的創造力にまでおし擴げて見たことによつて、此頃では少しづゝ書きたいまゝに書かせてゐる目的としてゞなく——。

幻燈

伊福部敬子

多分、冬で、そして夜であつた。
私は書院に坐つて幻燈をみてゐた。

白い無言の幕
まつ暗な室の中にしづむ靜寂
そして
人々の瞳はその中にじつと凝つてゐる。
やがて
次々と繪幕の上に出て來るすがた

それは釋尊一代記の繪傳であつたが、
無憂樹のかげにねむる夫人の素足、
夢を引く白象
裸形の驗者
蓮の花片の目をもつ女たち
しかしそれ等は聞きなれた話とは
あまりにかけはなれて色あせてゐると思つたが
最後に、高い歡樂の城壁をこえて、
銀鞍の白馬に騎つて若い皇子はのがれ出た、
その廣い額には、
青白い幽鬱がたゝまれてゐた

私は皇子の心がかなしかつた
私はたゞかなしかつた、
深い溜息をした、

私には、あの青白い皇子の幽鬱が
時々、ふいに、私の身近かにけぶり立つやうに思はれる。

無産者意識の下に

田邊一子

その折如才なく詑言を言つてすましてしまふ事の出來なかつた自分は今猶なやんで居る

目に見えないその人の憎みと絶えず鬪つて居る

他人に煮湯を飲ませてしまつたと思ふその事に絶えずせめられて居る

さういふ私であるどうか徹底的にたたき伏せて呉れる事を望んで居る（その人に）

意氣は盛んな積りでも頭腦の鈍い私には何も出來ない

ある種の人々（以下二首）

惡口を言はれるとすぐ横を向いてしまふところ彼の女はブルヂョアである

生活向上のための具にし樣としない短歌のための短歌をまだ作つてる。

社會意識の鮮明でない德田秋聲氏らの作品が、我々にとつて、はや何の刺激ともならない時代がやつて來た。

昨日まで信ずべき作家と思つて居た作家だがはや喰ひ足りなくなつた。

我々が奉じる新興短歌の任務について

三十一文字の形式を完全に打ち破つて、今や自由の身となる事が出來た我々の短歌には、當然今迄以上の使命を負はすべき必要を感じる。否、その必要あつてはじめて、我々の短歌は、斯くなつたものであると言ふべきである。卽ち、形式上に於て今迄の樣に拘束される事のない我々の短歌は、短歌自身その自由なる身を以て、小說にでも、論文にでも、はた又散文にでも何にでも取つて替る事が出來樣、出來なければならない。斯くしてこそ、我々が短歌をして、單なる詠嘆の具より、生活向上の爲めの要具（私は歌を、現在如上の爲めの要具だと心得て居る）に迄引き上げた甲斐はあると言ふものである。



雪國から繪だより（一）

比左夏生

僕は今、北越の殘雪を見に來てゐるのですが殘雪どころが丈餘の積雪、生れてはじめて雪らしい雪を見ました。どうです十七八の乙女がこんなかつこうをして、鐵道の沿道で荒くれ男の人夫に伍して雪掻きをして居るのです。赤い蹴出しと内輪の兩足に娘らしさが匂つてゐました。（越後長岡にて）



雪國から繪だより（一）

比左夏生

雪國の女房です。子供をおんぶした女房は悉く胸のところをこんな具合ひに開けつぱなしにして朔風に晒してゐるのです。ちつとも寒くないものと見えます。そういへば小生もちつとも寒くない、東京上野をメリヤスのシヤツ二枚着て來たのを、こつちへ來て一枚剝ぎました。雪國はなるほど溫かい。（越後湯澤にて）

皆が食へる時代の建設

岡本利吉

一

私の家は貧乏でしたが、家内の家は物持ちでした。家内の家は分家でしたが、その本家が、附近で一番大きな物持ちでした。けれども息子や孫が不身持で最近に沒落しました。そのとき家内の父が本家の財產整理に關係し、大體の方針に付き私の意見を聞きましたから、私は卽座に皆が食へるようにしてやれと答へました。皆が食へるように、之こそ私の過去を通じ一貫して來たモットーなのであります。

家内の本家が沒落したに付いて、不身持な息子や孫も惡かつたが、餘り息子や孫を疑ひ過ぎて、ホンノあてがい扶持しか與へなかつた本家の爺さんが惡るかつたと思ひます。大きな財產を持つてゐながら、息子や孫を押込めて、ホンノ小遣のあてがい扶持を與へてゐれば、その息子や孫はどうなりましようか。彼等はパンと小遣に不足せぬから、働く意思は持たなくなります。働かず遊んでゐると、酒や藝者が目に付きます。陶醉して夢みてゐると、活動寫眞の映畫が消えては現はれるように、種々な光景が頭腦の中へ出入します、働く意思のない坊ちやんの頭へ、大きな財產が映ります。むろん恐い顏をした爺さんも映りますが、同時に優しい老母が爺さんの實印を預つてゐることも、映畫の第二卷へ現はれます。息子や孫は優しい老母の手から恐い爺さんの實印を取出しては大きな借財をして、遊んでゐたのであります。

高利の上に高利が嵩み、數十萬圓の借金が出來たことを最後に發見した恐い爺さんは、殆んど失神しました。家内の父は整理をしなければならなくなりました。法廷へ持ち出し債

務を否認することは出來ません。此場合の方法として、借金は値切れるだけを値切つて、田も山も賣拂ひ一切の借金を返債して、跡へ殘る一切の財産を、息子や孫が皆な食へるように分配しろと云ふのが、私の意見でした。

　家內の父は分別者でした。けれ共私の意見が彼等の豫想と違ごうてゐる爲め、暫く返事をせず、暫くしてから、本家の爺さんも自分も、皆なが食へるようにと考へたことはない。自分でさへも食ひ兼ねるに、皆なが食へるような心配ができる筈がないではないかと、不思議そうに私の目を見詰めました。私はこゝぞと、皆なが食へる方法を說明しました。

二

　私の過去の生涯はかなり長い。それを振り返へると聞いて頂く値打のある種々な事件がある。けれども過去を振り返へつて、自序傳めいたものを書くには私には餘り多くの未來があり過ぎる。私はまだ〳〵過去に陶醉する一分時間をも持たない。私が今現にやつてゐる農村青年共働學校の丁抹に於ける世界的先驅者グルンドウキイ翁は「丁抹の青年よ、汝等の歌は時間と實行である」と戒めた。私は今現に時間と實行の渦卷の中にある。私に過去はあるが、より大きな未來が私の前途に橫はる。日本の青年よ、汝等の歌は時間と實行であると私は農村青年共働學校の第二回生の爲めに、先驅して戒めてゐます。恐らく私に自序傳めいたものを書く呑氣な時間は永久に來ないでしよ。

　私の過去を振り返へり、また私が現に目標としてゐることは、皆なが食へる時代の建設である。消費組合運動は其の爲めであり、山岳共働農園の開設は其の爲めであり、農村青年共働學校に於て、農村振興の純眞な中堅青年を養成しようとするのも其の爲めであります。

　家內の父は、皆なが食へるようにとは、未だ嘗つて考へたことがない、果してそんなことが出來るかと聞きました。私は即座に、なんでもないことでありますと答へた。皆なが食へるようにすれば、その中の一人として、自分も食へる、家族も食へる、本家の息子も孫も、債權者も債務者も、皆なが食へるではないかと說明すると、なるほど其は理屈だと考へ込んで呉れました。けれども、私の提案は、恐い本家の爺さんに採用されず、爺さんが死んでから、あちらからも、こちらからも長い手が出て、さしも大きな財産も四分五裂になつ

てしまいました。

三

貧乏な家に生れた私は、つくづく自分が活きることに付いての不安を感じ、どうすれば絶對安心して生きることが出來るかと自問自答して見ました。皆なが生きる時代の建設、その時にのみ私も安心して生きることが出來る。でなければ、私が金儲けに努力して、數十萬圓の財産を積み上げて見た處で、道樂な息子や孫を永久に安穩にすることは出來ないであらう。私自身と私の子孫が永久に安穩に生きる道は、皆が食へる時代の建設でなければならぬ。私の過去は共に向ひ捧げられました。おかげで私は何等の財産を積み上げぬが、勞働することを知り、ブルジョア育ちの家内へも、私を訪問して來る凡ての人々へも、勞働することを知らしてゐます。働かざれば食うべからずとは、働けば必らず食へる意味でありますまいか。

消費組合、そのことを日本では共同組合とか協同組合とかとも變稱するが、消費組合は實は大きな共働組合運動の目的を達する手段なのであります。共働するとき、何處に生活の不安があるか、共働することにより、絶對の生活安定が得られます。共働する經濟社會こそ、皆が食へる時代なのであります。

けれども資本主義の今日では、勞働力を持ちながら、働くことができない。だから食へない者ができる。生活の不安とは、食えない不安ではなく、働くことのできない不安なのであります。働け、働ける社會を作れ。そのとき始めて皆なが食へるのであります。

四

働くことを知らない本家の恐い爺さんの息子や孫は實際氣の毒であります。彼等の或者は禁治産の宣告を受けてゐた。恐い爺さんは、そうして置けば安心と、實印を大事に婆さんに保管さして置いたら、何時の間にやら數十萬圓の借金が出來てゐた。法廷へ持ち出せば、自分の息子や孫が縛付きになる。恐い爺さんは遂に悶死しました。けれども不幸は之に盡きない、働くことを敎へられずに、酒を飲んで藝者と亂舞することを知り、生産することを努力しないで、借金することに腐心する恐い爺さんの息子や孫や、其等の人々の家族は今

後どうなるでしようか。結局彼等は路頭に迷はねばなりますまい。數十萬圓の財産も、地方第一の富豪であることも、子孫を安穩にはしないのであります。子孫を安穩にするものは働くことしかないのであります。

けれども働けない、資本主義の今日では働く意思を持ち、働く方法を知つてゐる純眞な、多くの勞働者を失業さしてゐる。無產階級が自己を顧みるとき、失業の不安があり、働けない、不安があり、從て生活の不安もあるのである。

人間の勞働力が餘り、開墾すれば畑となる三千萬町の山岳が餘り、水力電氣を起す激流が餘り、魚の住む大海が餘つてゐるのに、何を人口食糧問題等々と云うのか。所詮は働くことの問題なのである。共働するとき、一切の問題は解決される。皆が食へる時代は、新しい共働組合と、共聯合によつて一切の產業が合理的に經營され、物價と生產費との間に存在する剩餘の全部が蓄積されて資本化され、生產剩餘の資本化は必然と生產能率を高め、生產能率の增加は、また剩餘と物資の豐富となり、生產と資本と生活とが、渦卷形に向上する共働の新時代に於て、我等は皆が食へる時代を發見するのであります。

五

農村青年共働學校へ、地方の大きな資產家の長男が一人だけ來てゐます。彼の前途がどうなるかは豫測できないが、もし彼が共働に自覺するならば、彼は立派に勞働し得る。

共働するとき、勞働は決して苦痛でない。一人で馬を曳き人糞を擔い、ウナリ、サクリ、播種し、除草し、刈取り、調製し、販賣し、一切の百姓をすることば、熟練で體力のある者でなければ出來ない。けれども、共働するとき、誰でも百姓が出來る。私もしてゐる、資產家の長男もやつてゐる。共働するとき、勞働は萬人に可能であり、また勞働は苦痛でない。

萬人勞働よ、そのときに皆が食へる時代が出現する。萬人が勞働するとき、必然と地球の全表面が最も有效に利用され我等は人口問題を知らず、食糧問題を知らず、失業問題を知らず、戰爭を知らず、階級鬪爭を知らず、我等は幸福と藝術と人類愛と進化と、平和と自由と平等を持つであらう！　不足するから平等であり得ないが、餘る時に絕對の平等が出現

（七五頁へつゞく）



婦人と市政改善

前田多門

我國の市制が施行されて以來前例の無い不名譽な狀態に於て、我東京市會は解散を命ぜられました。これは自治體の模範たるべき帝都としてまことに恥かしい次第であります。この際市民としてその名譽回復のためにも、我等の市會を淨化し、再びこの汚名を受けぬやうにつとめねばなりません。それには市政とは如何樣なものであり、又どうあらねばならぬかを充分檢討する必要があります。

婦人は從來市政に何等の關係を持ち得なかつたのでありますが、既に婦人公民權も、今議會の重要な議案として審議されて居り、近い將來には參政權も獲得され樣と云ふ機運に際して、もはや婦人と政治は不可分の關係になつて來て居るのであります。故に今日只今婦人に參政權はなくとも、男子を助けて甦生の市會を再びあの汚濁した醜さの中に落さぬやう市政改善の重要な責任は凡ての男子と同じく婦人の上にもかゝつて居るのだと云ふ事をはつきりと覺えていだゝきたいのです。併し市政には國政の樣に、はつきりとした目標がないので、一般の大衆には興味もうすく、從つて市會の選擧には國會の樣に大衆の關心を持ち得ないので

婦人界近事

「家の光」婦人委員會

産業組合中央會の家庭雜誌「家の光」が中心になつて、家庭經濟問題、婦人問題の專門家——吉岡彌生・塚本濱子・竹内茂代・守屋東・大江スミ子・森本靜子・中澤美代子・奥むめお諸氏を網羅した同會が今度生れた。

一ケ月に一度會合をして、各委員が地方講演でえて來たみやげ話を語り合ひ、全國を通じての家庭經濟の改善につとめると。

二十四歳禁酒法獲得の運動

學生排酒同盟、婦人矯風會、青年會同盟、櫻楓會外二十五團體の、二十五歳禁酒期成同盟會は二月九日から一週間を、獲得週間として各團體各代議士、各學校を訪問して贊意を求め、演說會、ビラマキ等行つて大いに宣傳した。

議會の婦人公民權案

開會中の議會は、婦人の公民權案を中心にして大いに活氣づいてゐる。この案の最も熱

あります。

「正しい市會議員、潔い人を出せ！
　浄化市會をつくれ！」

と云ふスローガンは、極めて抽象的で漠然として居り、國政のやうにはつきりとした政綱もなし、又直接政黨と政黨の爭覇戰のやうなめざましさ——大向ふをうならせるやうなところがないのでその點でも大衆の興味は殺がれ易いのであります。かうして興味が少いために結局選擧してみても、あまり變らない狀態をつゞけるやうなことになりはしまいかと案じられるのであります。

東京市を支配する法律制度

東京市は人口二百餘萬を擁する大都會でありながら、人口三、四萬の都市と同じ法律を以て支配されて居て、何等特別の市制を持つて居ないと云ふ不合理な有様なのであります。

現在世界の市制を見ますと左の三つに分類することが出來ます。

イ　英國の市制……市會が中心で、市長は實權を持たずに市會が委員會を組織して立法行政を統べる。

ロ　米國の市制……市長と市會が對立して居て双方市民から選まれて居る。市長は市會に對して拒否權を持ち、又市長が拒否權を行使したときは、市會は更に案を練りなほして提出することが出來る。その場合は五分の四の多數決によつて決される。

ハ　歐洲大陸の市制……自治權が大きくない。國の中央政府が監督權を持つて居て、市長は市會から選まれる。殊にドイツの市制ではその執行機關は、市參事會（市長、助役と市會議員中から選まれた市參事會員より成る）であつて、この合議體が凡て事務執行の任に當ります。

日本の市制はドイツ風を眞似たもので

心な支持者である與黨の少壯代議士は、政府の反對に會つて板ばさみになつてゐるが、結局泣ね入りにならうといふので、婦人團は一層いきまいてつめかけてゐる。

無産婦人政治團體の合同成る

中間派無産黨の七黨が合同してから、それらの内の二つに所屬してゐた、全國婦人同盟と無産婦人聯盟は合同して、日本大衆黨の婦人部を構成した。なほ、同黨の婦人部長は麻生久氏。

國際レンラク婦人委員會成る

二月十九日の委員會にて、いよ〳〵同會は成つた。政治、敎育、勞働、社會事業、社會運動保健衞生の六部門を各委員會に依つて、組織づけるものである。全國的のものにする運動を近く開始する由。

全關西婦人聯合會の實行委員上京

同會では、婦人公民權、結社權、參政權獲得についての請願書八萬人の署名を携へて、代表三氏が上京貴衆兩院に向つて、運動を開始した。

人絹消費稅の撤廢運動

八王子、西陣、福井、桐生、足利その他十

市制施行は明治二十二年で、三十一年からは、東京・大阪・京都の三大都市も他の市同様自治制を認められるやうになりましたが、明治四十四年に改正されて市參事會が執行機關でなくなり、その權限が市長に移つて現在の樣なものとなつたのでありますが、東京市政の上に於て著しく目につくのは、市長の在任期間が短かいことであります。大阪では現在の市長關氏は助役時代を通算して十二、三年も在任され、過去に於ては東京市長も、尾崎氏の八年十ケ月、松田氏の四年八ケ月と云ふやうな例もありますが、最近では阪谷、奥田、田尻、後藤の諸氏は比較的長かつたがそれでも大抵二年何ケ月位でありまして、甚だしきは伊澤氏のやうに三ケ月など云ふのがあります。卽ち明治四十四年以後、法律上市長の權限が強くなつてから市長の壽命が却つて短かくなつたのは頗る注目に値することであります。かうして市長が度々更迭すると云ふ事は市政の運用上まことに遺憾なことでぜひともよい市長が長い期間在任される事を市民として、要望するものであります。

しかるに玆に東京市政が常に不安定を極めて居る譯は、市政に對しては何等の旗印を持たない中央の政黨が、その黨の私利私慾のために市政を攪亂するからであります。政黨のあることは決して惡いことではありません。政治的に同じ意見を持ち、方針を一つにする者は當然一緒になるべきでありますから、それをさへも惡いとは申しませんが、現在の政黨のやうに市政に對して正しい批判や政綱を有するのではなしに、只利權あさりや、地盤爭ひのために、市會の資務市民の利福について考へる事の無い者の進出に對しては、市民は聲を大にし警告せなければなりません。

八國體の織物組合では、織物に使ふ人造絹糸に課せられる消費税を、撤廢するために請願運動を起した。

小學校教員のため簡易療養所

東京府と市の教育會合同にて、小學校教員のために、實費以下の簡易療養所を設けることになつた。これには健康相談所、運動場をも附屬させる豫定であると。

國費で村醫をおけといふ

兵庫縣神崎郡越知谷村は、山間の僻地で醫者がなく、村費で抱へておくわけにもゆかぬので國費の村醫をおくことを請願した。

高等女學校教育改善調査會

文部省の同會は、委員に女流教育家數氏を加へた。改善の主眼とするところは、現在の劃一的形式主義の教育を改めて、女子教育の社會化、實際化、家庭化を大いにはかるといふ。なほ、女子教育制度の根本的改善案にも當然に及ぶであらうとみられてゐる。

師範大學に婦人の入學

初めて開校される師範大學に、婦人の入學志願者が二十五人、その内文科が二十二人で理科が三人である由。かうして婦人の專門學校教授がどん〳〵出來ることになつたわけ。

それでは市民はどうして市會を淨化したらいゝのか？　と云へば、それは先づよい市會議員を選出しなければなりません。よい市會議員とは極めてあいまいな言葉でありますが、何よりも、市政ブローカーを出さない事を、考へねばなりません。

只今の市會議員八十八人のうち、定職のないものは十五六人（廣く見ると二十名以上）もあります。この多くは所謂市政ブローカーで、市政を喰物にして生活して居る人間であります。こゝに於て皮肉な對照とも云ふべきはロンドンの市會でありますが議員百四十四人の中、紳士と呼ばれる無職業の篤志家が、二十六人ありますが、ロンドンの市會はこれ等の紳士議員のためによくなつて居るのに、東京の市會は反對に無職業議員のために惡くなつて居るのであります。

かう云ふ市政ブローカーを排除するのが、先づ第一の任務でありませう。これは市會のみでなく府會、區會、みんなさうです。從來の名譽職型の人には現在のサーヴィス本位の仕事は出來ないのであります。元來今までの市政は、當然もつと市政に接觸しなければならぬ人や團體が離れて居て、極く一部の人のみが市政を氣儘に操つて居たのでかうした不合理が生じて來たのであります、職業團體、勞働組合、商工會議所、醫師會等から、市會議員を互選するのもいゝでせう。又東京市には千三百の町會がありますが、近來はだん〳〵覺醒されて來て居りますから、その中から候補者を立てるのもよいでせう。

要するに市政を一部の人々の手に託して無關心で居た市民にも、事玆に至らしめた責任の一部はあるのですから、市政を市民大衆の手に取り戻すことが、何よりの急務であります。

婦人農民組合長と信用組合重役

日本大衆黨所屬の山梨縣東八代郡會根農民組合は寡婦の渡邊よし氏を組合長にあげた。島根縣大社町は、昨年大社信用組合を組織して組合員の金融に便あらしめてゐるが、今度五人の内女の重役を一人入れた。

女流作家平林たい子氏に渡邊賞

文藝家協會では、昭和三年度の文藝作品中特にすぐれたものを審査の結果、平林たい子氏に渡邊賞を授與した。（男子は大佛次郎氏と十一谷義三郎氏）

東京市會の改選と婦人團體

東京聯合婦人會では「婦人に理解ある正しき人を選べ、市政の改革は女の手から」といふ意味を宣傳してゐる。

婦人市政研究會では、「所屬團體の如何にかゝはらず、眞面目なる候補者を全力をあげて應援する」ことを申合せた。

婦人消費組合協會では、市政に對する婦人の日常當面の要求條項十一ケ條を掲げて、これらの要求實現のためには、無產黨の候補者を支持すると聲明した。

東京市政の懸案

東京市政の大きな提案はいろ〳〵ありますが、時間もありませんから、ごく大體を申上げるに止めます。

一、區域……近郊を東京市に繰り込む事は、今迄殆どなかつたと云つてよい。しかも近郊は日一日と發展し、事實上の東京市は急速に郊外へと伸びてゆくのにもかゝはらず、法律上行政上では市の一部と認められて居ないために、樣々の支障が起るのである。例へば今度の市會選擧についても、平素常に市政に關心を持ち、或は市政に參劃してゐるにもかゝはらず、郊外に居住するために選擧權さへ持ち得ない人が非常に多い。これはたとひ市の區域外に住む人でも、市内に事業の税金を納めて居る人には、十二哩以内に住む者には被選擧權をも與へるべきである。又最近說教强盜ピストル强盜、何々强盜、と郊外に頻出する不安も、郡部の警察の手薄をねらつての所業であり、火災の被害も、戸數に於て市内の三倍、價格五倍に達して居る。人口が倍加するのは、通常六〇年かゝるのであるが、西巣鴨町は最近五年に倍以上になり、荏原町は五年間に四倍に達して居る。しかも郊外であるがために、社會事業費は三百圓位しかないといふ有樣である。

東京の都市計劃區域と云ふのは、東京驛を中心に十哩の圓をゑがいた陸地續きの區域（八十四ケ町村で現在の七倍）を一體とみて計劃を立てることになつて居るが、行政上では執行の單位が一つではないから、せめて隣接町村を編入する必要がある。これは將來の東京全體の統制のために、ぜひとも實現しなければならぬ問題である。他の大都市はすでに實行して居るのに、我東京市のみは立ちおくれて居る。そこにも亦内部のゴタ〳〵が原因して居る事を思はねばならない。私共市民は大東京をどうするか眞劍に考へねばならない時に際して居るのである。

二、財政……若し東京市の財政を現在のまゝ放任するならば數年ならずして破產するであらうとはもう幾度となく叫ばれて來た事である。積極的に良い市を作るためには、市民が負擔額の增加を覺悟しなければならない。都市改良事業によつて利益を最も多く得るのは土地であるのに、その土地に對する課税が東京市では非常にすくない。これもつと增税すべきである。（その點では、地租委讓を云ふことは東京市にとつてはいゝ事であると云へる）今

婦人職業内案

働きませう
勉强しませう
强くなりませう

全國八十八ケ所にある職業紹介所を通しての調査では昭和二年度に——失業者十萬四千人といふのだから實際は、もつと〳〵多いと見なければなりません。

この澤山の就職希望者の大群を押しわけて自分に何か職をえやうとする困難さを、まづ覺悟してかゝる必要があります。

×

扨、職業えらびの標準は、

第一、あなたの素質を考へてから決めなさい

頭の人か
人氣商賣に向くか
手先の器用な人か
からだが丈夫か
子供や病人の世話が出來るか？

第二、家の事情や一身の都合を考へてから

時間と學資に自由で學校に通學できるか
暫く位なら學校へ通ふことも出來る人
すぐに就職して收入の道を探さなければならぬ人

日東京市内に山林があると云つたら誰も信ずるものはあるまいけれど、事實は富豪の邸宅等山林として登記されて居て地價五錢位になつて居るやうな嘘のやうな話さへある。土地受益者負擔と云ふ事は、東京市の財政にとつては當面の重要問題である。通路がよくなつたために益を受けるものは、その通路の工事費を負擔するのは當然なことである。この點でも考へるべき餘地はまだ〳〵多い。東京市の財政立てなほしに際して、増税を必ずしも避けるべきではないがたゞ税をどこから取るかゞ問題である。要は如何なる税を課するかにあるのだ。

三、社會事業その他の施設……社會事業に對しても、選擧民や小賣商人やの氣がねをしない人を選ぶ事が絶對に必要である。所謂御用議員を排拆するのでなければ、市の社會事業は所期の效果を收め得ないのである。下水工事の完成は、通路より先になされなければならぬと、この必要をすでに明治二十年代に叫んだ人があつたのに、今にしてやうやくこの點に注目しかけて來たと云ふのはおくれたるも亦甚だしいといふべきである。現在市の下水工事は

イ、淺草——下谷だけは完成し、三河島に處分工場を設けてある。

ロ、神田——京橋——日本橋——麹町(一部)——芝(一部)は芝浦に處分工場があるが、將來は六郷川の河口で放流するやうに計劃されて居る。

ハ、本所——深川は地震後一部ではあるが出來て居る。

ニ、山手方面はまだ着手されて居ないけれどやがてはこの方面も完成される様準備を進めて居る。

×

なほこの外にも私共の日常生活と切りはなすことの出來ない、電灯、水道、電車、等の問題を始め、大小枚擧にいとまない程でありますが今日はもう時間がありませんので、此様の一層の御研究と御關心を願つて又の機會にゆづることゝ致します。

(婦人消費組合協會に於て講演筆記文責在記者)

働き乍ら苦學する覺悟のある人

第三、職業に對する態度によりても異つて來ます

結婚するまでの腰かけ職業か
結婚してからも出來る職業か
獨立していつまでも携はる職業か
都會に住むのか
地方に住むのか

一、修學に相當な費用と時間がかゝるけれど割りのいゝ職業

教育——專問學校、中等學校の教師
醫務——女醫、齒科醫、藥劑師
藝術——音樂家、美術家、著述家
社會——社會事業家、官吏、(工場監督、女工監督、兒童保護司、その他)

二、短期の職業教育で出來るもの

教育——小學校教員、姆姆
醫務——學校看護婦、一般看護婦産婆
　　　齒科技工師
技——婦人圖案家、交換手、計圖師、製糸工場の教婦、タイピスト、會計簿記係、速記者、秘書
社會——社會事業家、圖書館員、兒童保育員
衣食住——料理婦、榮養手、洋服裁縫師、ミシン教師、美容結髪師、手藝教授

三、資格なくとも就職できるもの

事務員、店員、給仕、ホテルの婦人、女工、女中、派出婦、女給、等々、街頭のビラ撒き



ジョセフ・エム・スケンク提供
ユナイテッド・アーチスツ映畫
ノーマ・タルマッヂ作品

誌上映畫

噂の女

（全九巻）

監督 ヘンリー・キング氏――サム・テーラー氏
原作 デニソン・クリフ氏
脚色 C・ガードナー・サリヴァン氏
撮影 オリヴァー・マーシユ氏

――配役――

メリー・アン・ワグネル……ノーマ・タルマッヂ孃
ポール・フォン・ハルトマン……ギルバート・ローランド氏
ニカ・ツルゲノフ……アーノルド・ケント氏
牧師……マイケル・ヴアヴイチ氏
自殺する男……ボリス・ド・フアス氏
クルエゲル……ガスタヴ・フオン・サイフアチツ氏
ブレーム伯夫人……グラヂス・ブロクウエル孃

梗概

メリー・アン・ワグネルは墺國レムベルグの夜の巷に、誹られ勝ちな肩身を狭くくらす、卑しい遊び女であつた。

一夜、思ひもかけぬゆきずりに出遇つた男が、自分の部屋で突然自殺したために、メリーは其の男を殺した嫌疑を受け、危く警官に引き渡されやうとした。そこへ通りかゝつた二人の男がある。一人はポールと云ふ墺國人、他はニカと云つてロシア人で、不思議や白

殺した男の甥である。メリーはポールに救ばれて、其の夜は男の家に泊つた。そして翌くる朝、彼女は男のすゝめるまゝに、濁つた世界から足を洗つて、新生活への一歩を踏み出す事になつた。

光陰矢の如し、三ケ月の月日は夢のやうに過ぎた。もうその頃には女の心にはポールの面影が秘められるやうになつてゐた。ポールも亦、メリーを憎からず思つてゐたが、同じ思ひはニカの心にも宿つてゐた。

突然、歐洲の戰爭が起つた。ポールは急遽メリーと婚約し、涙に濡れる彼女をあとに、雄々しく征途に就く事になつた。二人の婚約を知つたニカは、メリーを失つた創痍を深く心に刻みながら、怨みをのんで歸國する。

戰爭は慘ましくも墺軍に敗報をつゞけ齎らした。勝ちに乘じたロシアの兵は、ニカを將としてレムベルグの町を占領する。ニカは此處で、逃げおくれたメリーと牧師ロッシュとを發見した。メリーに巡り會つた彼の喜び！　今や逸すべからざる千載の一遇と、彼はメリーを我が意に從はせやうとする。

メリーは、拒んだ、戀しい婚約のポールのために、しかし、牧師ロッシユは、自分が墺國の密偵で、メリーの犧牲によつて自分、ひいては墺國の救はれ得べき事を語り、大義親を滅するの理を說く。メリーの心は一決した。

メリーは終にニカに靡いた。ロッシユは身を完うして險を脱し、味方の軍に合して敵の秘密を報告する。墺軍は直ちに勢力を挽回して一擧に露軍を擊退した。

ポールは、傷づき仆れたニカに巡り合つた。昨日の友は今日の敵二人の再會は久濶を敍して相喜ぶ再會ではなかつた。ニカはメリーを自由にし得た事を誇つて會心の笑を浮かべ、ポールは愛人の不貞を知つて悲憤の涙にくるゝ皮肉な對面であつた。

戰勝祝賀の日、墺國の軍隊は、心からなる感謝をメリーに捧げた兵士の中には、すべてを悟つたポールの姿も望まれた。メリーは破れた心に過ぎし月日の影を追ひつゝ、彼等の感謝を受けたのである





東海道を名古屋まで

村山文子

汽車は走る。刻々に西へ／＼と……

横濱をすぎた頃から、そろ／＼奥さんのゐねむりが始つた。コツクリ／＼と氣持よさゝうにあゝ呑氣でいゝなあと思つて居るうちに、膝の上の御本がすべりかける。あぶなくて見て居られないのでとりあげてしまつてもまだ知らぬが佛。然し、じつと、人のゐねむりを見て居たつてつまらないから、私は私で別行動を取つて窓外の景色を觀賞する事にした。

やはらかな早春の陽を浴びながら、畑で働いて居る人達が、箱庭の人形の樣に點々として二人又三人……。のどかな／＼ひるさがりである

これでも生れながらにして支那大陸を縱斷し、またはる／＼玄海灘を越えて花のお江戸まで大旅行をしてゐる私なのだが、遺憾ながら、當時はまだほんの赤ん坊だつたので、如何に聰明なとは云へ、記憶のどこにも一片の影も殘つて居ない悲しさには、今度が先づ／＼初めての東海道々中と云つてよいのである。だから奥さんから萬事に赤ゲツト扱ひをされて、何とからかはれやうが、だまつてガマンして居なければならないつらさを、皆樣どうか察してやつて下さい。

そのうちに汽車は容赦なく進んで、いよいよ第一の目的地裾野驛にと着いた。驛を出るともうそこには山の學校の×さんが迎へに來て下さつてゐた。途中まで東京の圓太郎のやうによく震動する自動車で、それからさきは徒歩で山へ登る。

道々家路にかへる村人と夕の挨拶など交しながらゆくうちに、「オーイ」と呼ぶ聲がする。うすぐらくなつて來た行手をすかして見ると、學校の方々が二三人迎へに來て下さつたのだ。やがて殆ど暗くなつた山の中腹に、ポツカリと灯が見え出した。嬉しい、もう着いたのだ。

岡本先生御夫妻をはじめ、皆樣に迎へられて一休みするまもなく、熱心な生徒さん方の訪問を受けた。凡そ三十人餘り、部屋一杯の若い人達の氣焔はいやが上にも上つてゆく。一つ／＼の質問に丁寧に答へられる奥さんの親切な態度と、何もかもさらけ出して話し合ふ若い人の純眞な氣持とが、しつくりと溶け合つてたまらなく嬉しい時をすごしたのであつた。北から南から日本全土から集つて來た人々の事とて、農村問題にしろ、對女性觀にしろ各々の地方によつて風習も異り、從つて物の觀方考へ方にも大きな相違がある。併しこの若い人達はみんなが惱んで居るのだ。又その惱みをつきつめて／＼はつきりとしたものをつかみ得ないうちは、決していゝかげんなところで、妥協しやうとはしないのだ。その眼を見るがいゝ。爛々たるその瞳は眞理を求めて燃えて居るではないか！

八時半、生徒さん達の歸られたあとはもう疲れてしまつて早々に床についたが、私の眼はいよ／＼冴えてどうしても寢つかれない。しんしんと更けてゆく山の夜、窓硝子を通して美しい星を仰ぎながら、やすらかな奥さんの寢息を聞いて樣々の思ひにふける。

うと／＼したらもう空はしらみ初めて居た。農園では朝まだき三時から働きが始つて居る。顏を洗つて、御飯前の寸暇を裏山に登つて富士

を見にゆく。

農園でできた、お芋をかぢりながら登るにつれて靴の底がつる／＼すべる。奥さんはもう息を切らして苦しがつて居られる。「もう富士山なんかみなくつたつていゝ」と云ふ奥さんをなだめながら又登りはじめる。オーバまで脱いでしまつて、やつとの思ひで登りつめると、オヽ美しいこと！ 半ば雪に被れた靈峰は今こそ目の前に聳えて居るではないか。

廣い／＼裾野を見渡し、遙かに遠く伊豆の山々を望み、附近の群峰をひきいて立つその威容堂々としてあたりを拂ふばかり。放心したやうに、たゞじつと／＼見入るのみであつた。

×

九時半から十二時まで、婦人問題に就いての奥さんのお講義があつて、そのあと質問に時をすごし、生徒さんの歌に送られて午後一時山をおりる。

汽車に乗ると又奥さんのおねむりが始まる、たう／＼靜岡まで眠りつゞけ。

江尻のあたりから海の美しいこと。右に蜜柑實る丘を、左に松原のかげに見えがくれる海をながめながらゆくと、たゞもう景色に見とれてうつとりとしてしまふ。蜜柑の實る樣をはじめて見たと云つて笑はれたりしながらゆく程に、濱松も過ぎて今夜の泊りは豊橋。

鈴木千代さんの故郷だと云ふので、かねがね耳にたこが出來る程「豊橋良いとこ」を聞かされて居た所である。

出迎へて下さつた讀者の方々と一緒に、直ちに岡ビルの讀者會に出席する。二十餘人の熱心な姉妹にかこまれて、四方山のお話に時を忘れ記念撮影をして十時すぎ、惜しくもお別れをした。始めてお目にかゝつた豊橋のなつかしい姉妹と、もつと／＼お話したかつた。遊びたかつた。どうかこの次にはもう少し餘裕があるやうにと、切に／＼望んで居る。

その晩は豊橋切つての流行つ兒の、美容術師誌友仲原なか子氏のお宅にお世話になる。四人床をならべて、さてなか／＼寢つかれない。ガサ／＼ゴソ／＼ねがへりなどしてゐるうちに、時々思ひ出したやうに、誰かしら話し出しては又みんな笑つてしまふ。でもさすがに奥さんはぐう／＼白河夜船。そのうちに鈴木さんも何時か眠つたとみえて、折々ムニヤ／＼ねごとを云ふので、その度に仲原さんと私はクス／＼。

翌朝は參陽新聞社へ大場氏と、白井氏を訪問し、一緒におひるをいたゞいて、いよ／＼最後の地である名古屋へ向けて出發する。こゝで又例の奥式の眞粹を發揮して、乗遅れ、あはれもう電車は出てしまつたあとのまつり。呆然として待つこと二十分餘りのさむいこと／＼。

名古屋につくと、二時間待ちましたよと云つて十字軍購買組合の芦崎氏が、待ちあぐんで居られるので、早速會場に急行する。

今晩の會は「新女性社」主催にかゝる、婦人公民權問題についての演説會で、出演者は凡て婦人ばかり、東京から來られた婦選運動の勇者市川房枝、金子茂、竹内茂代の三氏と、當名古屋の八木恭子夫人、村井光枝氏、それに奥氏も加はつての陣容だけに、何れも切々として聽衆の心を打つものがあつた。

演説者諸氏の心の底から迸り出る叫びに、會衆は全く呑まれた樣に謹聽して居た。中にはやつゝけられて、頭をかいて居られる男子の方々も見受けられたし、婦人達は「今晩は私たちの天下だ」と云ふやうに意氣揚々として居られたのも痛快だつた。

即夜歸京される市川、金子、竹内の三氏をお送りして小尾氏のお宅に上つたのは、十二時をすぎて居た。又一しきり婦人問題に花が咲いて二時就寢。翌朝小尾氏御一家の御好意を感謝しながら、名古屋に惜しきお別れを告げて、再び車上の人となり、あとは一路東都をさして歸路についた。

長詩　松井須磨子（第三回）

高群逸枝

三十五

デエルス島の
チヤゴラスは
二人の子供が
オリムピヤの
榮冠を得た時
氣が
昂つて
絆切れた

人々は
叫んだ
死ねよ
チヤゴラス！
おん身のために
この上の望みは
決してないぞ

三十六

そのごとくにも
甘かるべき
榮譽も
彼女には
たゞ
苦がく
思はれた

明治四十四年の
五月二十日から
二十六日にかけての
文藝協會最初の出演
坪内博士自慢の
「ハムレット」劇

芳烈な匂ひ
絢爛な
色どりに
榮え奢る
歡樂の
あまい
脚光の中

「戀し
なつかし
ローピンさまよ
歸らしやんせぬかいな

歸らしやんせぬかいな
何の歸らしやろ
お死にやつたれば」

水に
流るゝ
オフエリヤの歌

あゝ
水に流るゝ
その歌

歌ひつゝ
彼女は
咽び
泣いた

三十七

その夜の
こと

建物の中は
限なく
明るく

歡喜の起つた時
蕩けるやうな
藝術の香が
人々を醉はせた

だのに
彼女は

をぐらい
部屋に
獨り座り

ひそかな
心を
抱いてゐた

そして
その心は

悲しげに
幼ない日の
幻を
描いてゐた

三十八

ああ
子守娘であつた
幼い日の
悲しい姿

涙をこらへて
ゐた頃の
かの姿

思ひ描いては
泪にぬれ
いとさびしげな
即興の詩を
彼女は

口吟む

「にぎやかな群が
街へ行く
お前も
行かう

日の沈む
道を通つて
車に
のつて

でも
それより
歸らう
火を焚きに

火は燃える
子供は泣く
おお泣くな泣くな
いゝ子だから」

三十九

歡樂
極まつて
悲哀が生じ

榮譽が
燃え立つ時
かへつて
その空しさを知る

頃しも
春光
盡きんと欲し

風もまた
老ひて
人を
愁へしめる

四十

このとき
ひそかに

そして
氣づかはしげに

彼女に
忍び寄つた人

靜かに
「何を泣く」
と訊ねる

「あら」
彼女は
驚ろいて
立ち上る

「お座り」
と優しい聲がいふ
「ふたりで
少し
話して見たいから」

四十一

もろ手の指を
編み合せて

その中に
疲れし
膝を抱き

たとへば
樹の根が
梢の枝の囁きから
離れてゐるやうに

彼は
さびしく

月光の中に
座り

そして
じつと
彼女を
見てゐた

四十二

もとめられるまゝに
彼は
文學の話をした

高山樗牛が
書いた
サツフオの話

かの
ギリシヤの
ミテイレネ女の話を

おお
彼女は
すべてを
忘れた

そして
聞き惚れた

四十三

混沌たる
ギリシヤの國を
支配する
チタンの神族

かれらこそ
ヂヤイアント
人類以上の巨大な體軀と
臂力をもち
怪力を振ひながら
四方を征服する

この振舞に對して
オリムポス山上に起つた
ツオイスに屬する
神々達

兩者の闘ひは
急だつた

こゝに詩女サツフオは
オリムポスの神を崇めたが
その心は
チタンの領するところとなつ
た

こゝに起る
サツフオの惱み
思へば悲しい
リユウカサスの巖

おお
愛慾の
焔もて
魂を燒く
川の妖婦

火の薔薇の
匂もて
森を編むてふ
山の媚女

四十四

「先生！
もう泣きません

菫織る
女詩人の話は
わたくしを
高めました

わたくしは
進みます
わたくしの道を
全身が
メロデーと
光である時

わたくしの
生活は
全なのです」

四　五

「先生！
では
歸つて
勉强いたします」

立ち上る
彼女を
彼は
じつと見てゐた

さも

いとしさに
たへぬかのごとく
彼の
靜かな心は
青白く
燃え立つてゐた
だが
彼女は
あどけなく
お辭儀をして
出て
行つてしまつた

（つゞく）

作者附記

いつも申しわけばかりしてゐるやうで氣がひけますが、こんどは轉居やら何やらで、とりとめのない日を送つてしまひました。どうぞ讀者よ。おゆるし下さい。お手紙を下さるならば「東京市外上荻窪二六九」です。一々御通知いたすべきですが、此れもあしからずおゆるし下さい。



童話

王子さまの謎

田島富美子

春！　すみれ色の空の遠くに、山がかすんで見え、野原には赤い花が咲いて、ペルシヤの國の山にも、街にも、宮城にも、春は來ました。

或る日のこと、この國の王子さまは、従者と二人でお庭の中を歩いてゐました。

「セルー　この國にはこれしか花がないのかい？」王子さまは毎日〱見慣れてゐるお庭にはあきてしまひました。

「いゝえ!!　王子さま　このペルシヤにはまだ〲澤山のお花があります」

「何故こゝには咲いてないの？」

「それは雑草と申しまして、この様なきれいなところには咲きません」

王子さまは怪現そうにセルーの顔を見上げました。

「どこにあるの？」

「それは街の中にあります」

「街つて何があるの？」

「いろ〱のものがあります」

「何故僕はそこへ行つてはいけないの?」
「王子さまはその様な所へ行つてはいけません」
「では街にゐるものはみんな僕の敵なのかい?」
セルーはおどろいて王子さまに申しました。
「いゝえ!! 王子さま そんなものではございません、街にゐる者はみんなあなた様の、家來です」
「僕の家來?」
「そうです」
王子さまはよろこんで手をたゝきました。
「僕はまだそんな澤山の家來に逢つた事がない、セルー、では今すぐにそこへ行つて、家來に逢つて來よう、そして僕はもつともつと澤山街のお花を見てくるんだ」
王子はすぐかけ出そうといたしました、セルーはおどろいて、王子さまの腕をとらへました。
「王子さま、でもそれは、いろ〳〵の人がゆるしてくれなければ、行かれません。只今きいて參りますからおまちなさいませ」
「でも僕は家來のところへ行くんだもの」
「いゝえ!! それでもいけません、街にはどんな人がゐるか分りませんから」
セルーは王子を置いたまゝ足早に一番偉い大臣のところへ參りました。
「では仕方がないから一時間ばかり歩いてくるがいゝ」
いろ〳〵話した上、かう云ふおゆるしが出ましたので、セルーをまぜて五人の從者がついて王子さまはやつと街へ行く事が出來ました。從者達も、この街の中は、馬車で時々通るけれど、歩いて通るのは、本當に稀なのですつかりよろこんでしまひました。
「セルー君、ありがたい事になつたネ、實にありがたい」
「いや僕だつて、實際いく月ぶりだか知れないのだからネ」
「僕は知人をたづねたいのだがいけないかな」
「いや僕もそうだ、では交り交りに行く事にしよう、王子さまは、この街はづれに置いて、一人がついてゐればいゝだらう」
「結構〳〵そうしよう」
從者たちは王子の後ろでこんな相談をしました。街の人々は王子さまが想ひがけなくお通りになつたもので、みんなびつくりして、土下座いたしました。子供達は珍らしげにнなが

めてゐて、誰一人王子さまに近よつて來ません、王子さまは、誰も口をきいてくれないので、つまらなくてたまりませんでしたが、街のかざりがめづらしく思はれました。

　街はづれのとある家のまへに來ました。一人の男の子が指をくわへながら立つてゐましたが、王子樣の姿を見て、土下座しなければ、おじぎもいたしません。

　王子さまはおどろいて、その子をみつめました。いつまで經つても、その子は王子さまにおじぎをいたしません、王子は何故だか、その子が非常に偉く想はれました。

「君は偉いネ」王子さまは、思はずその子に聲をかけました。

「僕は少しも偉くないよ」

　男の子は頭をふりながら答へました。

「いや偉い、だつて多くの人達は、僕を見ると、遠くの方から座つて、おじぎするのに、君は、僕に何も挨拶をしないもの」

「僕はだつて、君を知らないからさ」

「僕は王子だよ」

　王子さまは一寸ほこらしげに云ひました。

「王子なんか偉くないよ」と男の子が云つたので王子さまはびつくりしてしまひました。

「そうかい？」

「アヽ！　王子なんか偉くないつて、家のお父さんが云つたよ、自分で働いて、自分で食ふものが、一番偉いつて云つたよ」

　王子さまは、その子の云ふ事が非常にすぐれてゐると想ひました、そしてその子が好きになりました。

「君はいろんな事を知つてゐるかい？」

　男の子は頭をふりました。

「いや僕は一度もためした事がないから、どれ位知つてゐるか知らないよ」

「では僕の前でためしてくれないか」

　男の子はしばらく澁い顔をしてゐましたが、

「やつてみようか？」と答へました。

　そして二人は野原の方へ歩いてゆきました。

　セルーはこんな子供と一緒にしてはいけないと想ひましたが、云つても王子さまはきかないと思ひ返へして默つて見てゐました。

「僕はずゐぶん澤山家來をもつてゐるよ」

王子は男の子に云ひました。

「君も家來をもつてゐる？」

「僕は家來なんかもつてゐないけれど、お友達を澤山もつてゐるよ」

今度は男の子が云ひました。

「君のお父さんは何の商賣？」

「僕のお父さんは王樣だよ」

男の子は王樣と云ふのは何の商賣だかまだお父さんにきいことがないので、早速王子にきゝました。

「何をしてゐるの？」

「何もしてゐないよ」

「お母さんは何をしてゐるの？」

「お母さんだつて何もしてゐないよ」

「よく御飯がたべられるネ、誰がお金を持つてくるの？」

「知らない」

王子はクルリと後をむいて、セルーにきゝました。

「セルー僕達のお金や御飯は、誰がもつて來るの」

セルーはあわてゝ王子に云ひました。

「王子さま　そんな事きいて何になさいます」

「だつて僕知りたいんだもの」

王子さまはセルーの前に立ちどまりました。

「それはあなた樣の家來が持つてまゐります」王子はうなづいてその事を男の子に知らせました。

二人はしばらく默つてあるきました。

「君のお父さんは何をしてゐるの」

王子さまは男の子の顏をのぞきながら申しました。

「僕のお父さんは勞働者だよ」

王子さまは、勞働者だなんてはじめてきいたので、それは何をするのか分りませんでした。

「勞働者つて何をするの？」

「重いものを持つたり、運んだり、機械をこしらへたりするんだよ」

「お母さんは何をしてゐるの？」

「麻糸をつむいでゐるよ」

王子さまは何故この子のお父さんや、お母さんはそんな事するのか、分りませんでした。

「そんな事して何するの？」

王子さまのこの間に男の子は變な顏をしました。

「それでお金をもらつて、御飯を食べたり、着物を買つたりするんだよ」

王子さまは、不思議そうに頭をかしげました――僕のお父さんや、お母さんは何もしないのに、家來がお金をもつてくる、その家來達は、一帶どこからそのお金をもつてくるのだらう、家來達は別に重いものを持つたり、かついだりしないし、麻糸もつながない――王子さまは

「どこからそのお金をもつてくるのだらう」つて男の子にきゝましたが、男の子は默つてゐました、乾度分らなかつたのでせう、一たいそのお金は誰が持つてくるのでせう、

皆さんはお分りになりますか？

分つたらこの王子さまに敎へて上げてください。この王子さまの謎を解いて上げて下さい。そしてもう一度王子さまに敎へて上げませう「自分で働いて、自分で食べる人が一番偉いんだよ」つて。

四・一・四

前號、葵イツ子さんの創作の標題にカツコをつけなかつたのであれをお書きになつた葵さんのお氣もちが出ませんでした。「健脚家は氣狂ひと認める方針」です。謹んで筆者と讀者にお詫びをします。

――（五五頁よりつゞく）――

する。故にロチデール二十八名の先驅者等は自ら平等開拓者組合と自稱する。

けれども家内の父は容易に皆なが食へる理論を理解しなかつた。彼も死に、本家の恐い爺さんも悶死した。私には語るべき過去はなく、希望と努力の未來がある。日本の青年よ、汝等の歌は時間と實行である。汝等は共働するとき、眞に汝等の時間と實行を最も有效にし得るであらう。未來に於ける私の任務は、皆が食へる共働の理論と實際を、全人類へ、共中には日本人は勿論のこと、支那人も印度人も露西亞人でさへあり、無産階級は無論のこと、智識階級も富豪でさへもあるのである。

學者も共働せよ、宗教家も逃げるな、政治家も自覺せよ。凡ての人類は共働に自覺し、また共働せねばならぬ。

鞭打たるゝ者

エドワアド・スカウラア
杉本敦夫譯

ヒユー・バアトンは殆んど演説を終つてゐた。ストライキに入つてから、もう百日ばかりにもなるが、まだ解決の曙光さへも見えなかつた。毎日々々同じ様な日が續いた。ダラ／＼と日が經つて行つた。見張り、集會、警官との衝突。それからまた、警官との衝突、集會、見張り、そしてしよつちう、飢と、氣力のない、慘たる低聲が續いた。かり立てられた感情と、猛烈な演説。だが一たいすべては何の役に立つたゞらうか？

彼は臺から下りた。するとひどい倦怠が、波の様に彼に襲ひかゝつた。彼の周圍に堅く集つた、忠實な、意氣沮喪した人々の中から、活氣のない喝采が聞えて來た。併し彼は、その群衆の、次第にうすれて行く亢奮を感じたのだ。彼を取まいてゐる、陰鬱な工場、更に更に陰鬱な、バラツクの様な小屋、それらのものが、彼の麗はしい感情を嘲笑した。小止みない細雨が、陰氣に、泥まみれな小石の上を打つてゐた。風もなく、空氣は少しの新鮮さもなかつた。煤だらけの環境が、たゞ、面白くもない雨を降らしてゐるに過ぎなかつた。不潔な集會所の、開いた戸口から、病的な黄色い光が流れてゐた。道の向ふ側の、巨大な、典型的な宿舎が、十月の夕暗の中に、腐爛し、惡臭を放つてゐた。落膽し、氣拔けのした一群の人々が、その戸口にもたれかゝつて、熱も、また興味もなく、露國皇儲のことについて論じてゐた。思ひ出した様に、話し手は、彼の聽衆に、無頓着な、嘲侮のまなざしを注ぐのだつた。或者は、黑パン

をロ一ぱいに、だらしなく嚙んでは、ぬかつた歩道の上に唾を吐いた。

だが一たいすべては何の役に立つたゞらうか？　何故彼はそれを續けて來たのだらうか？

彼等は、まるで降りづゞく雨に泣き寢入り、彼等の生活のいつまでもたえない悲慘に泣寢りする如くに、この事をも餘儀ないことゝしたのだ。彼等は彼等の信頼し得る人物、彼等を利用して自分の地位を造らうとするのでない人物を見出したら、きつと驚きを示したに違ひない。併し、破滅混迷失敗、等々こそ、世の常のことであり、彼等の人生の一部であり、また人生そのものであつたのだ。

バートンは、彼が上手に話し終つたことを知つた。しかし、斯くの如き民衆に向つて、うまく話すなどといふことが、何の價値があるか？　彼が、彼等は壓迫され、踏みくだかれてゐるのだと告げた時に、彼等はそれを容認した。彼等は自己憐憫の情を持つことも出來ない程、虐げられてゐたのだ。彼が、彼等のストライキを後援した組合同盟の失敗について語つた時にも彼等は何の怒りも表はさなかつた。同盟は前にも失敗した、そして又今失敗しやうとしてゐるのだ。同盟は華々しい勝利の得られる時、役員の名譽の倶ふ時、又は彼等の首領に餘計投票を得やうとする時のみ戰つたのだ。彼等は恐つてゐなかつた。最初の二三週間にあつた怒は今はもうなかつた。

彼は今夜、張り番が、彼の番に廻つてゐればよいと思つた。そうすれば、彼は家に歸らなくてすむのだつた。指導者。けれども、今彼は何であつたか？　謀反人でもなく、自由のための鬪士でもなく、戰の先鋒に立つ理想家でもなかつた。單なる失敗者、彼の家族を養ふことさへ出來ないボロを着てゐる、失業者に過ぎなかつたのだ。

バートンは、ジヤケツの襟を立て、帽子を眼深に引下げて、こつそりと、衆人の中からたゞ一人忍び出たのであつた。彼は手を、もとはそこにポケツトがついてゐた、ツボンの穴につつこんだ。彼のぬれたつめたい手は、あつたかい足をつきさした。雨が降つてゐるにもかゝはらず、彼は汗をかいてゐた。この頃、彼は直きに汗をかくのだつた。彼はしよつちうふるへてゐた。彼の氣力は、まるで誰かゞ彼の脊骨に呑口をあけたやうに、急になくなつて了つた。

彼はひどくつかれてゐた。彼は疲勞のために痛む脊中をどこかにもたせて、思ひきり休みたかつた。

彼の喉はヒリ／＼としてゐた。彼は煙草を喫つて、彼の肺臟を、慰め和げるあたゝかみでみたしたかつた。併し彼は、自分が煙草を持つてゐないといふことを、悲しむことさへ出來ない程つかれきつてゐた。何もかも、ひどくいま／＼しかつた。涙は彼の兩眼に浮んで來た、そして、やわらかく降つてゐるよごれた雨水が、彼の兩頬で、その涙を洗ひおとした。彼は入口のところで、しばらくの間、彼の屋根部屋に通じてゐる三つの階段を昇る苦痛を考へて、立ち止つて、やがて彼は昇つた。踏段の縁のところはこわれて、多くの足あとがついてゐた。片側の白壁には、たちの悪い使丁がひどくみにくい言葉を書き散してあつた。そして、他の方には、卑しい猥褻な下手くそな繪がのさばつてゐた。何といふことだらう。みがかれたことのない傷だらけのよぢれた眞鍮の把手。各々の上り口についてゐる、共用便所の、あけはなされたドアー　それらの一つの前には誰かゞ不潔にも鼻を撒いてあつた。いたるところ、猫の臭氣と、空氣の通らぬ人の住家の臭ひとが、みちてゐた。

彼は、理性に反して妻がねてゐるといゝなどと、のぞみながら、彼の家に這入つて行つた。始終彼は、はつきりと彼が見出すものを知つてゐた。いつも同じだ。いつものろうべき同じさだ。彼の女は一番小さな赤ん坊を寢かしつけながら、暖ろのそばに座つてゐた。八年前には彼の女は美しく、きちんとしてゐる工女であつた。元氣のいゝちきに愉快になる性質だつた。今でも何か魅力的なものが彼女にはあつた。でも彼女の鬢は貧乏のどん底でのやつぎばやの出産の爲にみにくゝなつてゐた。

彼の女は入つて來た彼を見上げなかつた。彼も話しかけなかつた。何を話すことがあろう。そこで彼等は座つてゐた。かの女は機械的に赤ん坊をなでゝゐた。彼はぼんやりと前方をみつめてゐた。彼は彼のジヤケツを釘にかけた。水がポタ／＼とそこにあるブリキの洗面器にたれた。彼の女には仕事がたくさんあるんだと彼は彼の食器をかたづけもしないで憂鬱に老へ込んだ。結局彼の女は勇敢だつたのだ。彼の女の頭のないことが、時に彼をいら／＼させたにしても。彼が彼の女の後を通りすぎた時に、彼の女のあらはな胸がまつ白なのを見た。そしてその瞬間彼の心は彼が

彼の女の家のそばを、彼の女の額、彼の女のくび、彼女の腕何でも暖かくやわらかい彼の女のすべてに接吻せずには通れなかつた時分の事を考へて情熱にもえてとび退つた。しかし、すぐにその衝動は去つた。彼の女は知らなかつた。今は彼の女は變つてゐた。愛はみじめな部屋の中では成長しないものだ。

「チエニー具合はいゝかね？」と、しまひにかれはたづねた。感動が彼の聲をかたくした。感情を示すことは今の境遇では彼の女をきづつけると彼は感じた。彼の女の目は彼の調子によつてかたくされた。彼の女は彼が親切だと思つた。彼の女の諒解はけわしいものだつた。彼の女の感じやすい年頃は、ルドルフヴアレンチノや、メアリーピツクフオードによつてかためられてゐた。

「いゝえ」と、彼の女はかんたんに云つた。「アツグレゴールの奥さんがふきでがあんまり早くひいちやつたと云つてゐます。」彼は彼女がお醫者様に行つたか如何かたづねなかつた。醫者はお金が先にもらえなければ長家には來ないのだ。さもなければ、醫者もぢきに長家にすまなければならなくなるだらう。彼等の間のちんもくがだん／＼たえがたくなつて行つた。それがうち越えることの出來ない柵をこしらへたと彼は感じた。それがいつも初めなんだ、無言の喧嘩、もつれた空氣、それはきめることも出來なければ、打ち合ふことも出來なつた。それから幾日も幾週間も終ひに陰萎のくるほしさが彼をとらへはげしい熱望が彼の女の口びるを開かせ彼に話しかけさせるまでは、彼の女は彼に一言も話しかけず家の中を往き來してゐた。もし彼の女が彼を苦しめなかつたら、それだけでもよかつたのだ。そうすれば彼は、答へたろう。そして多分彼の女に彼の見解を知らせる事が出來たのだ。

しかし、彼の女の沈默はすべてを不可能にしたのだ。彼の女のあごの直線はなめらかな鋼鐵の柵の様に越えられなかつた。彼は彼の女を腕にだいて彼の女に接吻し、そして泣きたかつた。しかしそれは弱い事であつた。そしてまた彼の感傷的に見えると云ふことのおそれと、見榮とが彼を退らせた。なぜ彼の女には彼がだまつて座つてゐたり、彼の女にさわらない様に出來るだけ彼の女の近くを歩くのかわからなかつたのだろう？　しかし、彼の女は結婚の自然

の結果として冷たく情がなくなつてゐた。

間もなく彼は、彼の女に對する愛、彼の女に對する嫌惡に道をゆづらねばならないのだ。彼は餓えた樣に彼の女をいだくか、または彼が彼の女をのろひいかる時に彼の狂氣じみた怒りの中にとび込んで行かねばならないのだ。彼はあれ狂ふ波にたゞよふ彼の腹の底から、壓迫された感情のヒステリーをよく感じてゐた。

彼は話した、しかし彼の聲は低かつた。それは嗄れたさゝやきにすぎなかつた。誰もその、常にない聲の背後に暴れてゐる嵐を推測することは出來なかつたらう。殊に、彼を八年前に知つてゐたよりも、より尠くしか今彼を知つてゐない婦人には解らなかつた。……そして、彼が死物狂に言はうとしたすべてのことは、口を出ずにしまつた。

彼、この演說者は、感情的に物を言ふにはあまりに內氣な偉大なる階級に屬してゐた。

「もう言ふことはない」と彼は舌が廻はらないやうに言つた。「首領達は俺に會ひ度がつてゐやしない」

彼の女は答へなかつた。彼の女は指の爪をとりながら坐つてゐた。子供はもう彼の數多い兄弟姉妹と一緒に、ひるまはつくりつけの寢臺の下に押し込でおく、移動する寢臺に入つてゐた。

無益と知りつゝ、彼はまた言はずに居られなかつた。

「奴等は、今日、ダン・モロイを引ぱつたんだ。巡査に言はせりやあ、泥棒をしやうとしてウロついてゐたんだ」

女は不平げに身を動かした。「罰があたつたんですよ」と彼の女はガミ／＼と言つた。「あの人は他の女と逃げやうとしたんです。そして、ケイチイだつて相應のことをしてゐますよ」

「誰が逃げずにゐるものか？」とバートンが言つた。「あの女の苦しめ方は！　いつだつて彼奴を苦しめ通したんだ。あの女と、あの女のはげしい友達とが」

「えゝ、そうですとも、あなた方と同じやうなお上品なお友達なのね。騷動さへありや、いつでも飛び出す、醉つぱらいの碌でなし」

「スティーヴ・ハリスが言つてゐた」と彼の女の夫はけだるげに言つた。「あいつは、內心にはほんとによいものを持つてゐるんだつて。それに、俺達は、どうしたつて、共産黨の中じやあ、愼みぶかい淑女ぢやあないからね。奴等ブル

ヂョアの道徳なんか糞喰へだ」

バートン夫人は、おそろしい熱を以つて腹を立てた。「えゝそうですとも、ヘン、ステイーヴ・ハリスだの、貴方方の共産主義なんか糞喰へだ」彼女は怒つた。

バートンは喘いだ。彼はアンが、口汚なく罵つたのを聞いたことがなかつた。彼女の周圍の女だちのうちで彼女だけが、そんなことをしない女と言へるのだつた。勿論、舊式な偏見には違ひないが、どことなくそれが彼の女と他の女達をひきはなしてゐた。

「お馬鹿さんね？」と彼の女が叫んだ。「まだあなたは道具にされやうとしてるの？　髮をちゞらして、ズボンは洋服屋の人形の様にきちんとしてゐるし、そいで奧さんとペイスリーに行くし、それから大勢の若い者はこゝであいつに作り笑ひをするし、こゝでステイーヴ・ハリスが困つてゐるんですつて？　えゝそうでせうとも、そいであいつは貴男やパツト・マツクダードやテリー・コイルや、それからその外あなた方みんなの背中をたゝくんです。そいであなた方をみんな自分が英雄だの雄辯家と思はせるんです。一體何の爲でせう。そりやわかり切つてますよ。あいつは選擧の時にあんた方をみんな、まるめ込んでうまくやらうてんです。そうすりや、誰だつてあいつをクライドサイドの偉物だと思ふでせう。それで共産黨はあいつに後一二年大氣取りでゐる樣に金をやるんです。その一方ではあなた方お馬鹿さんはみんな食ふや食はずなんですからね」

バートンは、驚いてたぢろいた。その攻擊は全く豫期しなかつた。

「アン、あんまり馬鹿な事を云ふんぢやないよ」と彼は辯護する樣に答へた。「ハリスが、金をもらつてないと云ふ事はお前だつて知つてるぢやないか。そして如何しても俺達が拂はふとしてゐるのは、あいつぢやなく勞働者達になんだ」

「金をもらつてゐる奴はろくでなしですよ」とバートン夫人は、さげすむ樣に云つた。「あいつがもらつてゐるつて云ふ事はあなたは知りすぎてるんぢやないの、知らないとすりやあなたは馬鹿だ。勞働者ですつて！　あいつのきたない生涯に一度だつてそつちに手を出したことのない、勞働者の爲にですつて！」

此は前面攻擊であつた。これは實のある、また彼が立向

つて戰ふ事が出來る何ものかであつた。バートンは、彼の内部におこる大きな滿足を感じた。これは昔の素直なアンたとへ彼の女が彼の一番神聖な神樣を攻擊してゐたとしても、であつた。物も云はずに彼の女は彼をうちまかす事が出來た。彼の女は沈默の動かし難い愚かさを持つてゐた。彼はたゞ言葉と論理の弱い武器を持つてゐた。議論では彼は彼の女をうちまかした。

「併し、それは勞働者の戰鬪なんだ。それはきつとお前にもわかるだらう？　お前は、俺に勞働者達を見棄てる卑怯者、裏切者になつて貰ひたいのか？　それはお前、米や醬油のための戰さ、女達や子供達のための戰ひなんだぜ」

アンは蔑むやうに笑つた。「えゝ、そうです。お前さん達の集會へ行つて、それから、お仲間のフラッキ者や、ゴロツキのところへ行つて、成程暮しのために働くより、大法螺を後生大事に聽いてる方がおためですつてお言ひなさいよ」

「アンや、アンや！」と、彼はもう熱心に、彼の眼に確信の焰を燃しながら抗辯した。「そんな風に言ふもんじやあないよ。俺がこのことに全心をこめてゐるのを知つてゐるだらう。それが俺の任務なんだ。俺はそのために、物事が判り出すとからずつと戰つて來たんだ。それは俺自身のためじやあない。それはスティーヴ・ハリスのためじやあない。それは共產主義そのもののためでさへないんだ。それは女達や子供達のためなんだ、クライドサイドで、支配階級が殺しつゝある子供達のためなんだ」

彼の妻は、苦しさうに身を慄はした。彼女は彼の眞劍なのを知つてゐた。彼女は彼が勇敢なのを知つてゐた。おゝ彼こそは本當に勇敢だつたのだ。この彼女の夫こそは、ハリスよりもコイルよりも、マレンよりも、この一團の誰よりも勇敢だつたのだ。彼は、自分の正しいと信ずることのためならば、裸足で地獄へまでも行つたに違ひない。そして彼の女もまた彼の事を誇つてゐた。このむさくるしいぼろ〳〵な着物を着た餓えた狼の樣な顏に暗いきつい眼を持つた男を誇つて居たのだ。しかし彼女は彼の內にある彼の女の誇をうちまかさねばならない。彼の内にある彼の女の愛をうちまかさねばならない。今、彼は彼の共產主義以外には彼の女の事など少しも考へなかつた。彼は彼女に接吻もしなかつたし、また氣輕な話もしないで、たつた一言云

ふとすぐ物思ひに沈んで行つた。
「女と子供ですつて！　えゝそうでせうとも、いつも他の女とその子供達の事をね」と、彼女は鼻をならして云つた。彼の女は彼の女の調子をそんなに亂暴にするつもりはなかつた。しかしやさしさは諸君が一つの目的の爲に五人の家族をそだてる時には諸君の聲を見捨てるものだ。「あなたは自分の妻や子供達のことを考へたことなんかありません。家のジムはあなたがワニットの處からひまを出された時に死んだんですよ。そして、今はそれがヂエニーの番です。ジエニーはもう死なうとしてるんです。あなたはあなたが一生懸命にかせがなければならない時に飛び出してばかりゐるんです。おゝ、あなた、あなたはめくらになつたのか？　氣が違つたのか？　私は餓えそうなんです。本當にそしてお乳も出やしない。それなのにあなたは私に女や子供の事を話すなんて！　おゝ神樣、みなさん、赤坊達、盲目の阿呆達！」
　ヒユー・バートンは不愉快そうに彼の席に身を縮めた。これは彼には初めてゞあつた。彼は幾回となく彼の聽衆にストライキに於て最も苦しむものは女であると云ふことを告げたのだつた。今それが自分の妻によつて告げられた時に今までたゞ言葉の上でのみ云つて居た事を目のあたり實現したのだつた。これは眞實であつた。そしてそれは彼には新しいことであつた。彼はそれをすつかり考へる必要があつた。餓える、しかり、それは本當だつた。そして子供等と共にこの屋根部屋でさびしく餓える、それはのろふべき事にちがひない。
　しかし、アンの舌は今やわらかくなつた。何年來の言葉の堰が破られた。そして彼女の感情の水は物すごく流れ出した。
「あなた方はみんな英雄ですよ、そうですとも、立派な英雄！　そしてあなたは「勞働者」にあなたのお名前がのるんです。「日々通信」にだつてのるかも知れません。もしあなたが幸に騷動の中に入つて居ればね。あなたは餓えて居ます。本當にね。でもあなたは群集の中に居て皆からおだてられて居れば空腹なんか忘れられます。そうして人々は何時も集合をして何かあなたの注意をひくんです。しかし私は話し相手もなくこの穴の中に居てたゞ赤ん坊がお菓子を呉れと泣きさけぶ時にお菓子がありやしないんです。ま

あどうでせう？　餓、餓、餓と云ふものがどんなものか本當に知つてるのは私です。いゝ食べ物を食べないんでお乳がもう出ません。寢床の上のぼろをはたこうとしてかゞむ時にふら／＼としてテーブルにつかまらなければならないのです。」

彼の女の感情のうしほは彼女の弱い體にはあまりに强かつた。突然の悲しみの爲に彼女の言葉はうろたえた。彼の女の肩はしほれた。彼女の頭はテーブルの上の彼女の兩腕の中に沈んだ。彼女は彼女の息を深く情熱的にせき込んでむせび泣いた。

バートンはぼんやりとして居た。何年もの間彼はアンの泣くのを見た事がなかつた。坊さんが彼女の愛し子を、みにくい塗もしてない棺桶に葬むつた時にさへも彼女は泣かなかつた、そして彼は婦人の泣くのを聞くのは決して堪えなかつた。……數年前劇場で、馬鹿氣たメロドラマの舞臺で女が泣いた時に、彼が彼自身を馬鹿氣たものにしない爲に彼の下唇をかんでむやみに息をのまなければ居られなかつた。一人の婦人が泣き叫ぶのが彼を亢奮させないのは全々その事に關心をたつた時だつた。彼はかたづけなければならない。あゝ、彼は彼女に彼のうでをなげかけたかつた。そして彼女に物語り彼女にやさしくしたかつた。しかしそれは彼女をとゞまらせないだらう。彼女は猶も泣きつゞけるだらう。彼はそれを知つてゐた。それで彼のあらゆる力はぬけ去つた。彼は如何仕様もなく絕望した。彼も又聲高くヒステリーの樣に泣き出しそうになつた。おゝ神、いやいや！　彼の頭はかしぎ、彼の背骨は疲勞のかたまりの樣になつた。否、否！

彼は彼のジヤケツと帽子を取るといゝかげんに身につけて家の外にとび出した。

長い間バートン夫人はテーブルによりかゝつて彼の女の全身をわなゝかせ、それをひきよせ又それから、あだかも彼女の內部に、何者かがふくれ上りまたくずれたかの如くにそれをたわめさせながら泣いてゐた。やがて次第に彼女は落付いた。淚の感情が長い間とぢ込めて居た失望のはりつめをゆるめた。赤ん坊はお腹がすいて眼をさましたのであらう。悲しい聲を出して居た。

彼女は夫が何處へ行つたか知らなかつた。しかし近頃夜出かける事がしば／＼だつた、それは夜にまぎれてしのび

込まふとする無頼漢をさまたげる爲の、張番に行くのだつた。それは彼をうたがふ種にはならなかつた。否フユーが何であらうとも彼は純潔であつた。彼は女の事に關しては眞直であつた。

疲れて、彼の女は上着をぬいで、寢臺のジエニーのそばに赤ん坊をだいて横になつた。どんな事があらうとも、子供達は暖めてやらなければならない。長い暗い數時間を彼女は、眼を見開いて暗闇の中をぢつと見つめて居た。電車は街を音をたてゝすぎてゐた。總ての音は、侵蝕性の液體の樣にすぎて行つた。下の上り口にある水溜は時をきつて一ぱいになりあふれこぼれた。二匹の猫が物騷がしく啼いた。

彼女の心は、平和を知らなかつた。思ひは思ひについだ。何故、彼女はフユーをあんな風に出て行かしたのだつたか？　只彼が彼女に一本の指をふれ愛しみの身ぶりをしたならば、もし只彼が彼女の泣いて居る時に話し掛けたなら。しかし彼はつらかつたのだ。つらかつたのだ。彼は彼女がやさしくしてほしかつたのが分らなかつたのか、彼は彼女が彼の圍りにうでをなげかけ彼に接吻しようとする彼女自身をおさへるのにせい一ぱいだつたと云ふ事を知らなかつたのか？　あゝ、もし、只彼が彼の女に話す時聲をやわらげやさしい目顔をしたならば、只一つの小さい事が彼女を過去からよみがへらす事がたやすい事であつたのだ。またもし彼女が彼女の誇りに滿足して、彼と共に行く事が出來たならば。しかし彼はつらかつた。彼は諒解しなかつた。彼は彼女が彼を女々しくし彼を共產主義からおびき出そうとしてゐるのだと考へた。しかし彼女は彼を女々しくしようと欲しはしなかつた。いやそればかりでなく、彼女は彼が勇敢であり眞直であり、獨立してゐるより外の事を望まふか。餓えるとはおそろしい。子供の餓えるのを見るのはなほおそろしい。しかしフユーはそれにまけるのは憶病だと云つた。そして、フユーこそは一番よく知つて居たのだ。彼女は政治の事は知らなかつた。餓える事は恐しかつた。子供達の餓えるのを見るのは恐しかつた。しかし一番恐しいのは、フユーが、彼自身に裏切るのを見る事であつた。彼は勇敢であつた。おゝ、彼は勇敢であつた。彼は正しかつたからこそ勇敢であつたのだ。彼は彼自身を信じてゐたればこそ勇敢であつたのだ。もし彼がその確信を失つ

たなら彼の勇氣はそれと共になくなるのだ。彼は外の人々の樣になつて何の役にも立たない長話をしたゞらう。

彼女は彼にあんなに亂暴であつてはならなかつたのだ。しかし子供達はやせた額、彼等の餓えた眼で彼女を追ひ、彼女に、彼女が言つてはならない事を云はせたのだ。これから後は彼女もまた、勇敢にならなければならない。あしたの朝になつたら、彼女は彼女の誇りをかくし彼女の内に居る惡い鬼を征服しなければならない。そした彼に自分がわるかつたんだと告げけなければならない。と、すれば、彼は彼女に接吻してきた、彼女を愛するだらう。それから、彼女はほとんど、幸福な笑ひをもらす程明日をたのしみながら眠りにおちだのであつた。

× × ×

色の無いどんよりとした曉方は屋根部屋の窓からさし込んだ。アンはその時下の通りのゝしりさけぶ物音で眼をさました。その街は朝の六時半から足音や話聲、人や動物の物音、車や蹄の音で騷がしいのが習慣だつた。

しかし今のはちがふさわぎだつた。怒る聲、叫びやのろひ、それから巡査の呼子の音。アンは驚いて、寢床からとび上つた。赤ん坊は眼をさますとキイ〳〵と泣き叫び初めた。彼女の夫、彼女の夫、人々は彼女の夫を追ひかけて居た。彼は張番の間に何事かしたのだつた。彼女はそれを知つた。彼女は寢間着のまゝで戸口に行つた。丁度彼女が戸口の處に行くとドアが開いて、フューがよろめき込み、彼女の足下にたほれかゝつた。物すごいたくさんの聲が、階段をひゞき上つた。彼は帽子もかぶらず、その頭のきづからは血が流れて居た。

「フュー！ フュー！」と彼女は叫んだ。「怪我したの？巡査にやられたの？」

バートンは、しつかり仕樣とした。彼の肩はたわみ彼のうでは前にぶらんと下つて居た。

「いや、そうぢやない、コイルや、マレンや見張りの者だよ」と彼は叫んだ。

「見張り？」彼女は急込んだ。

「うん、見張だ」彼は叫んだ。「皆んなが俺を追かけて居る！ 俺は、マァレーの處の夜業に行つたんだ、お前、アンの爲に、お前と子供の爲に、アン、接吻してくれ、どうぞ接吻してくれ」彼は彼のうでを訴へる樣にさし出した。

苦惱と狂喜の情が彼の餓えた暗い眼の中にあつた。彼女の頭は動いた。彼女はおそれでもつて、たぢろいた。彼女は彼女の手で顏をおほつた。

「卑怯もの！」と彼女は罵つた。「裏切者」

編輯室にて

今月は雜誌が九十六頁になる。そんなにも增頁していゝものであらうか？　いゝ加減印刷屋には迷惑をかけてゐることでもあり、增頁したからつて、貧乏世帶の職業婦人社に金子が湧いてくるものでもなし、と、こんな風な不景氣な一思案をしてから、やつぱり思ひ切つてやつてしまはう、といふ氣になつて御覽の通り厚いものにいたしました。

この頃のやうに「婦人運動」の存在が讀書界に認められるやうになつて來ては、どうしても世間並みに、一般の書店の店さきでも賣るやうにせよと、屢々私たちは友人や先輩からすゝめられるのでありましたが、やつと今月からそれが出來ることになつたのであります。

×

書店で賣つて貰ふためには、前の月の二十日には作り上げて發送してしまはねばならないのです。子供と、金策と、仕事と、講演旅行と、まるで千手觀音のやうに忙しい私には、每月定期の仕事であり乍ら、早く發行する樣に手順をつけることが、この數年間を通じて事實上不可能なのでありました。

然しこの頃は、手傳つて下さる友人が殖え、殊に力强いことには、最も責任觀念の强い事務家の平田のぶさんが、いゝ雜誌を拵へることゝ發行日を一定して早く出來上げるために、大變力をかけて手傳つてあげませう、と云ふことになつて、私は大助かりなのであります。

×

私は思ふのです。世間並みの雜誌として店頭に出すには、成るべく世間並みの量を盛ることも必要であらうと。今も、職業婦人社の會計は可なり苦しいけれど、非常な勢ひでこの頃殖えた熱心な讀者が、各地から助けてゐて下さるし事務所の仕事を手傳つて下さる方も、大分殖えてこの頃の私は どれ位ラクをさ せて供つてゐるかわからないのです。二三年前の子を負ぶつて働いてゐた頃のことを思へば、讀者をふやすことにも、いゝ內容を盛ることにも未だ〳〵私はもつと働かなければ、ほんとうに申わけがないと思つてゐます。

私は、この雜誌をもり育てゝゐて下さる皆さんのお力にたよつて、身分不相應な增頁を今度致していたしました。書店に出して販賣する樣にもしました。どうぞ未だ〳〵本誌のゆき渡つてゐない地方が澤山にあります。お一人が一册づゝあなたの周圍に擴めて下さいませ。（購讀に直接にお申込み下さる方が、ずつと双方に得てあります。）

×

別册として八頁分の會報を出して「職業婦人の家」の募金報告をも兼ねることにいたしました。職業婦人協會を中心にして皆さん、この會報紙上から、お親しく話し合はうでありませんか。いゝお友だちに勵まされること程幸ひなことがありませうか。

×

附錄版會報は、職業婦人協會の會員と讀者には勿論雜誌とともに發送しますが、「職業婦人の家」へ寄附をして下さいました皆さんにもお目にかけます。幾人分かをお世話下さつた方には。その方へ、全部まとめてお送りしますから、お手數でもまた寄附して下さつた皆さん に分けて下さい。

なほ、前月及び今月は募金報告のさきを急いだためにお前名と口數だけし かのせま せんでしたが、來月から、受領の月日と、在金全額とを併せてお知らせします。萬一ちがつた個所があつたら、その日以前に下さつた分で報告しなかつたりした分は、すぐにお知らせ下さい。

（む め お）

×

梅一輪一輪づゝのあたゝかさ

立春もすぎて、いつとなく春のやはらかな息づきが、私たちのまはりにしのびよつて來るのが感じられます。まだ風も冷たいし、朝毎にさむさは身にしむやうに思はれますけれど、でも春近い喜びは至るところに見出されます。

×

事務所の前のお濠の土手にも、青い草の芽が頭をのぞかせて居ります。まつくろな土の中からポツカリと出て來る双葉は、たまらなく愛らしい又たのもしい限りでございます。甦生の喜び、成長の希望、生命の力、さうした明るいさま〴〵の思ひを、春浅い此の頃の自然の中にしみ〴〵覺えるではありませんか。かうしては居られないぞ。力の限り働きませう〳〵！　何とも云へない力強さが、この私の五尺の全身にみなぎるのを感じます。

×

日も長くなつたし、あたゝかくもなつたし、いよ〳〵これから私たちの天下になつて來ました。上海玉子も、もつと〳〵上手にコロコロところがつて、革命運動にも集注するつもりですから、どうかみなさまも、もう一層のお力添を下さいまし。

×

最近いろ〳〵な會合に出席して思つたのは、どこにもこゝにも、若い私共の同志が、みなそれ〴〵にしつかりした意識に目覺めて、よい結束を保つて居られるといふ事でした。この一つ〳〵の塊がお互ひに手を取り、助け合つて行つたなら、どんなにか大きな力が生れる事でせう。そのためにも私たちは仲立となり、膠となつてお役に立ちたいとねがつて止みません。

×

本誌を愛して下さる多くの姉妹から、お心のこもつたお手紙をたくさん頂きます。短いハガキの端にも溢れるその強い深い友情を、たゞこのまゝにしておくのが惜しくて、今月から附録として發行される、會報にのせさせて頂きたいと思ひます。もつと打ちとけてお話し合ひませう。ゴシツプなどもどし〳〵すつぱぬいて、みんなでおなかをかゝえて笑ひませう。個人消息もお寄せ下さい。私たちの自由の天地としてこの會報を活用しませう。

×

春なれや名もなき山のうすかすみ（芭蕉）

春！春！　この春を心の限り生きませう。ではみなさまごきげんやう！（文子）

◇誌代はすべて前納にして下さい

前納誌代

壹部	貳拾五錢（郵税一錢）
半年分	壹圓四十錢
壹年分	貳圓八十錢

送金法

送金は振替が一番便利です。
誌代の受取證は別に出しません。
雜誌發送を以てこれに代へます。

昭和四年二月廿八日　納本
昭和四年三月一日　發行

東京市牛込區市ヶ谷本村町四
發行編輯兼印刷者　村山文子

東京市神田區淡路町二ノ三
印刷所　協營社

東京市牛込區市ヶ谷本村町四
發行所　職業婦人社
振替東京六四一六〇番

長谷川時雨氏・神近市子氏・今井邦子氏序

生田花世小説集　（四月上旬發賣）

燃ゆる頭

私は『女子文壇』『青踏』『ピアトリス』『處女地』『ウーマンカーレント』『苦草』『女人藝術』等の寄稿家として今日まで歩いて來ました。この間約二十年長短とり交ぜて二十六篇の小説を今こゝに上梓することが出來るやうになりました。何といふのろい歩みであつたことでせう。（著者言）

内容一斑

群来と母子・灯ともし頃の會話・繼子・羽子板をかゝへて・燃ゆる頭・ある秋の夕のこと・獅子は抗しがたし・三角關係の一端より・除夜・櫻の町・小松原・風鈴・父母への書・南方の桃源郷・不勉强同盟

東京市小石川區大塚上町十五　中西書房　振替七二〇五番

大正十三年十一月二十二日 第三種郵便物認可
昭和四年二月二十八日 印刷納
昭和四年三月一日發行（毎月一回・一日發行）

昭和四年三月一日印刷發行
大正十三年十一月廿二日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
『婦人運動』第七卷第三號（附錄一號）
編輯兼印刷人 村山文子

婦人運動 附錄版

與謝野晶子

婦人運動の第一線へ出で活動することの出來ない境遇にある婦人達に、わたくしの望むことは、その周圍の男子達の婦人觀を正しくするやうに努力して頂きたい。それは理論で承認を要求する態度でなくて、皆さんの實際生活が感情的にも活動的にも、立派に男子達と對等に並行してゐる事を示すことによつて、婦選はじめ、すべて今日の婦人の要求してゐる所の正しいことを、男子達に承認させて頂きたいと思ひます。

どの家の男子にも正しい婦人觀を確立せしめること、このもつとも實際的な婦人運動を各自に決行せられるなら、その効果は、黨派心と利權慾の外に何もない代議士などにこう頭して屈辱的な婦選運動をするよりも偉大であると思ひます。

但しこの運動は、男子に寄生してゐる不勞無力の婦人達には不適任である。さういふ弱味のない農村、工場、敎育界およびその他の職業婦人の大多數に由つて行はれねばならない。都會の女中達も立派にその有資格者であることを自覺して欲しい。

ゴシツプ

ツ ラ ラ

加藤さんは、事務所の奥の間で、おぐし上げに餘念がない。ふと目を上げた文子孃、

『加藤さんのおはなからツラヽが下つてる！』

と三軍を叱咤する聲をあげて報告したので、開地女史何條もつて默してあるべき。

『鼻よりツラヽ下りけり。』

そこをすかさず文子孃がつけて、

『朝寒や』と出た。で、こゝに古今の名句が出來上つたわけである。

『朝寒や鼻よりツラヽ下りけり』

ところで加藤さんはおかへしとして、

『鼻水に老い知る今朝のさむさかな』

と、ものされた。なんと風流な職業婦人社の人達ではありませんか。

お■末さま

農村青年共働學校で、岡本氏夫人のお心づくしの晩食に舌皷を打つて居た奥女史、挨拶に來られた岡本氏が、

『どうもなんにも御馳走がありませんで』と云はれるのを受けて、

『いゝえ、おそまつさま。』

とすました顔に、さすが謹嚴な岡本氏も、あつけに取られて、微苦笑をもらされたとはさしありなん。

奥むめお

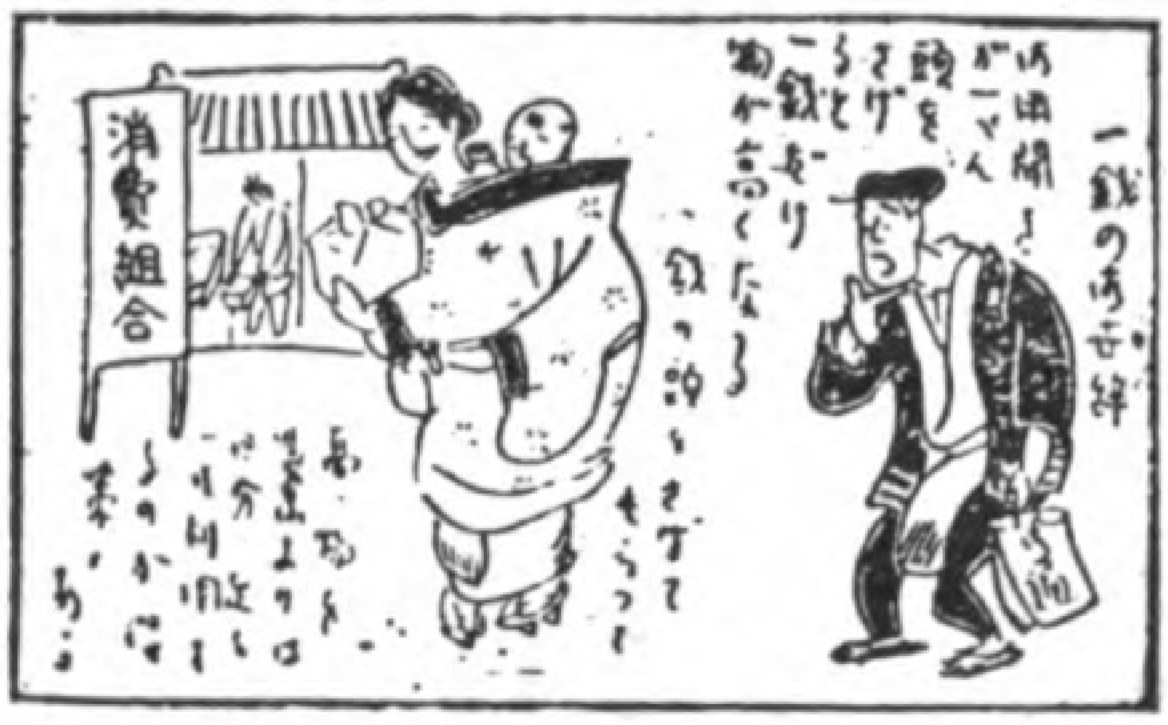
春が來ました。春の野べに思ひがけぬ處で草の芽木の芽をみ出すときの、あの喜びを私は忘れることが出來ません。

一日々々と暖かく明るくなつて朝起きるのも樂しく、町を往くのも樂しく、洗濯物もキラ〳〵と輝くやうによく乾くし子供たちは着物が輕くなつて一層はしやいで跳ね返る春は、職業も勞働も何となし身も心も輕々と働かれて爽快であります。

と云つたところで、自然の恩惠に眠りこけて、今日のやうな社會の諸制度の下で女としての私たちが締めつけられてゐる手のかせ足のかせを忘れるほど呑氣坊主にはなり切れないのですけれど。

私の日常は非常に忙しい。私の友人たちもみんな忙しい。然し何故忙しいのでせう? 私は、もつと〳〵有要なことで

着物の裾が切れて困ります。初めの裾縫ひの時裏を一分程引つこめて付ます。後で八掛の共切れを五寸程の長さに身幅だけ綴ぢつけて、この布で二分なり三分なりのふきを出しておく。裾が切れた時この共切をつけ直せばよろしい。



オキシフル、よい清潔劑です。怪我の時脱脂綿にこれをにぢませ傷につけると白泡が立ちますからそれをふくとゴミも血塊や膿も綺麗にとれて傷が早く治ります。量は五倍乃至十倍液、又口のくさい人はこれで含嗽をするとよろしい。

友のたより

下山あき子氏……(東京より)

募金袋の追加 六十枚お願ひしておきましたが、至急お屆け下さいませ。私共の會社だけでも婦人が三百八十人程ゐます。同じ資本系統の會社を合せたら、どんなに多いか解りません。何とかついでを以て、この會社で祿をはんでゐる婦人にみな袋をつめて貰はうと、S子さんと一生懸命やつてゐます。××生命保險會社の栗原さんからの袋もあちこちに飛躍してゐます。

河野年子氏――(豊橋より)

お手紙に依りますと、お子様も次第に御成人にて、お樂しみ多きことゝ存じ上げます。

先年東雲座(トヨハシ)の講演會のとき大場社長から、あなた様が乳呑兒を御同伴、御盡力下さると伺ひ何とも云へぬ有りがたい、嬉しい氣持でありました。私も高知にゐました頃小學校に奉職してゐましたので、教育會などの時は長男を女中に、長女を自分がおんぶして出席しました。夜の講演會などには机や椅子の上に子供をねかせてお話を聞いてゐました事など思ひ出し、獨りほゝえまれます……今では九人の

忙しく働く社會が早く來てほしい、といつも思はれてなりません。

×

「家」が建つさうですね、貧者の一燈を屆けます。」

といふ有りがたいお便りを、私は毎日のやうに知らない友人から貰ひます。知つてゐる友人からは勿論ですが。

婦人は未だ社會的に自覺してゐないといふ望月内相その他の言葉は、何を根據にしてゐるのでせう。あの醜議院につめかける婦人の數が未だ足りないといふならば、私たちはその愚かさを嗤つてやりませう。「私たちにはもつと大事な職務が外にありますもの。」と。

「家」に寄せられる熱誠なる好意を通して、この頃の婦人がどんなに社會的關心をもち、どんなに本氣で社會的に協力しやうとしてゐるか、その證據を、私は「これを見ろ」と見せつけてやらねばならぬ責任を感じないでゐられません。

雨風が直接に當るやうな臺所や勝手口などの障子の紙は、すつかり張上げて乾き切つてから、大根のしぼり汁を刷毛につけて塗ると丈夫になります。油で紙一面に模様をかいても寒天を煎てうすく溶かして塗つてよろしい。



疊の上に油をこぼした時、しばらく其の上に新聞紙をひろげ灰をのせて置くと吸取ります。又疊の上に灰をこぼした時はしほを振りまいて掃取るとよろしい。毎日の茶カスは捨てずに座敷掃除の時まいて掃出すとゴミが立ちません。

子の母でありますが、世間では子供があると中々引込みがちになりますが、これは本人の覺悟次第と存じます。全て、女が子供を厄介がらず苦にせず、どこへでもつれて出歩いて社會的にもよく働きたいものと思ひます。（以下略）

松尾幸子氏——（小倉より）

この度は大變に結構な御計畫にて、この上とも益々御奮闘の程願ひ上げます。田舍者のことゝて、何もお加勢できませぬ事を誠に殘念に存じます。けれど先生方の御奮闘振りをいつも蔭ながら嬉しく存じてゐます。お送り下さつた廿錢袋十枚分と、外に私の寸志とをこゝにお送り申しますから御受取下さいますやう……

淡谷なほ子氏——（青森より）

何か書いてお知らせしたいと思ひますが、私には書けないのです、どうぞお許下さいませ。

此頃は毎日吹雪の音を聞きながら、ストーブの側で自分勝手な仕事をして暮して居ります。忙しく御活動なさる皆様にすまない氣がします。

來月の始めになりますと、またリンゴの枝切りが始まるのです。山の家は半分程雪にうづめられて居ります。吹雪の中はスキーで歩くのもいゝ氣持です。冬の間に是非一度お出になりま

大自然をみつめて

村山文子

たそがれ

太陽が西に沈んで、茜の空がだん／＼と紫に變つてゆくあの黄昏の様を私は好む。

閑寂――否、たゞ夕暮の靜けさとのみ呼びたい。刻々に變つてゆく空の色、一秒時と雖も停滞する事のない大自然の營み！　私はその前に驚異と尊敬の眼をみはる。

大地

大地をみつめるとき、私は母の愛を思ふ。霜どけのまつくろな土の上に、頭をもたげた草の芽は、母のふところに抱かれて、愛らしい目をパッチリとあけた幼兒の様を思はせるではないか。

あたゝかい陽の光に照らされて、若草は伸びる、母の愛を受けて人の子は育つ

月

月の光の美しい晩は、私の心も靜かに優しく潔められる。この月は遠くはなれた友の上をも照らして居るだらう。その昔兼好や芭蕉や西行が、無限の詩魂を寄せたのも、この同じ月であつたらう。やむごとなきみ住居に榮える月は、又賤が伏屋にも、その破れし屋根から音もなく訪づれるであらう。

あゝ月！　科學者はいふ。

「月は地球の周圍を自轉しつゝ公轉する一つの衛星にして、既に冷却し、死塊と化せるものなり。」と。

科學の教へるところに依れば、やがてこの月を地上から望み得ない時が來るのであると。われ／＼地球人に月を見る事の出來ない日がやがて來るのであるといふ。

しかし月は千古の謎を秘めて、夜毎に中空に高く輝く。

月のあるかぎり、星の輝きを眺め得るかぎり、詩や歌は私たちの心に湧き溢れるだらう。私にとつて月は永遠の尊い寶石である。

せんか。

こちらの農村婦人は、まだ封建時代そのまゝの生活をして居ります。BC（産兒調節）運動について勉强することがありましたら、お手數ですが教へて下さい。

根市きぬ子氏――（青森より）

今年は、當地ではずい分雪がつもりました。寒さも可なりです。皆さんお丈夫でゐらつしやいますか。

「職業婦人の家」については、様々の方面にわたる御活動の様子をみて嬉しく思つてゐます。地方にゐては、ほんとうに思ふまゝのお手傳ひが出來ませんが、ともかくお預りした募金袋だけどうやら綴りました。

知り合ひの若い娘さんたちが、喜んで袋を充たして下さつたのは、實際豫期以上のことで嬉しうございました。

吉川年子氏――（神奈川より）

……勞働に荒くれた手を恥しいとそればかり氣にしてゐました私が、先生の指さきのあかぎれを拜見して胸がつかへました。微しい勞働をおいとひもなく私たち無自覺な婦人のために働いてゐて下さることを思ふと、ほんとうにぢつとしてゐては勿體ないと思ひます。及ばず

▲問答欄▼

【問】東京市内で、確實で便利で安上りな婦人宿泊所を敎へて下さい。（埼玉浦部よしの）

【答】確實な人の紹介で部屋借りをして自炊をしてもよし。次の宿泊所も比較的安價で便利で確實です。（やがて小石川淸水谷町に理想的な建物が出來ることになつてゐます。

◇淺草寺婦人會館

淺草公園觀音堂裏（市電雷門下車）

薄幸な婦人の簡易宿泊△人事相談△一泊十五錢△食費一回十五錢△事情によつて全部の食事を給與す

◇大谷婦人會館

淺草松淸町三九（市電菊屋橋下車）

有職婦人及び女學生の宿泊△一ヶ月全部で十五圓△但し一疊に一人の割合

◇愛國婦人會購保館婦人宿泊所

本所外手町八四（市電石原町下車）

有職無産婦人の宿泊を主とする△一時的簡易宿泊もあり△一日五十五錢△本人の事情によりて全部を給食する事もある、もつとも支給時期に制限がある△子供を連れた婦人のために特に『母子收容』の設備もある

◇四恩瓜生會婦人宿泊所

小石川辻町一三四（市電辻町下車）

薄給有職婦人の長期宿泊△女學生をも收容す△一ヶ月十八圓△二疊に一人の割合

◇キリスト敎女子靑年會婦人宿泊所

小石川關口町一九七（市電江戸川下車）
△小石川水道町二八（市電傳通院下車）
△牛込納戸町四五（市電北町下車）以上三ヶ所

有職婦人及女學生の宿泊所△一ヶ月廿二圓△一學期毎に廿八圓の會費を徴收す。

とにかく獨身婦人が安心して住める樣な家――それも安上りに便利に生活できる設備を婦人側がもつともつと要求して國家社會に建てゝ貰ふべきであります。

乍ら村のために働きたいと思ひます。御導き下さいませ。

橋本たか子氏――（小倉より）

窓の海けふもあれてゐる娱爐かな

山本久子氏――（靜岡より）

御手紙有難う存じました。

『婦人運動』――所あまさず拜見致しました。何といふ緊張味の溢れたものでせう。多くの方々がかくも眞劍に根限り働いてゐられる樣をみせつけられまして、私は自分の身を省み、いさゝか恥ぢないではをられませんでした。忙がしくて困るなんて時々こぼした自分は、又何といふ世間しらずの愚か者だつたらうと思ひます。世間の事はあまり知らずとも別に困らないかうした田舍に居りますと、とかく無刺戟で、はつらつな氣分が失せて參ります。さうした時に『婦人運動』は大いに私を刺戟し、めざましてくれる者と考へます。

×

みなさんからいただくたくさんのお手紙を、拜見してそのまゝにしてしまふのが惜しくて、その少しばかりをこゝにのせることにしました。ほんの一部分ですが、かうして皆樣と親しくお話出來るやうになつたのを嬉しく思ひます。



職業婦人の家

募金報告

募金袋の反響が素晴らしいものです。もう一息一人でも多くの方々に廻して下さい。帝國教育會の野口援太郎先生が全國の女學校、東京府下の小學校へ推せん依頼狀を出して下さいましたからその方からも袋が廻つてゆくかと存じます。どうぞ何分よろしく。(入江秋子)

募金袋を充たして下さつた人々

村龜之助、岸八重、梅田安子(二)玉野重次郎、中川彌治、石川貞江、内田きぬ子、田代金吾、竹内すみゑ、金子サヨ子、白井まさゑ、米田清吉、酒井一男、大畑美代、白井千、安川やい、澤柳友枝、豊島サク、古田重太郎、城照雄、矢野いね子、安村トク、野本靜枝、野口孝、中村富士子(二)鈴木ナカ、佐藤定、岩崎せい子、金子サノ子、富田ヒサ、庄司はな子、坂口みる、内田ユキ、鈴木いね子、小林昌吉、高木ふく、岸榮、高橋小十郎(三)大野富(二五)宇田河喜美、尾崎海治郎、柳川正保、大石豊治、佐賀眉風、熊谷フミヨ、青木五郎、菲村甲子、土屋保造、喜多村三義、齊藤吉之助、柴崎環、石原憲政、草場直二、田村徳治、内村賢造、平塚明子(十)岡本翼、飯塚好市郎、和光章、成城學園母の會(三十九、五)長岡照子、矢崎忠藏、德田主太、今村千春(十)矢崎幾藏、平田市藏田崎たけ、水田洋子、宮田今、小笠原元、吉田ヨシエ、弘瀬潔、石原憲政、石渡藤吉、仲俣春江、弘瀬孝猪(二、五)加藤美代子、石川信太郎、青木五郎、池田とめ、鈴木秀紀、青木丹治、尾白、小林孝治、福田豊、山崎武彦、齋藤純、武繁誠、近藤進一郎、伊藤長吉、川原廣太、山B子(二)青木延一本多伊三郎、加藤金次、下村濱子、山本茂太郎、高野登美雄、白山政造、澤田久雄、小森卯三郎、七字勝彦、藤岡誠次、森脇達夫、原田彦成、奥谷權治、高津利雄、原喜平、相蘇米藏、三橋孝、堀廣次、佐藤なみ、遠味圭三、八島健三、安澤秋子、戸田いと、澤井末之助、佐藤文三、近藤靜子、川田史郎、吉田貞子、小山みね、畠山保三、小林三郎、竹内俊吉、玉川佐市、小島、神藏忠助、河部泰雄山本とも子、川端柳之介、渡邊理一、相馬重一、山本富貴子、岸上、中島、横岡美津惠、林フサ、森田茂一、吉本勉、根岸まさ、後藤けさ、三松、西坂義雄、山本秀造、濱野榮子、圓生、石塚一英、前田つぎ(十)昭沼てる子、水野谷英夫、矢島、谷村勇(十)小林文子、柳谷哲枝、鈴木ふみ、杉山幸(五)白井カツ子、志賀、玉川直清、森宗平、高原松子、安野錠藏、野副ますえ、平塚しに、大塚 子(五)佐々木彦之助、沖平八郎(二)平塚仙二、鈴木喜四雄、秋山八郎、萩本誠堂、平塚すゑ、安野嵩命、スミレ美容院、秋本房子、平塚竹峰、松永光惠、安野アイ子、上田アヤ子(二)平塚芳文、濱田銀三郎、山村定之輔、高橋てい(二)吉野政子、立松政子、松本喜一、大塚巳之助、木舟澤みえ、立松七右郎、小熊美作、海老原春吉 早川徭代、安野さだ子、山崎薫(五)高烈さだ、桑原きん、狩野てつ、小野うら子(十)高橋末子、小原謙次、北澤山延、佐々木あや子、青柳篤恒、酒井和夫、KT生、東儀俊榮、二井、安藤靜司、角居正庚、野間久治、太田口出世、若泉要三郎、小林善政、北山晨、山田光得、延部保、和田山路、小倉長之、須藤淳之助、小松進一郎、星野遠太郎、吉田富子、紅林、鈴木龍三(五)村田久萬男、淺羽文二、宮田、松岡正男(十)赤松要吉、塚越菊治、無名氏、戸梶花子(十)馬場曉子、青柳順一、出版部無名氏、錦織剛男、德山靜葩(三)勝部文郎、下田扱ヒ(二十五)渡邊喜美子、關根ハルノ、高岡成善(五)有山保、山賀周司、志賀ヘマ、成田英子(十)無名氏、青木登美、廣谷節子、佐藤比知(十)森田タネ子(五)志村みさを(二)澤田とし、香月登美(二)正木、宮澤かつ子、五味ヨシ、田邊、坂本トシ子、豊崎道子、白熊光、橋本、山下芳子、落合芳夫(五)鈴

木濱、岸、岡クメ、富岡あい子、川上喜代子、川端柳之介、竹本ノブ、高橋ほなみ、嘉瀬美代子、平凡社(二)佐古田トメ子、山木喜代子、右田早苗、宮川保、正木ムラ、松本利子、松島柳子、酒井その、佐野ヤスヱ、渡邊採、正田淑子、近藤賢三、渡一子、坪井百枝、高島普羽、池田貴多(二)岩本壽々、山田ますみ、エル・シーマリキントン、本間ウメ、玉田すゑ、山田一雄、二階堂粂代、鵜殿一郎、熊澤元江、森本峰松、レナスコット、高武冬、丸山時江、森本彩、齋藤和子、志茂トキ、宇野靜子、森本くら、山本こと、山口トヨ子(十)渡邊チヨ子、森脇芳子、細谷和子(三)天野トモ子、柳下久子(三)足立きみ、小林きん(二)崎村ヒサ、都鄙たに(二)奥田こいな(二)仁連木はま、杉浦智惠、H生、中村リウ(二)近藤よしみ、水上富美子丸西博子、加藤貞子(二)廣瀬せい、出野宮いさ子、古田タカ子、岸ふさ、遠山千代子、濱わか子、岩城はな、駒屋花子、上岡屋子、無名氏(九)武田萬亀子、富田文、奥田ますゑ、平井久代、鈴木愛子、中村翠尾、三浦きよ子、川口あや子　日吉孝子、高松よし、原田春子、T生、享子、吉津小千代田邊採、加藤吉子、信子(五)下田扱ヒ(三十一)二宮ヨネ子、角南菊代、磯崎きん、杉崎澄、松屋南子、鶴宮恒子、渡井君子、佐藤とし子、松延さと子、楠瀬春美、加藤ゑり子、渡邊富代、古賀百合子、楠瀬龜、黒澤ハル、大池澄男、梶澤よし子、

宮地信衞、學生、川口あや子、新妻寓子、大崎克意、二學生、大西陽子、植田濱子、入交不美、學生無名氏(四)牧坂あや子、高橋惠美子、松浦けい子、皆藤えな、大和正枝、我妻菊子、有賀千枝子、片村ふさ、藤好うめ子、氏原梅子、松田光江、小山とし子、大門よね子、濱口良子(三)柿本初江、古川秀子、上代たの、太田好(〇、五)徳江キク、山下春江、宮地力造、馬飛彈きん(〇、五)小川秋子、大井清、稻垣、本田奈三、西村富美子、村田キク江、細井照子、千秋八千代、齋藤るい子、長岡アヤ子、古闌福山、上野山喜、田中道子、武内やす子、長谷川靜枝、無名氏、濱年子、妹尾シマ子、竹越富貴子、近藤みや(〇、五)酒井千代、廣田トミ、堀豊次郎、竹内福三郎(〇、五)山上光枝、谷ロフジ子、山口(二)小柴愛子(〇、五)鵜澤ふく、前田フジ子、富士野フミ、高橋千代子(〇、五)佐山みよ(〇、五)寺島恭子(〇、五)川口(〇、五)酒井千代子(〇、五)引頭、隅川(〇、五) 山田(〇、五)林次郎、松本、高橋キク(〇、五)長谷川茂子、鈴木鈴枝、荻原トミ江、川口清子(〇、五)奥津とり子(〇、五)魚住初江、山田眞子、山田きん(〇、五)近藤シヅ、丸山信次、小黒ハナ、北村末子、小林あさ、山川　品川、鈴木政子、鈴木小伊之、石井はる子、手島ツネ、福田美與子、坂田愛子、阿部きよ志、松崎壽惠子、有働千代香、牧きみ(〇、五)赤井彌市、福島修一、三浦清明、中西すゝ子

(〇、五)谷井(〇、五)杉本、田多中(三)古島威、高橋仲子、水越國治(三)夏目シゲ子、中村恭太郎、水田友吉(〇、五)河野千里、稻垣ゆたか、石井治平、江坂幸次郎(二、五)河野和、太田小菊、無名氏(二)鳥羽勝子(十)河野友、間瀬ますゑ、大高昭喜、正田氏扱ヒ(八、五)河野由紀、高橋みさを、直野田辰雄、服部氏扱ヒ(四、五)田澤きぬ坂本とく、松島幹夫、徳江氏扱ヒ(七)川本かつよ、廣田いち、三宅義枝、河野省一郎(五)磯部乘月、高力かつ子、山下爲次郎、河野年來(五)丸山冷子、竹尾とめ、野上阿佐猪(五)河野愛(五)明石きぬ、田中花子、清水ふみ子、吉本鶴子、近藤雪子、戸梶清子、塚本政一、無名氏(三)島中德子田村秋衞、勸業銀行(二五)齋藤妙子(三)矢野坂惠、田村君子、山本君代、池田むめ(四、五)松浦千代子、安岡米尾、元ヤスヱ、加藤勘十(十)岡林政喜、中山くすゐ、長田ヤヱ子、白井千(十)畠山傳、北添榮、柳橋けい子、鷲尾和子(十)畠中孝子丹羽久子(五)酒井鐵子、根市きぬ(十)戸梶きみ子、中村きく子(五)福西ヒデ、畠山花惠、戸梶花子、畑山八重子(五　太田豊子、松浦勝道、戸梶千代子、中野忠雄(五)原口(二、五)高山里司、三守芳郎、山本キク、菊地憲司、高橋敏郎、岩佐碇、増田民雄、伊藤とし子、小川道、栗原寅次郎、大庭あさ(二、五)那須貞子(二)桑島武義、靑木十郎、隈本英、神山美智子、宮内與三郎、(以下次號)



◇豊橋て讀者會

時々汽車にのるのでトヨハシ通過のときはきつと下車しませう、と約束してあり乍ら素通りばかりしてゐた。久し振りに思ひがかなつて會合にも出られて嬉しかつた。然し、ほんとにあわたゞしい會合であつた。今度はゆつくり時間をとらう。

◇豊田村女子青年團

神奈川縣の豐田村女子青年團の人たちは百姓仕事を手傳ひながら、獨學してゐる人が多い。その人たちに依つて獨學青年聯盟の支部が婦人ばかりでできた。そこへ招かれて行つた來たのだ。現在の敎育制度が金子のある人にばかりよく、金子がない者は頭がよくても浮ばれない。私もこういふ制度を根本的に改造して、もつと自由に、もつと萬人に手近く勉强できる様に何とかしたいと常に思つてゐる。何か、娘でできる內職仕事があつたら、團體としてそれに從事しつゝもつと勉强してゆきたいと相談をもちかけてゐるので、私も考へ中です。

◇所澤女子青年團

右と同じやうな趣旨でできた新しい婦人の團體が、所澤の女子青年團の中からも生れ出た。こゝにも元氣な人が五六人ある。

◇埼玉縣北甘樂郡女子青年會

組合製糸に働いてゐる人が多いといふのに、年若いのにも似合はず農村振興のために、私たちはどんなに働いたらいゝかといふ熱心な質問をうけて大いに話合つた。

「職業婦人の家」後援會成る

こんど「家」の計畫に贊成し熱心に援けてゆかうとして下さつてゐる人たちに依つて「職業婦人の家」後援會ができました。

すでに名義だけでない贊助員があつて萬事相談にのつて下さつてゐる上にまた後援會が、募金運動を一層組織的に有力に進めるやう援けて下さることになつたのです。

後援會の委員

生田花世　西川きく子　德江道世
加藤和子　吉岡彌生　栗原梓
上田きよ子　丸岡秀子　松岡嘉子
馬島久子　前田つぎ子　赤松明子
佐野すゞ　正田淑子　神　琴子
廣瀨すみえ　森園その子　鈴木小松

婦人消費組合
委員長　吉岡彌生氏
會計監督　鈴木小松氏

昭和四年二月廿八日印刷納本　昭和四年三月一日發行
大正十三年十一月廿二日　第三種郵便物認可
「婦人運動」第七卷第三號（附錄）
編輯發行兼印刷人　東京牛込區本村町四　村山文子